

城郭建築の粹

- 6 グループ学習。  
▽グループに分れ配布した文圖を讀本と對照して研究させる。  
▽場面毎に層意を確める。  
▽ゆつくり時間を與へて。
- 8 演習。  
▽反覆通讀させて見取圖を描かせる。  
▽全課の通讀。  
▽一気に全課を讀破させる。
- 9 全課の通讀。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 10 範讀。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 11 文意の確認。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 12 低音讀。  
▽城の堅固さや其の美觀を想像に描かせてノートを經てて提出させる。
- 13 第三次指導  
通讀練習。
- 7 一場面毎に層意を確める。  
▽ゆつくり時間を與へて。
- 8 演習。  
▽反覆通讀させて見取圖を描かせる。  
▽全課の通讀。  
▽一気に全課を讀破させる。
- 9 全課の通讀。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 10 範讀。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 11 文意の確認。  
▽一度通讀し觀點を指示して追讀させる。  
▽文意の存在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 12 低音讀。  
▽城の堅固さや其の美觀を想像に描かせてノートを經てて提出させる。
- 13 第三次指導  
通讀練習。
- 7 試問。  
▽此の城を攻略すると假定して作戦を工夫さ
- 2 個讀に自由讀を交へて。  
話合。  
▽最も感心した點や成程と思つた事等を自由に話合はせる。
- 3 會讀。  
▽グループに分れ城の威容や美觀を一層詳しく研究させる。
- 4 演習。  
▽繪圖を描かせ個有名詞や門・丸・櫓・天守等の略畫を添へさせる。
- 5 話方練習。  
▽案内役を買つた氣持で、實感的に、更に通讀させ次の觀點から吟味させる。  
城構の特徴。  
どこが優美か。  
何の爲の築城か。  
戰略上から見るとどこに強味があるか。  
我が城郭建築の粹たる所以。
- 6 案内役を買つた氣持で、實感的に、更に通讀させ次の觀點から吟味させる。  
城構の特徴。  
どこが優美か。  
何の爲の築城か。  
戰略上から見るとどこに強味があるか。  
我が城郭建築の粹たる所以。
- 7 試問。  
▽此の城を攻略すると假定して作戦を工夫さ



- 8 文意の確認。  
せて見る。
  - 9 文の観点を指摘して文意の所在を確める。  
朗讀練習。
  - 10 適宜に範讀を交へて。  
學習事項の整理。
- ▽内容方面では城の威容と美觀・形式上では構想・措辭・其他表現の勝れた點等。

テスト問題

- 一、次の文を解釋しなさい。
- 1 中國・西國の大藩を目の上のこぶと見た家康が、輝政をしてこゝに金城鐵壁を築かせたのは、まことに故あることと考へさせられる。
  - 2 みやびやかな唐破風、すつきりした千鳥破風、それらが上下に重なり、左右に並び、千鳥がけに入れちがふさまは、まさにいらかの亂舞といひたい。
  - 3 激しく押合ひもみ合ふ彼等の足もとは、意外にも深い谷底が口をあけて待つてゐるのである。寄手が勢込めば込む程、恐らく此の見せかけの廣場が役立つに違ひない。

- 11 補充説話。  
▽我が國の名城、例へば江戸城・大阪城・名古屋城・熊本城等。
- 12 暗誦・暗寫練習  
視寫・聽寫練習。
- 13 新出文字の書取。  
語句の應用練習。
- 14 1g テスト。
- 16

二、次の上下の句を番號を付けてつなぎなさい。

- (1) 白鷺城の名にそむかぬ ( ) 北東を押さへてゐる
- (2) からめ手の門は ( ) 層々と頭上にのしかる
- (3) 殆ど門毎に ( ) 稍越しに見える
- (4) 石垣・塀・櫓が ( ) 道が曲折する
- (5) 白壁が松の ( ) 名城である
- 三、次の語句に振假名をつけなさい。
- |           |       |        |
|-----------|-------|--------|
| 1 唐破風     | 2 矢狭間 | 3 美の極致 |
| 4 嚴重な門    | 5 渡櫓  | 6 金城鐵壁 |
| 7 乾の天守    | 8 迷路  | 9 堅固な城 |
| 10 城郭建築の粹 |       |        |

第十一 鳥居勝商

常山紀談に依り鳥居勝商が鬼神も泣かす忠節を稱へたもので、士風を振作し士氣を鼓舞すると共に前課の城と機縁を持たせた點に本課の着意がある。歴史美談の價値は單なる美談に止まらず、其の心意氣が現在の國民生活の上に強く生きて居る點にある。勝商が滅私奉公の殉忠精神と今次事變に一命を堵して君國に報いる將士の心意氣は其の根本に於て何の變りも無い。

長篠城主奥平信昌も武田勢の持久戦には遂に抗す可くも無く、自ら進んで城を枕に討死するか、城兵に代つて切腹すべしと最後の臍を固めた時は、決死の大任を買つて出たのが勝商である。信昌も其の心意氣に痛く感激し、汝が死後は必ず其の子息を重く用ゆべしと誓つた。然し勝商は喜ぶ色も無く、臣は我が子の故に命を棄て申さず、城主を始め城兵總ての者の爲此の舉を敢て果さんとすと答へたのであつた。何たる悲壯事であらう。然も彼が單身城を拔出し使命を全うした勇氣もさり乍ら、最後は城外に立ち敵の白刃の前に大聲豪語した壯烈さに至つては、鬼神をして尙泣かしめるの慨がある。我々は此の心意氣を今日あたりに事變の上に見る。天正と昭和、時を隔て代を異にして居るが、武人の氣魄に至つては一脈相通するものがある。勝商死せずと言ふべきであらう。

愛知縣南設樂郡の長篠城址を、豊川沿ひに少し下つた東郷村有海に勝商刑死の址があり、其の忠節を記念した忠魂碑は大正元年奥平伯爵に依つて建立され、城址に祀る靈社と共に參詣の人が常に後を絶たない。

文字語句

新出文字



請否衛

讀替文字

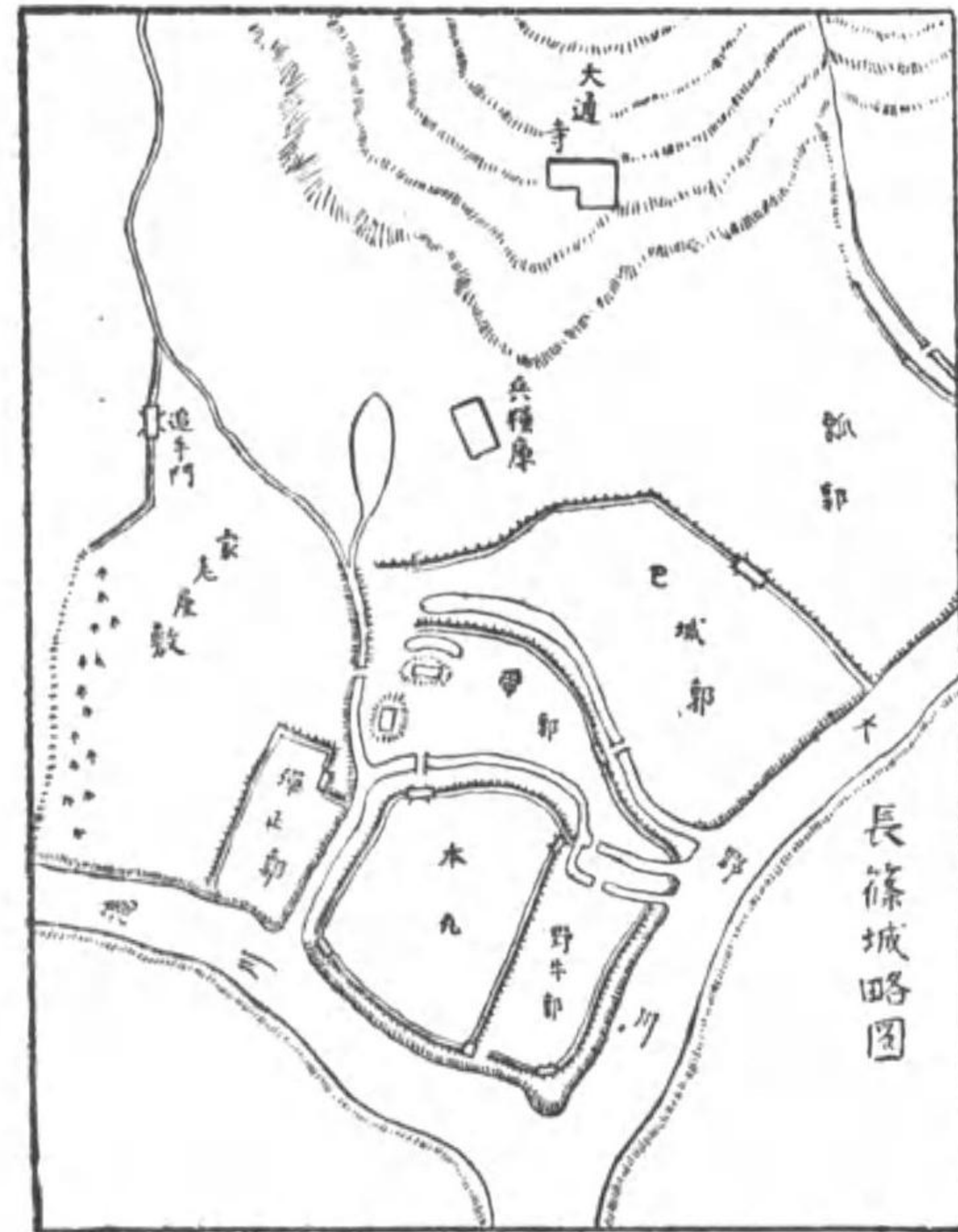
善(新出は卷十一、ゼン)

見(新出は卷二、ミル)

能(あたはずと否定に用ひられることが多い。新出は本卷、ノウ)

語句と其の解説

鳥居勝商(トリキカツアキ)通稱強(スネ)右衛門。(常山紀談には勝高とある)三河長篠城主奥平貞昌(後信昌と改む)の家臣。初徳川家康武田氏の屬



城長篠を奪ひ貞昌をして守らしめた。天正三年五月勝頼は精銳を率ひ長篠城を圍んだ。貞昌能く防いだが糧漸く乏しく、急を岡崎に告げしめんとした。勝商密使と成り五月十四日の夜重圍を脱し岡崎に至り援を請ひ、偶々來援せる織田信長にも謁して具に城中の狀を告げ、即夜馳せ還り、翌十六日煙を揚げて城中に示し、城に歸らんとして武田軍に捕へられた。勝頼之を責め、且つ援兵來らず速に降れと、城兵に告げしめんとした。勝商伴り諾し、敵兵に衛られて城門に到り、高聲叫んで曰く、信長家康の來り援くる三日を出で

ずと。衆兵大に怒り之を柵外に殺したといふ。事野史及常山紀談に詳かである。

奥平信昌(オクダヒラ

ノブマサ)加納城主。初名定昌。初、今川氏に屬す。天正元年徳川家康に屬し、長篠城に居る。三年武田勝頼來り圍むも能く城を守る。織田信長功を賞して諱字を授け、信昌と改む。四年三河國新城に移り家康の女龜姫を娶る。十六年美作守と成る。慶長五年關ヶ原役に從軍、九月京都所司代。六年二月美濃國加納城十萬石に移封。七年致仕。元和三年三月歿。年六十一。長篠城(ナガシノジャウ)愛知縣三河國設樂(シタラ)郡長篠にあたる。武田勝頼(タケダカツヨリ)信玄の第三子。天文十五年生。永祿五年勝頼諏訪氏を嗣ぎ、

信濃伊奈郡代と成り、伊奈四郎と稱す。天正元年信玄歿するに及んで家を繼ぐ。性勇猛であつたが思慮に乏しく、宿將漸く離反した。然も信玄の遺志を繼いで西上の念休む能はず、天正二年正月兵を美濃に出して織田城十八城を一舉に陥れ、五月遠江の高天神城を陥れるに及んで氣大に驕り、先に叛いて徳川氏に應じた奥平信昌が東三河長篠城を守るを見、三年五月之を圍み、徳川家康織田信長の聯合軍と戦つて大敗し、山縣昌景氏の屬馬場信房等宿將多くは戦死し、武田氏の精銳殆ど盡くといふ。本課は此の際の合戦である。長圍(リヤウシヨク)糧米。食料。かて。岡崎(ヲカザキ)愛知縣中部、矢作川に沿ふ平野の東部に在る。岡崎城は徳川家康發祥の地、當時此處に居城し威を四方に張つて居た。成否(ヒイヒ)成ると敗れると。のろ

し 狼煙。軍中相圖の爲に火烟を上げるもの。薪をたき又は筒に火薬を込めて火を發せしめる。烽火。衛兵(エイエイ)警備の兵士。要所の守衛に任ずる兵。流をさかのぼる魚(ナガラレサカノボルウヲ)常山紀談には、其の中に一人、『五月雨にはかゝる川をば鱸(ヌスキ)の過ぐるならん』といひければ、とある。(資料参照) 猶鹽(イウヨ)ぐづぐづして決せざること。ためらふこと。轉じて時日を延ばすこと。遷延。諾す(ダクス)承知する。承諾する。うべなふ。うけがふ。うけひく。ゆるす。うれふるこ



となかれ うれふるは悲しみ嘆くこと。憂慮する。心配する。なかれはなくありの約で命令法。禁止する際に用ひる語。な。

## 資料

## 原 據

## 鳥居強右衛門忠節の事 (常山紀談)

天正三年、勝頼、奥平九郎信昌が三州長篠の城をかこみ攻む。東照宮、援兵を織田家に請はせ給ひ、後巻の謀をめぐらしたまふ處に、城中糧米既に盡んとせしかば、此旨を告げ奉らん爲、鳥居強右衛門勝高に命じて、密かに城を出す。鳥居『のがれ出る事を得ば、向のがんぼうが嶺に烟をあぐべし。三日過ぎて、又かの山に烟を兩度あげなば、後巻なしとしり給ふべし。三度あげなば後巻ある事をしり給へ』と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて、五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひ、川に入る。寄手、素より、大野川、瀧川の水底に繩を張りてなる子をかけたれば、通るべきやうもなし。二人水練の達者にて、川の淺瀬はよくしりつ、小脇指を抽いて、川底を潜り、繩を切て通りしかば、からくとなりけるを、番の兵どもあやしみけるに、其中に一人、『五月雨にはかゝる川をば鱸の過ぐるならん』といひければ、さてやみぬ。二人は早瀬の下廣瀬といふ處に上り、がんぼうが嶺にて、烟をあげ、十五日に、岡崎に参つて、しかんくの由を申す處に、信長、其日岡崎に着陣せらる。鳥居は『信昌尙心もとなくや候らん。しのび得て城に入事を得ば、早後着候べき事審かに申さん』とて引返す。鈴木は、『信昌が父美作貞能に告ぐべし』とて、鳥居に別れけり。鳥居かんぼうが嶺に上り、合圖の烟三度あげて後、篠原といふ所に行き、忍び入らんとするに柵重々になりて、砂をまき、出入の人の足あとを改めしかば、中々入るべき様なくて、ためらひけるを、穴山の手の者見付て、あやしみて、遂にからめられけり。勝頼、逍遙軒信綱を以て、仔細を問はるゝに、鳥居

事の由を有のまゝに答へしかば、勝頼鳥居を呼びて『汝がいのちをたすくべし。汝城際に往きて、『信長は上方の軍にて、此城の後巻思ひもよらずといはゞ、城兵降参すべし。さらば、汝に厚く賞せん』といはれしかば、鳥居則ち『心得候』とて、城門近く至り、『後巻とて、信長父子、岡崎まできのふ旗を出され、先陣は一の宮に陣せり。徳川御父子、野田まで御馬を出されたり。此城運を開かん事掌の内有り。』といひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居をひきつれて、勝頼に、かくと申せば、大に怒りて、城に向ひて礮にしてころされけり。長篠にて、勝頼敗北してのち、信長をはじめ、鳥居が無双の忠なることを感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。

## 指導精神

鳥居勝商は通稱強右衛門、三河長篠城主奥平信昌の家臣。初め徳川家康武田氏の屬城長篠を奪ひ信昌をして守らしめた。天正三年五月勝頼は精銳を率ゐ長篠城を圍んだ。信昌能く防いだが糧漸く乏しく、急を岡崎に告げしめんとした。勝商密使と成り五月十四日夜、重圍を脱し岡崎に至り援を請ひ、偶々來援せる織田信長にも謁して具に城中の狀を告げ、即夜馳せ還り煙を揚げて城中に示し、城に歸らんとして武田軍に捕へられた。勝頼之を責め、且つ援兵來らず速に降れと城兵に告げしめんとした。勝商伴り諾し、敵兵に衛られて城門に到り、高聲叫んで曰く、信長・家康の來り援くる三日を出でずと、衆兵大に怒り之を柵外に殺したといふ。事野史及常山紀談に詳かである。

勝商は武士道の権化、日本武夫の典型、其の「諸君憂ふるなかれ」と城門に向つて叫び、莞爾として敵刃に斃れた悲壯の最期は、眞に情夫をして尙起たしめるの概がある。蓋し武士道は鎌倉時代より漸次發達し來り、元龜大正の頃最高潮に達した。其の忠節を守らねばならぬこと、不覺を取らず油斷してはならぬこと、武勇を重んずること、信義を尊ぶこと、廉潔であること、名を惜むこと、武を練ること、物の哀れを知るこ



と等、武士的精神の核心たるべきものは此の期に殆ど完成したと言つて良い。然も勝商の如きは其の最も尤なるもので、彼の行跡は實に此の精神の具象化されたものとも言へる。文も亦秀拔、文語文の極致を見せて居る。特に、時は十四日の月夜なり“の邊り滋味掬すべきものがある。武士道精神に直接せしめると共に、此の方面の味到に力を用ふべきであらう。

指導形態

指導上の認識點

- 1 非常の場合に際しての鳥居勝商が決死的な奉公心に感激させ、我が武士道的心構を一層強靱にするのが本課の指標である。
- 2 尙前課の姫路城と連繫させ、城郭の實戦上に於ける効果活用に就て考察させ、平時の備に對して深い關心を持たせる事も重要な一面である。
- 3 文は會話を生かした叙事的文語文である。内容に相應しい文語調の力強さ、商切の好い語趣等、共に士氣を鼓舞し文學愛好の熱意を培ふに好適である。取扱に際しては口語化させたものと比較して文語文のよさを了解させ、暗誦暗唱の域に迄兒童を導く用意が肝要である。

第一次指導

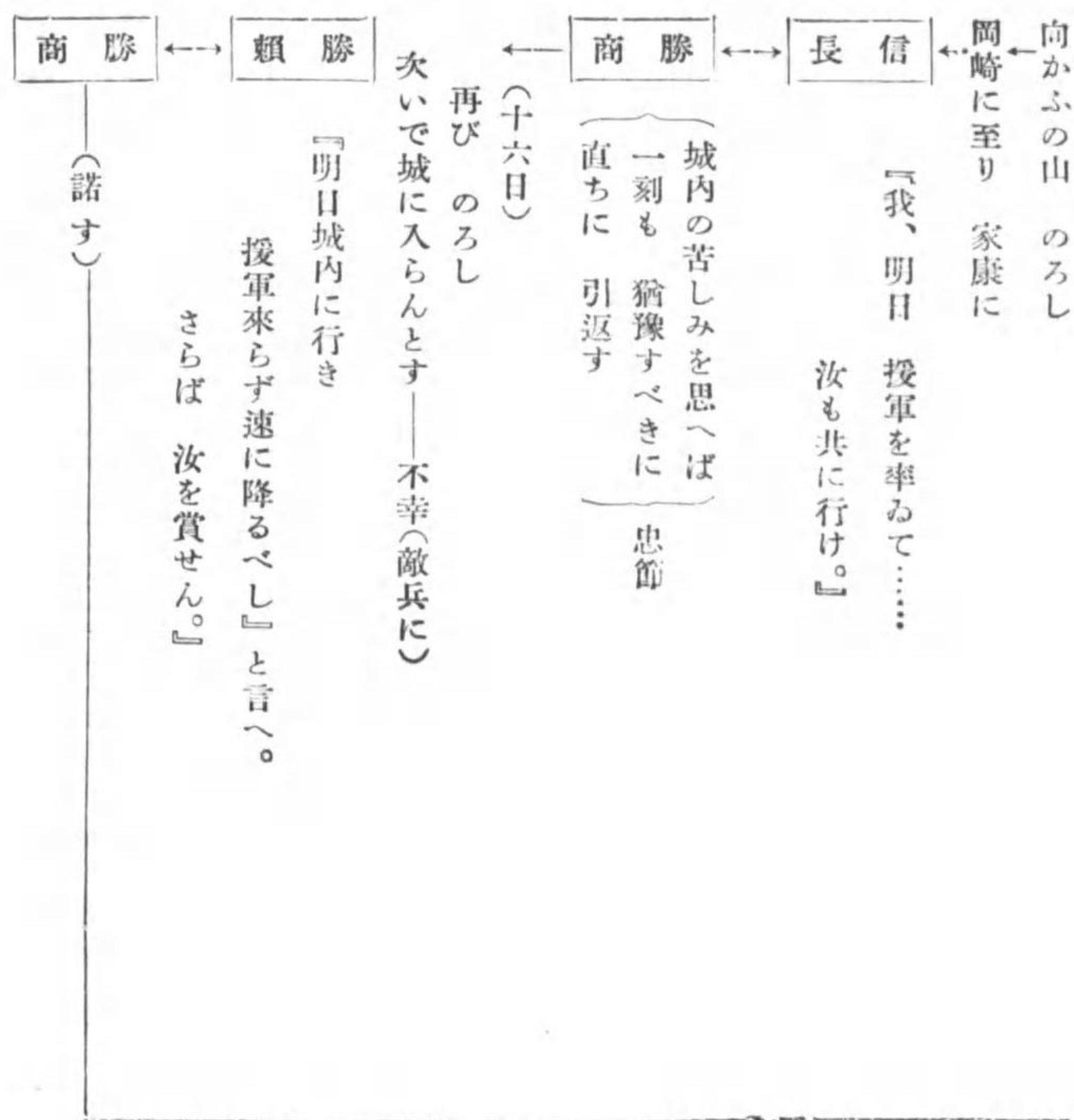
- 1 題目の指導。  
▽板書して讀ませ疑問符を附した儘直に讀みに入るがよい。此の際内容に觸れるのは絶対に慎むべきである。
- 2 一度靜かに通讀させ讀後の印象を言はせて見る。  
▽どんな話か、どこが感心なのか、話の中心點は何か等。
- 3 話の荒筋を掴ませる。
- 4 配當時間は三時限位を適當とし適宜に立案して兒童に接すべきである。

- 4 讀後の第一印象を記帳させる。  
▽教師は机間を巡視し兒童の學習態度や動向を察知する。
- 5 質疑應答。  
▽新出文字は其の都度輔導して辭書を索引させる。  
善能請否衛見
- 6 指名讀。  
▽適宜に句切つて、數名に。

第二次指導

- 7 文意の豫想をさせる。  
▽豫想した文意は記帳させておく。
- 8 話合。  
▽前項の文意や感想を中心に。
- 9 低音讀。  
▽聲を出して反覆通讀させる。
- 10 ノートを整理して提出させる。
- 1 輪讀。  
▽座席の順に、又尻取式に。
- 2 會讀。  
▽グループ毎に問題を作製させて。
- 3 指名讀。  
▽中・劣生を主として。
- 4 質疑應答。  
▽難解の箇所は板書して再度一齊に指導をする。
- 5 文意の檢討。  
▽前項に把握した文意を吟味させる。





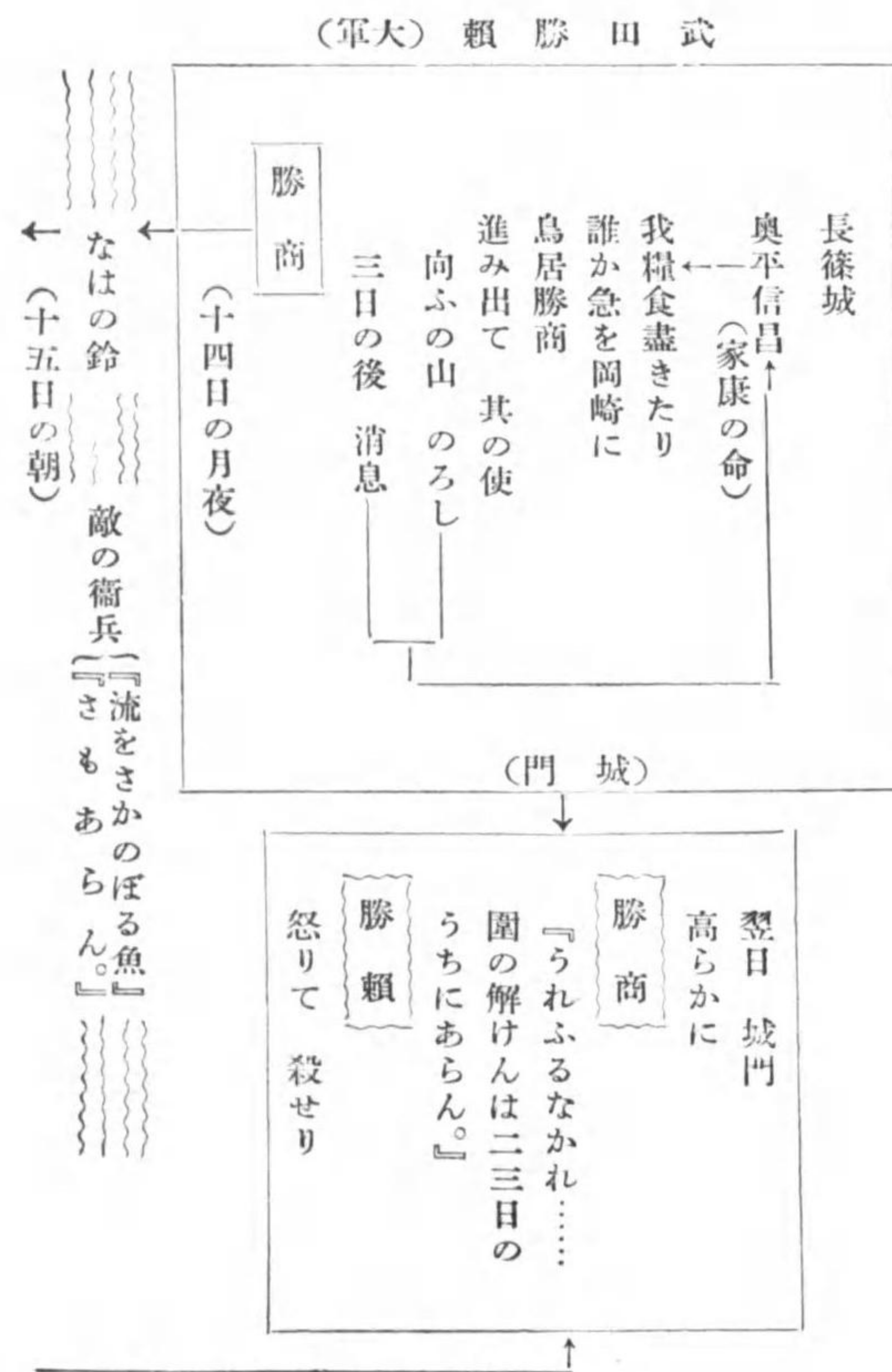
6

話合。

▽文の観點を中心に。

時 天正三年五月  
人 鳥居勝商

長圍の計



7

逐次研究。

▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配布する。



8 話合。

▽前項の文圖を中心に。

9 黙讀。

▽場面や情景を想像に描かせて。

10 對話讀。

▽地の文を一人、言葉をそれ／＼人物に當嵌めて。

11 改作練習。

▽語尾の變化に注意させ一語々々を適確に口語化させる。

12 宿題。

▽劇化學習に要する描畫を宿題とし、其の際に使ふセリフも工夫させておく。

第三次指導

1 通讀練習。

▽語感に注意させ全課を一氣に讀破させる。

2 指名讀。

▽中・劣生を主として。

3 話合。

4 ▽文意や感懷を中心に。

文意の檢討。

▽文意の所在を確め表現面に即して例證させる。

5 黙讀。

▽文の觀點に注意させ悲壯な情景を想像に描かせて。

6 話方練習。

▽最初は文語の儘に、あと劇的・模寫的に。

7 演習。

▽學級總掛りで、二幕二場の劇に脚本化させる。

8 劇化實演。

▽前課と連繫させ背景や城構へ等の舞臺裝置を工夫させて。

9 朗讀練習。

視寫・聽寫練習。

10 新出文字の書取。

11 語句の應用練習。

12 13 テスト。

テスト問題

一、次の語句の書取をしなさい。

1 ジヤウモン 2 ヨクジツ

3 ハツケン 4 シカケ

5 エイヘイ 6 リヤウシヨク

7 エンペイ 8 イウヨ

9 ヨソク 10 エンゲン

二、次の語句に振假名を附けて解釋しなさい。

1 長圍の計

2 水まきになぎれり

3 事の成否

4 其の使たらんことを請ひ

三、次の漢字を使つて熟語を作りなさい。

1 圍( ) 2 斬( ) 3 發( )

4 門( ) 5 衛( ) 6 幸( )

7 軍( ) 8 仕( ) 9 食( )

10 將( )

教材の劇化

鳥居勝商

序

人物

奥平信昌

鳥居勝昌

城兵多敷

幕



時 天正三年五月  
所 長篠城内

(幕があくと、奥平信昌城兵を集めて心配さうに話してゐる)

信昌 あゝ、よく戦つてくれた、武田勝頼の大軍もどうにもならぬとあきらめて、今はもう攻めあぐんでゐる。が、皆も知つての通り、到底尋常の仕方ではこの城を抜く事が出来ぬと知つた敵方は、長圍の計を取つて柵を城外に廻らしてゐる。

城兵一 味方を兵糧攻めにする氣と見えます。

信昌 さうぢや、そこでこれまでも糧食をへらしお互こゝまで持ちこたへて來たのだが……あと糧食は僅か四五日分しかない……其の上援軍はいつ來るか見當がつかない、かうなつた上は……誰か、城を抜け出で、岡崎に行き、急を君公に告げる者はないか、このまゝでゐては一同こゝでたふれ、につ

信昌 私にそのお役目を仰せつけ下さい。いのちにかけても岡崎へ参ります。

信昌 おゝ勝商か、よく申出てくれた、早く仕度をし、用心して行けよ、敵の見張はきびしいと思ふ、油断すな。

勝商 は、事の成否は今から豫測は出来ません、若し向ふの山にのろしがあがりましたら、幸に城を抜け出したものと思つて下さい。尙三日の後また山の上へ來て援軍の様子をおしらせ申します。

信昌 さうか、たのみにして待つてゐるぞ。大事なつとめぢや、しつかりやつてくれ。

勝商 では、おのゝ方、さらば！

一同 御苦勞に存じます、御武運をお祈り申します。

(勝商出かける)

——一同、見送る時——(舞臺半轉)

## 第二場

人物 敵の衛兵、數人

時 其の夜

所 長篠城外、堀のふち

(舞臺が半轉すると、繩の鈴しきりに鳴る)

兵一 あゝ、鈴が鳴る？

兵二 なるほど。

兵三 城兵が逃げ出したのでないか。

兵四 さあ？

兵五 いや、水が一ぱいだ。流れをのぼる魚が、なはにさはつたのではないか。

兵一 なるほど、さうかも知れない。

(鈴、又なる)

兵三 でも、おかしいぞ。まだ鳴つてゐる。

兵五 よほど大きな魚と見える。

——一同大笑ひする時——(幕)

## 第三場

人物 徳川家康

織田信長

其の家來多數



鳥居勝商  
時 翌十五日の朝

所 岡崎・家康の居城

(幕があくと、家康を中心に家來が居並ぶ)

家康 早くこゝへ通せ。長篠からの急使といつたな。

家來 はつ、(すぐ退出して勝商をつれて来る)

勝商 主人信昌の命により、城を抜け出で、参りました。

家康 抜け出で、?

勝商 はつ。敵はずつと前から長圍の計をとり、城中には二三日の糧食しか残つて居りません。速に援軍

のお出をお願いしますとの事で御座います。

家康 さうか、それは大變だ、織田公にも早くお知らせせねばならぬ。そちはすぐ織田公にもその由を傳

へてお願してくれ。あの城は堀も深いし、かこみを抜けてよく無事にこゝまで來られた、ほめてつ

かはず。

勝商 は、かたじけなう存じます。

家康 では、すぐ織田公に。

勝商 はつ、では御無禮 (といつて平伏し立ち上る時、舞臺半轉)

(舞臺が半轉すると信長のまはりに家來、前に勝商が平伏して今申上げ終つたところ)

信長 よくわかつた、信昌もさぞかし、苦戦であらう。よくこゝまで無事使の役目を果たした、ほめてつか

はずぞ。

勝商 はつ、かたじけなう存じます。

信長 では、我々は明日援軍を率ゐて出發する事にする、お前も待つてゐて一しよに行け、外から中へ入  
るのは餘計むづかしい。  
勝商 いえ、城中のものゝ苦しみ・心配を思ひますと、一刻も猶豫しては居られません。すぐかへつて援  
軍御出發の由を城中へお知らせします。  
信長 感心の至りぢや、氣をつけて参れ。  
勝商 はつ。(平伏する)

—信長は感深げに勝商を見やり、立ち上る時— (幕)

大 詰

人物 武田勝頼

その家來

鳥居勝商

城中の兵

所 武田勝頼の陣屋

(尙幕があくと、勝頼勝商を説得してゐる)

勝頼 城を抜け出て、援軍を頼みに行つたのは其方か。

勝商 はい、私で御座います。

勝頼 仲々勇氣のあるやつぢや、直ちに斬捨てるのであるが、どうだ、明日長篠城の城門に向つて『援

軍は來ません、早く降参した方がよろしい』と言へ。さうすれば、我汝を重く取立てはらうびをつか

はずがどうぢや。

勝商 かしこまりました、その様に申します。



勝商 よし、かしこいやつぢや、まちがひなくきつと申せ。  
詩商 はつ、たしかに！

勝商 よし、さうすればたたくさんのほうびをとらせるぞ (喜ぶ時、舞臺半轉)  
(舞臺が半轉すると長篠城外、今勝頼の家頼が勝商を城の方へ向け)

案来一 さあ、言へ、昨日の約束通り。

勝商 よろしい、申しませう。……

城中の者へ申す。城を抜け出して徳川・織田二公の所へ急使に参つた鳥居勝商、今其の返事を申上  
げる。よろしくお聞き下さい。

城中 (どや／＼と人聲がする)

案来二 早く申せ、もうよい。

勝商 でも、城の中へ聞えないと困ります、……城中の者へ物申す、よろしくお聞き下さい。お使に参つた  
鳥居勝商です。(あと早口に)

『どうぞ心配下さるな、徳川・織田二公援軍を率ゐて、すでに御出發になりました、圍の解けるの  
もあと二三日でございます。』

案来一 何だと、無禮者、うそつき。(といつて刀を抜く)

(勝商、につこり笑つて斬られる)

— 悲壯極まる場面を見せて— (幕)

第十二 初冬二題

力の込つた大教材と大教材の間隙を狙つた、言はゞ息休めと言つた形である。詩柄も古い約束を脱却した  
頗る開放的な自由詩型で、前巻迄に能く扱はれた單なる讚美の詩でも無く、味嘆的のそれでも無い。況して  
や詩を學ぶ爲の作例でも無く、詩本來の藝術的香氣が全篇に漲つて居る。同じ柚子を主題としても、其の皮  
を破り、其の内味に迄突進んで、之が感觸を味はうとして居る。朝飯にしても同様で、文字通り日常の茶飯  
事を捉へ、詩的感激を波打たせて居る邊りに、高學年教材としての新しい詩の領域が見出される。

元來氣分と言ふのは心持と言ふのと同じく、自己全體の感じである。悲しいとか嬉しいとか言ふ單純な感  
情でも無く、又之は何う言ふ意味があるのだと言ふ様に明瞭な智識の解釋が附いて居るのでも無く、唯自分  
の全體の心持の上に何かある、それを出さうとするのが本課の如き氣分詩である。結局自己全體の上の感じ  
を歌ふのである。所が其の自己全體の感じはそれ丈を直接に歌ふ事は出来ない。何か客觀の事象の上にそれ  
を被せて歌はなければ駄目である。其處で本課で見られる様に色々な客觀の事象・又は感覺から來た刺戟を歌  
ひ、其の全體の上に一つの氣分を出さうとする。其處が此の氣分詩の狙ひ所で、後半の『朝食』は特にそれ  
が顯著である。

文字語句

讀替文字

冬 (新出は卷四、フユ)

飯 (新出は卷六、ハン)

語句と其の解説



柚子(ユズ) 芸香科に属する常緑樹。蜜柑に似て、葉は長卵形で葉柄に翅があり、枝幹に刺が多い。初夏小白花をつける。果實は稍扁圓で外皮に疣多く、香氣・酸味共に強い。柑は柚子の一種であるが、普通の柚子より大きくて香が高い。本課も恐らく此の柑柑を言つたものであらう。かさこそ擬聲。梢に竹ざをの當る音。からたち 枸橘。芸香科、枸橘屬の落葉灌木。幹の高さ丈餘、枝の變形した大きな刺が多い。葉は掌狀複葉、三箇の小葉から成り、總葉柄に翼を具ふ。晩春に白色の五瓣花を葉腋に開く。果實は黄ろい球形の漿果で、一見柚子に似て居るが食べられない。九州地方ではゲズといふ。蓋し方言であらう。しぶき 繁吹。飛び散る沫。とばしり。とばつちり。部隊長(ブタイチャウ) 部隊の長。戦時には下は分隊長・小隊から上は旅團・師團に至る迄、悉く之を部隊と稱し、其の部隊の長を部隊長といふ。従つて分隊長や小隊長等も部隊長であり、聯隊長・旅團長・師團長も部隊長である。白菜(ハクサイ) 葉菜類の菜類に屬し、支那から渡つたもの。葉の完全に抱合するものと抱合不十分の類とがある、品質の優秀さは結球の偉大な結球白菜を以て第一とする。我が國に於ける結球白菜の名産地は愛知・茨城・東京である。冷涼な氣候を好み、炎暑と寒氣とは最も忌む。八月中・下旬に播種し、十一月下旬寒氣漸く嚴くなる頃迄に結球を終る様にするのがよい。近來は都會地附近で春播も行はれる。みづくしき つやがうつくしい。若くうるはしい。

## 指導精神

## 柚子

此の詩を味ふ爲には最後の句『遠い戦地に行つてゐるをぢさんを思ひながら』といふ一句が如何なる内容を暗示して居るかといふ事を究めなければならぬ。即ち『隣のをぢさんは今ゐない』といふ一句と最後の句とは離す事の出来ない關係にあつて、此の句と最後の句とを對照して考へる時、此の二人は隣同志、然も朝夕顔を合はせ聲を掛けたり掛けられたり、時には叱られた事もありからかはれた事もある緊密な間柄であ

る事が窺ひ知られるであらう。觀點は即ち其處にある。詩の上では必ずしも兩者の關係を直叙しなくとも前後の關係からそれとなく暗示されるものである。所謂暗示的手法とは此の邊の兼合をいつたもので、兒童にも能く此の點を呑込ませて欲しいと思ふ。

其處で一篇の意味は何時にも此の頃になると鈴なりに生つた隣の柚子が、今年も美しく黄ばんで見える。茶目氣分一杯の作者は竹ざを持出してからたちの垣根越しにそつとそれを突つ突いて見た。不斷であればそんな時きつと『誰だ』と大聲でどなるのが常である隣のをぢさんは今居ない。何だか淋しいやうな物足らない氣がしてボンヤリ梢を見詰めて居ると、在りし日の思出がありと眼の前に浮び出る。何時であつたか今して居るやうに黄ばんだ柚子をそつとつゝいて居ると、居ないと思つた隣のをぢさんがひよつこり顔を出して『あげませう。』と周章てる作者に一つ投げて呉れた。すまないやうな氣まづい思をして持ち歸つたあの柚子の感觸——ざくつとおや指を皮に突立てたらしゆつとしぶきがほとばしつて、爪を黄いろく染めたものだった——なつかしい柚子のかをり、あの微笑んだをぢさんの顔、其のをぢさんは今部隊長になつて北支の原野で勇ましく戦つて居る。作者はじつと梢を見上げた、遠い戦地の事を思ひ乍らといふのだ。結局此の詩の中心は柚の實にある。黄ばんだ柚の實から觸發される思出の数々、それを讀者に直接させる所に詩歌の量られぬ力がある事を知らせる點に力點があらう。

## 朝飯

題材の生新さに着目させて欲しい。初句の『新づけの白菜』から最後の『私はさくく〜と白菜をかむ』迄の間に盛られた朝飯時の幸福感が此の詩の狙ひ所だ。『かめばさくく〜』の感觸、『ほか〜と立上る湯氣』の氣持、着眼も新しいし、表現も文字通りに齒切がよい。

詩の中核は第二聯の『父も、母も、兄も、妹も、だまつて箸を働かしてゐる。そろつて健康に働く家庭の楽しい朝飯だと思へば、あたゝかい御飯の湯氣が、幸福に私たちの顔を打つ。』に在るは言ふ迄もなく、最初



の一聯と最後の聯とは其の幸福感を裏付けたものであらう。歌つて居る事は單なる一項事に過ぎない。誰が讀んでも解釋を要しないやさしい詩であるが、然し此の平凡に見える詩の中に是程の情感を盛る事は餘程非凡な詩人で無くては至り得ぬ境地である。詩人が擱んで之は何うだと言つて眼前に示して呉れる迄はお互の心は靜かに沈黙を續けて居る。詩人に依つて示されて、あゝ成程と氣の付く世間の人は、何時も詩人に遅れて生活をして居ると言はねばならぬ。何事に對しても斯うした心の感覺を持つて臨むと、思ひがけない發見をするものである事を此の詩に依つて感付かせる用意が肝要であらう。

指導形態

指導上の認識點

- 1 二つの自由詩から初冬の田園生活を想像させ、其の平和感・眞實感に浸らせる事に依つて感情の純化を圖り、田園愛好の精神を養ふのが本課の主眼である。
- 2 詩は何よりも感受が大切である。本課は措辭も頗る平易であるから、努めて兒童に投渡し彼等自らの感得享受に任せ、専ら詩魂を培ふ事に力を用ふべきである。
- 3 遠い戦地にある部隊長を偲び、かうした平和な生活を營み得るのも全く皇軍勇士の賜である事をしみじみと感附かせ、銃後國民とし

ての心構を一層緊張強化するを念とせねばならぬ。

- 4 楽しい朝食・だまつて箸を動かす人々・白い御飯・あたゝかいみそ汁・立上る湯氣、それは健康に働く家族のみが持つ幸福感であらねばならぬ。詩も白菜を嚼むが如く、さくさくと齒切がよい。二篇を通じて自然觀點の態度を養ひ、詩心を培ふと共に創作意慾を旺盛ならしめる用意が肝要である。
- 5 本課は大體二時間位で指導を纏める様立案して欲しい。

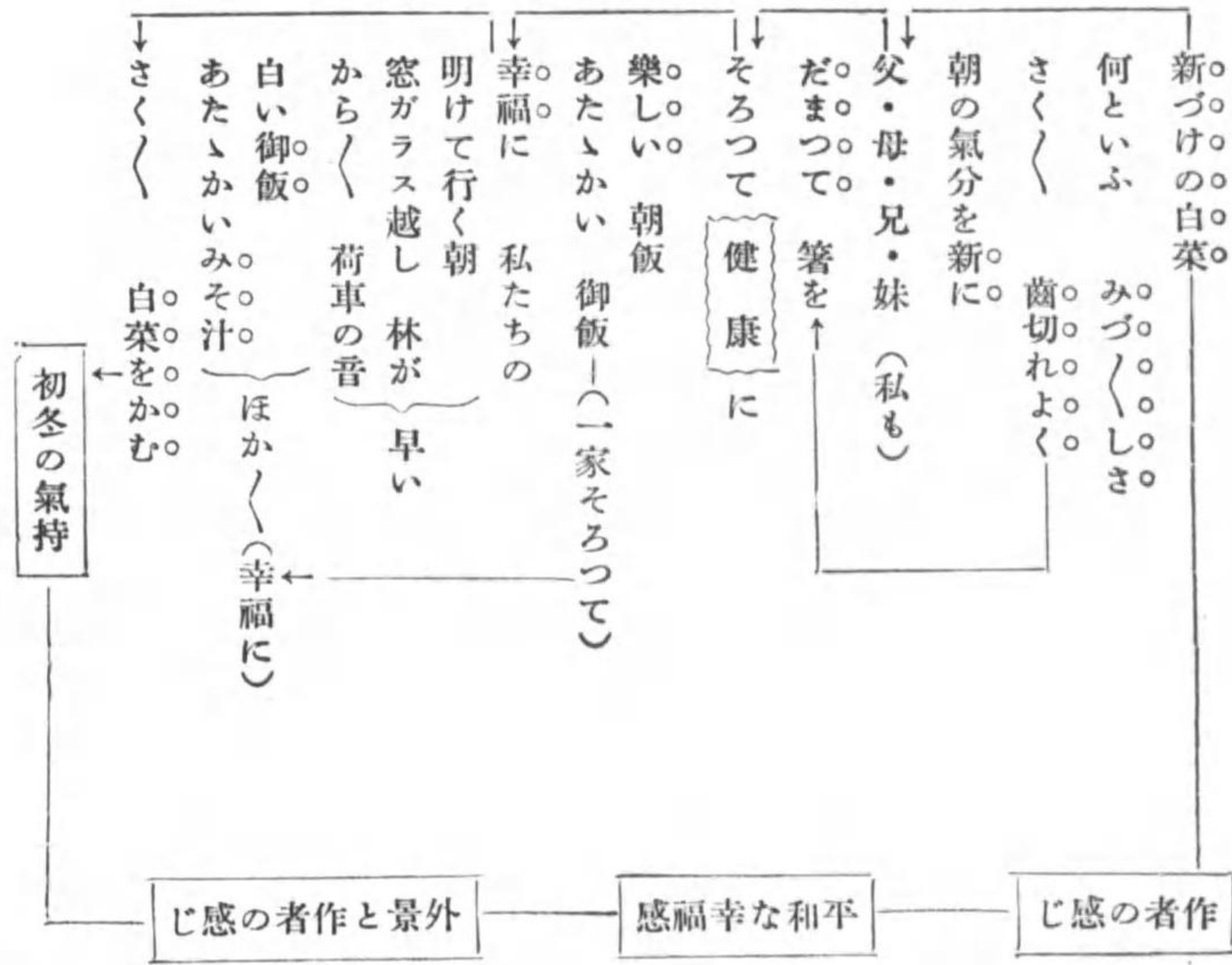
第一次指導

- 1 題目の指導。  
▽大題目と小題目の關係を簡單に問答し、柚子・朝飯等に就ての生活感情を確める。但し深入りは禁物である。
- 2 二篇を別々に視寫させる。  
▽一篇を視寫し一篇を聽寫させるのも面白からう。
- 3 新出文字の指導。  
▽どちらも讀替文字であるから兒童の爲すが儘に任かせておく。  
冬 飯
- 4 讀合せ。
- 5 前後の二篇を別々に。  
▽前後の印象を話させる。  
▽先づ記帳させ次々に讀ませてもよい。  
不明の箇所を質問させる。
- 6 措辭が平易であるから特別のものを除き他は自力で解決させる。

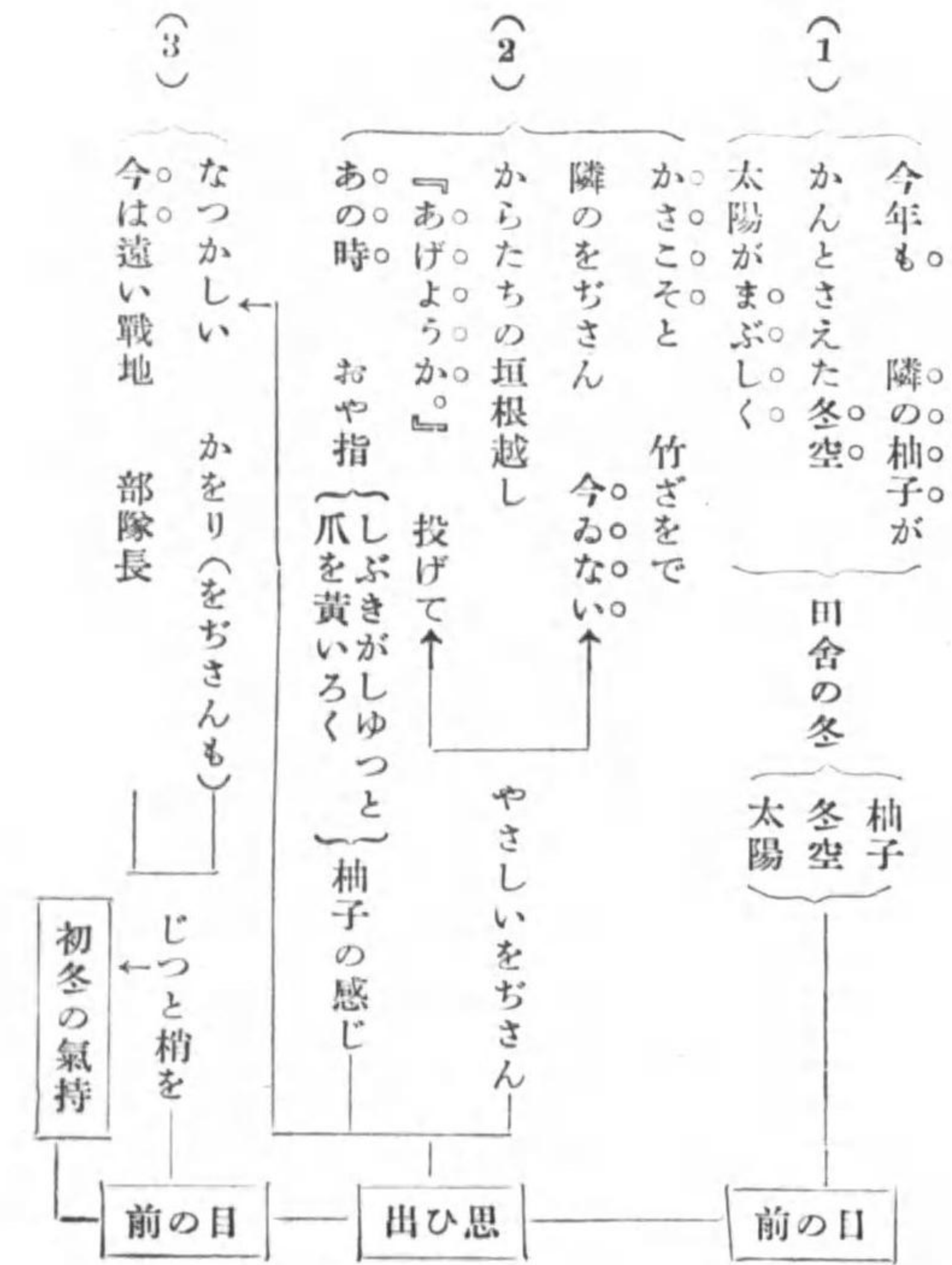
第二・三次指導

- 7 二篇を別々に數回繰返して默讀させる。  
▽見える情景や印象等を記帳させる。  
話合。
- 8 一篇毎に把握した詩境を話合はせる。  
▽詩情を汲んで作者の詩興を想像させる。  
▽適否の判断は後廻しとする。
- 9 指名讀。
- 10 一聯づゝ、輪讀式に。
- 11 低音讀。  
▽詩興を汲ませ詩心を頭に描かせて。  
ノートを纏めて提出させる。
- 12 前の『柚子』を聽寫させる。  
讀合せ。
- 1 讀合せと同時に此の詩の觀點に注意させる逐次研究。
- 2 要點を板書して整理する。
- 3





4 後の『朝食』を聴寫させる。  
5 讀合せ。  
▽前と同じく觀點に注意させる。



6 逐次研究。  
▽要點を板書して纏める。



- 7 書取。  
▽書物と對照して板書事項を書取らせる。
- 8 範讀。  
▽自由詩の聲調美に注意させて。
- 9 指名讀。  
▽二篇を別々に。
- 10 話合。  
▽詩興や詩心を中心に。
- 11 詩形の吟味。

テスト問題

一、次の語句に順序を付け、まとまった詩に直しなさい。

- (1)
- |          |           |
|----------|-----------|
| ( ) 太陽が  | ( ) 隣の柚子が |
| ( ) まぶしく | ( ) かと    |
| ( ) 冬空   | ( ) さえた   |
| ( ) 今年も  | ( ) 仰がれる  |
| ( ) 黄ばんだ |           |
| ( ) 湯気を  | ( ) みそ汁から |
| ( ) 私は   | ( ) ほか／＼と |

- 12 演習。  
▽既習の定形詩と比較させて。
- 13 試作。  
▽詩心や詩情を汲ませて散文化させる。
- 14 綴方と連絡して。
- 15 暗誦・暗寫練習。
- 16 文字語句の書取・應用練習。  
テスト。

二、次の□の中に適當した文字を入れ句讀點を附けなさい。

- (2)
- ( ) ( ) あたゝかい ( ) ( ) 立上る
- ( ) ( ) 白菜をかむ ( ) ( ) 見つめながら
- ( ) ( ) さく／＼と
- (1)
- なつかしい柚子の□
- 私は□梢を□ぎ見た
- 今は□長となつて
- 遠い□に行つてゐるをちきさんを

三、次の語を使つて短文を作りなさい。

- (1) ながら
- 明けて行く□
- (2) 越しに□が黒い
- から／＼とどこかで□の音

- (1) さえた
- (2) ほとばしつて
- (3) 商切れよく
- (4) しぶき
- (5) ほか／＼



## 第十三 機械化部隊

前巻の空中戦と双壁を成す教材で、事變が生んだ最新の教材たるは言ふ迄もない。嘗て或文明批評家は「現代の機械文化は自ら發明せる機械に依つて其の生命を縮める」と喝破したが、其の皮肉な警告を顧みる暇も無く、世界は今や日進月歩の機械文化に頭を下げねばならぬ状態と成つた。列強の軍備に於ても其の機械化設備の優劣は直に其の國の實力が評價され、戦はずして敵を呑むの觀があるのは現今の外交戦を見ても明に實證される。

之を古今の歴史に徴しても、信長が連戦連勝の裏には新兵器鐵砲隊の活躍があつた。勇敢な長州兵がたつた四隻の外國船の爲破れたのも、幼稚な大砲を使用した故であつた。官軍に包圍された上野の彰義隊も四五町離れた高臺から打出す砲彈に其の半数を斃され、僅か半日で破れ去つた。難攻不落を誇つた旅順要塞を降服させたのも我が重砲の威力に負ふ所が多かつた。日本海の海戦にバルチック艦隊が放つた砲彈は盛に水煙を擧げたが、同じ距離で砲撃した我が聯合艦隊の砲彈は下瀬火薬の威力に依り百發百中悉く敵艦に命中したでは無いか。武力は固より軍人の勇猛心に俟たねばならぬが、同時に兵器の精銳を缺ぐ事は出来ない。近代戦術に於て一層然りである。

本課に於ても機械化部隊の如何なるものかを知らせる丈が本旨ではあるまい。虎視眈々たる列強目下の情勢に於て、東洋の覇者たる我が國の軍備を如何にすべきか？ 此の大問題こそ、本課が暗示する宿題であらねばならぬ。然も一臺の戰闘機・一隻の軍艦を造るにも巨費を要する。今次の事變には一ヶ月に約一億の軍費を要するとして、一分間毎には一千圓の巨費が砲彈と共に消えて無くなるのだ。陸相の言葉を借りる迄も無く、此の邊に國民の大覺悟を要望されて居るのでは有るまいか。

## 挿畫の印象と其の説明

第八十一頁の寫眞は今次の事變中、我が機械化部隊の戰車隊が北支の戦線を進軍中の雄姿で、敵軍が眞近に迫つて居ないのは頭部掩蓋が開かれて居るのを見ても分る。敵陣に肉迫して何時戰闘開始と成るやも豫測出来ない切迫した域に入ると、各戰車の頭部掩蓋を閉じて戰車砲及機關銃砲・〇〇砲等に彈丸が充填される。〇〇砲は新兵器の故に軍事上の秘密で、此の寫眞も修整されて見る事が出来ない。尙、此の寫眞に依ると速力も緩かである。我が戰車が本來の速度を以て馳驅すれば、膝々たる砂塵を上げる筈である。

第八十二頁の寫眞は軍隊の大行李、即ち食糧や彈藥其の他の軍用品を運搬する自動車部隊で、車體には綠葉を以て擬裝(カムフラージュ)されて居る。言ふ迄もなく敵空軍の眼を避ける爲の迷彩で、陸路から直に河中に突進する勇敢振りに注目すべきである。機械化部隊の自動車や戰車は陸も進めば河中も渡渉する特別の装置があり、其の装置も浅い河だけ渡り得るものと、深い水中でも後部の推進器で忽ちモーター船と化して進み得るものと二種がある。此の寫眞は浅い川を進み得る種類のもので、右側の橋は工兵隊が架設した俄か造りのものらしく、自動車や戰車等の重量に堪えず、止むなく河中を乗切らねばならぬ。前圖同様、今次の事變に於ける一情景である。

第八十四頁の挿畫は戰車隊と戰車隊との勇壯極まる戰闘狀況が描かれて居る。白い煙が戰車隊の放つ戰車砲の砲煙で、黒い煙は射落された飛行機が燃え上る様である。空爆の煙では無い。爆彈ならばドカンと眞直に空へ吹上げる筈である。前々圖の寫眞でも解説した様に、交戦中の戰車は頭部掩蓋が密閉されるといふ實際が、此の挿畫でも分るであらう。正に血湧き肉躍る壯烈極まる激戦の眞最中で、百雷一時に落下するかと思はれる爆音は天を焦がし大地を鳴動させ、凄慘壯絶、蓋し筆紙の能く盡すべき所であるまい。これこそ國と國とが科學の力を以て相搏つ近代戦の實相で、最後に頼むものは何ものをも恐れぬ勇猛決死の軍人精神で



あらねばならない。

文字語句

新出文字

揮<sup>キ</sup> 猛<sup>マウ</sup> 敢<sup>カン</sup> 却<sup>キョク</sup>

讀替文字

側<sup>ソバ</sup> (新出は卷七、ガハ)

彼<sup>カ</sup> (新出は卷七、カレ)

我<sup>ガ</sup> (新出は卷五、ワガ)

布<sup>フ</sup> (新出は卷七、フ)

語句と其の解説

機械化部隊(キカイクワブタイ) 装甲自動車上に満載せる加農(カノン)砲・榴弾砲の支援を受けた小型並

に中型の戦車を中心に、機械化した砲兵・工兵・通信隊・ガス隊の一團を以て編成された部隊をいふ。最近

各國共に軍の機械化に腐心し、騎兵の如きも重機關銃・輕機關銃・大小口径の各種火炮・化學兵器・工兵的

器材を持ち、戦車・装甲自動車を従へ、強力なる戦闘力を保有する機械化騎兵と成つた。戦車部隊(セ

ンシャブタイ) 數ヶ年の日子を費して構築した支那大陸最強の陣地徐州、蔣介石ラインの名を冠して世界に

誇つた陣地も、皇軍の前には二週間の抵抗さへ不可能であつた。それが忠勇無比の皇軍の果敢さと絶妙な作

戦の賜であることは言ふ迄もないが、然し我が機械化部隊、就中戦車部隊の偉大なる活動力が此の戦果の決定

的要素を成して居る事を忘れてはならぬ。寔に戦車は陸の荒獅子、地上の無敵鐵甲軍と呼ばれるのも故無き

事ではない。彼我(ヒガ) 彼れと我れと。自他。自動車部隊(ジドウシャブタイ) 各種自動車を以て編

成された部隊。今次の事變で敵膽を寒からしめて居る挺進隊の如きも此の部隊に屬する。掩護射撃(エ



我が戦車部隊の進撃

ンゴシヤゲキ)

掩護の爲にする射撃。掩護は或部隊をして味方の作業又は或目的物を保護せしめる爲敵に

當らしめる場合をいふ。散開(サンカイ) 密集

せる軍隊が各箇相當の間隔を取つて隊形を作る事。軍隊語。散れの命令で行はれる。散兵線(サン

ベイセン) 散兵の散開した線。散兵は軍隊語で兵

隊を散開すること。又散開した兵。即ち兵士を密集

せしめず、適當の距離を隔て、處々に配布・散置す

ること。又其の兵士。散兵線は其の散開した場所、

即ち區劃線。遠射砲(ソクシヤハウ) 自動々作に

依らずに毎分六、七發以上發射し得る砲。口径一五

種以下の砲は大抵之に屬する。歩兵砲(ホヘイ

ハウ) 従來歩兵の主要武器は小銃・機關銃であつた

が、機關銃の發達と戦車の出現に依つて是等を打ち

毀す爲に歩兵の携行する砲。現今平射砲・曲射砲の

二種がある。平射砲は口径三七耗、全重量五〇乃至

六〇疋、彈量六乃至七〇〇瓦。曲射砲は口径七乃至

七・五種、彈量六乃至七疋。射距離は何れも一、〇

〇〇米乃至四、〇〇〇米。輕いことが主眼である。

機關銃(キクワンジュウ) 歩兵の主要兵器で輕・重

の二種がある。重機關銃は全重量三〇疋乃至六〇疋



に達し、運搬には車輛又は駄載に依る。之は頑強で命中率も良く、發射速度も速い。輕機關銃は發射速度や命中率を多少犠牲にしても出来る丈軽く、一〇疋内外を目標とし、従つて近距離ならば個人が片手で運搬できる。砲塔(ハフタフ) 砲座を一段高い所に設け、其の周圍に鋼鐵の防禦壁を施したもの。各戰車(カクセンシヤ) 戰車の種類は通常重戰車・中戰車・輕戰車、それと所謂豆タンクの四つに別けられて居る。以上の中で現在各國で最も重要視されて居るのは中戰車である、次で輕戰車であるが、機關銃運搬・彈藥補充も其の任務の一端であり、チョコマカ／＼と走り廻るので甚だ重寶である。以上の外に橋を架ける架橋用タンク、猛烈な勢で敵陣に身を曝し乍ら塹壕を掘る塹壕掘鑿用タンク、又如何なる湖上・海上を問はず之を征服して果敢なる敵前上陸を敢行するや、敵陣を滅茶苦茶に蹴散らして歩兵部隊の突撃を可能ならしめる水陸兩用タンクの三つがある。是等は既に完全に着想の域を脱して實用化されつゝある。體當り(タイアタリ) 飛び込みざまに自分の體を以て相手の體を突き飛ばすこと。擊劔や柔道等で用ひたもの。修羅場(シユラヂヤウ) 戦闘又は争亂の烈しき場所。阿修羅の猜忌・嫉妬の念強く、常に鬭争を好むよりいふ。修羅の巷。煙幕(エンマク) 發煙兵器の一種で、白色・黒色又は黄色の煙を空中に展張して敵の視線から逃れる爲に用ひる。煙に成つた時、其の粒子が細かく且つ散亂が密集的な程光を遮る力が強く、又一定の所に長時間停留して有効時間の長い程効果的である。痛快事(ツウクワイジ) 非常に愉快なこと。いたく心地よきこと。愉快極まること。たけなは 酣。物事の最も盛なる時。極盛事。まつさいちゆう。もなか。

### 指導精神

前巻の『空中戦』と相呼應した教材で、空の航空部隊と地上の機械化部隊とは實に近代戦の花である。機械的部隊即ち機械化軍は装甲自動車上に満載せる加農・榴彈砲の支援を受けた小型並に中型の戰車を中心に

機械化した砲兵・工兵・通信隊・カス隊の一團を以て編成された軍團をいふ。陸軍に於て機械化の形式に二種ある。(1)は装甲せる戦闘車輛、即ち戰車及装甲自動車を以てし、(2)は運搬用車輛、即ち歩兵又は機關銃隊を輸送し、又火砲を牽引する車輛を以てするものである。機械化軍といふ場合は主として前者の意に用ひ、後者の意も含めて用ひて居る。機械化軍の編成に際しては戦闘用と運搬用とを問はず各種類毎に規格統一の必要がある。之は若し型式・速度を異にして居る場合は高速度車輛も鈍重な車輛と歩調を合はせる爲其の能力を十分に發揮できないからである。機械化軍は世界大戦後各國陸軍の渴望して居る目標で、一九二七年英國が最初の機械化軍を編成して以來、各國とも必死の努力で研究・組織を續けて居る。自動車部隊は元來各種自動車を以て編成された部隊で、兵員・兵器・彈藥・糧秣・架橋材料・衛生材料、其の他軍需の補給輸送に従事し、通常牽引用・貨物用・患者運搬用等を以て編成するを本體とするが、必要な乗用自動車・二輪自動車等を附屬し、部隊全部が發動機化された輸送機關を形づくる場合もある。蓋し世界大戦の結果極端に軍の機械化が企圖される情況に鑑み、將來の戰場乃至後方には益々自動車隊の活躍が期待されるであらう。我が國の如きは未だ常設の部隊を見ざるも(○軍に僅か一隊あるのみ)列強は大規模、且つ特殊の自動車隊を有して居る。

機械化部隊の精銳といへば先づ第一に戰車に指を屈せねばならぬ。戰車は俗にタンクと言はれ、其の外皮全體は丈夫な鋼鐵板で嚴重な装甲を施し、兩側に廻轉する無限軌道に依つて前進し、機關銃や小口径の砲を裝備して敵陣に向つて轟進して行く。大型・中型・小型と種々あり、何れも鐵條網や其の他の障碍物・土地の高低に拘らず前進する力を持つて居る。歐洲大戦以前には現今の如き完全な戰車は無かつたが、其の着想は遠く紀元前に發し、希臘等に於て人力車輛を木で装甲し、敵に肉薄して其の城砦の一部を破壊するに使用した記録がある。一四七二年、風力推進に依るヴァルワリオの戰車、一五九九年、シムスンステイヴェインの陸上船、一六三四年、グデイトラムゼーの自走式車輛等が現れ、何れも大なる車輛と帆を有し、風の吹く



とき使用できる車輛を製作した。一九〇〇年には英國で、一九〇一年には佛國で夫々貨物自動車に装甲を施し、英國のものは輕砲二門を以て武装し一九〇一年ボーア戦役に出陣し、佛國のは機關銃一門を以て武装しモロッコ討伐に使用した。歐洲大戦當時には無限軌道自動車の發達が戦車發達の近因と成つた。恰も英國のアーネストスウィントン大佐は日露史編輯を爲すに當り、機關銃の偉大なる効果を觀察し、心中所謂戦車の必要を痛感して居た折柄、米國製ホルト裝軌道式牽引自動車を見て暗示を得、本車を改装し防弾性・障礙物破壊性・壘壕横斷性を備へる機構と爲し、之に速射砲若干を裝備した戦車の製作方をイギリス國防委員會に提出したのが抑々の起因で、實に一九一四年の事であつた。其の後幾多の曲折を経て一九一五年二月英國陸上船委員會の編成が出来るに及びスウィントン大佐の意見に基づく機構を研究する事に決し、同年九月第一回試製車を製作したが失敗に終つた。其の後研究を續行し一九一六年漸く完成し試験の結果良好であつたので四〇臺の註文を發した。戦場に初めて使用されたのは一九一六年九月十五日で、英軍は西部戦線ソムム會戰中パボーム南方フレール附近の戦場に突如之を使用して獨軍の心膽を寒からしめた。次で一九一七年十一月二十日アラスカンブレイ戦闘・一九一八年八月八日アミアンの戦闘・同年七月十八日ソアツソンの戦闘等に大規模に使用し偉功を奏した。英國戦車の出現に次で佛國でも全く獨立に戦車を建造しつゝあつたが、一九一六年二月シュナイダー戦車を完成し、一九一七年初めてジュヴェニーに於て、次でラフォー高原に於て使用した。其の後サンシャモン戦車が現れ、マルメゾン等の戦闘等に使用。獨國では英國戦車の出現に恐怖を感じ、急遽之が設計に着手し、一九一八年A-7-Vと稱する戦車を製造した。米國は佛國の要求に依つて一九一七年試製に着手したが失敗に歸し、其の後は英國及佛國の戦車を製造したが大戦に参加するに至らなかつた。歐洲大戦以後には經驗に鑑み戦車の戦闘に缺ぐべからざる事を知るに至つて、各國競うて研究に着手し、武装・装甲・速度の諸點、將又機構に於て著しく進歩發達し、遂には超大型戦車・水陸兩用戦車・飛行戦車等の特殊のものも出現した。又列強は平時より戦車隊を常設し、其の保有數も多數に上つた。

### 指導形態

#### 指導上の認識點

- 1 本課は戦車・自動車兩部隊を一團とした所謂快速部隊の大活躍を叙した時局的軍事教材で、此の壯快至極の場面に直面させ、新銳の武器に對する認識を新たにし、且つ國防觀念を養ひ皇國精神を鼓舞するを其の目的とする。
- 2 従つて前巻の空中戦や日本海海戦と連絡させ、海・空・陸三位一體の立體的鐵壁陣の強勢さを想像せしめると共に、愛國の熱情を咬り祖國愛護の念を旺盛ならしめん事を期すべきである。
- 3 戦争文學の理解と言つた方面からも眺め、非常切迫強壓の文學感を把握させ、きびきびした筆致・壯絶無類な展開描寫の巧妙さに傾倒せしめ、彼等が持つ文章觀の幅員を擴大せしめる事も忘れてはならぬ。
- 4 本課は今次の事變の産物たるは言ふ迄もないが、尙適宜實戰談を取り入れ、事變に關する

認識を一層切實ならしめる用意が肝要である。配當時間は大體四時限見當で指導を終る様立案するのが妥當であらう。

#### 第一次指導

- 1 題目の指導。
- 2 時節柄兒童の飛付きさうな好題目である。挿畫を一瞥させ讀心を咬つて讀みに入るがよい。
- 3 全課の通讀。
- 4 讀心の旺盛と成つた頃を見計ひ直に通讀させる。
- 5 ノート學習。
- 6 第一印象其の他を大切に記帳させておく。
- 7 不明の箇所は質問させる。
- 8 新出文字は辭書を輔導して索引させる。
- 9 側 彼 我 布 揮 猛 敢 却
- 10 難語句は先づ類推させてから指導する。
- 11 機械化部隊 全速力 戦車部隊 彼我



- 9 戦況 自動車部隊 放列 掩護射撃 散開 あびせかけ 散兵線 連射砲 歩兵砲 機關銃 戦機 砲塔 指揮官 戦闘隊形 左側面 おそひかゝる 猛烈 開始 破裂 激動 發射音 機關部 火柱 火えん 鋼鐵の體當り 勇敢 亂闘 彼我入り亂れ 一大修羅場 信念 發揮 煙幕 退却 すかさず 追撃命令 敗走 戦火 ふみにじつて 痛快事 主力の合戦 たけなは 遠雷 背後 ひるがへす
- 5 低音讀。  
▽息詰る切迫感を直觀させ近代戰の壯烈な雰囲気浸らせて。
- 6 指名讀。  
▽適宜に句切つて、輪讀式に。
- 7 挿畫と文とを照合させる。  
▽文のこゝを見せたものが、文にどう出てるか・此の挿畫を見てどう思ふか等。
- 8 文の觀點を確め文意の所在を探らせる。  
▽何遍も反覆通讀させて。

- 9 ノート學習。  
▽戦況の展開を時間的に考察吟味させる。話方。
- 10 ▽前項の記載事項に印象や感想を交へて。ノートを整理して提出させる。
- 11 **第二次指導**
- 1 二三四回自由に通讀させる。
- 2 ▽不明の箇所は其の都度自由に質問させる。グループ學習。
- 3 ▽グループ毎に問題を作製して研究させる。檢討的通讀。
- 4 ▽前項の疑義を文に問うて解決させる。問題學習。
- 5 ▽謄寫した問題を配付し解答をテスト的に配帳させる。  
—我が戦車部隊の作戦は?  
—何時頃めざす場所に着いたか。  
—小高い丘から見た彼我の戦況は?  
特に敵戦車の行動は?

- 9 話合。  
▽文の觀點に注意させて。
- 8 範讀。  
▽各自にゆつくり黙讀させて。
- 7 文の中心點や文意の所在を省察させる。  
▽各自にゆつくり黙讀させて。
- 6 話合。  
▽彼我の作戦や戦況の物凄さ等を話題の中心として。
- 5 書取練習。  
▽文の展開に重要な語句を拾はせて。
- 4 話合。  
▽味方の砲兵や歩兵の攻撃は?  
—戦機が熟したのは何時頃か。  
—午前七時頃の戦況は?  
—敵戦車に對する我が戦車隊の活動は?  
—勝利の秘訣は何か。  
—會戦後の敵の様子は?  
—退却する敵を我が軍はどうしたか。  
—其の光景の痛快さは?  
—右方はるかの戦況は?  
—凱歌をあげるのは何時頃の見込か。

- 10 ▽讀後の印象や所感を中心に。指名讀。  
▽大きく句切つて、輪讀式に。
- 11 低音讀。  
▽場面の雰囲気浸らせて。ノートを纏めて提出させる。
- 12 **第三次指導**
- 1 通讀練習。  
▽座席の順に、又尻取式に指名させて。指名讀。
- 2 ▽中・劣生を主として。話合。
- 3 ▽文のクライマックスや文意を中心に。文意の檢討。
- 4 ▽どこが一番痛快か。物凄いはどこか等。學習事項の整理。
- 5 ▽内容方面では近代戦術や近代武器の数々、



- 7 形式上では展開描寫の巧妙さ等。  
補充説話。  
▽今次の事變に於ける快速部隊の躍進振や戦車隊の活躍等。
- 8 朗讀練習。

テスト問題

一、次の語句の意味を書きなさい。

- 1 勝利は信念にある
  - 2 何といふ痛快事であらう
  - 3 日本男子の面目
  - 4 掩護射撃
  - 5 一大修羅場
- 二、次の文を読んで括弧の中の不適當と思ふ方を消しなさい。

- 1 我が戦車部〔隊〕は、午前七時十分〔めざす〕場所に着いた。
- 2 戦車部隊長は〔砲〕塔〔高く〕指揮官にならへ。〔の〕〔命令〕を出して〔退却〕し始めた。

- 9 話方練習。
- 10 視寫・聽寫練習。
- 11 新出文字の書取。
- 12 語句の應用練習。
- 13 テスト。

3 地面が〔曲〕折してゐるので車體は〔左〕

〔下〕に激動するが、〔日〕頃〔鍛〕へに鍛へた我が〔腕〕、射撃は〔眞直〕である。

三、次の語句の中から戦争に關係のあるものを十ほど選り出さない。

- |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 戦車  | 硝子  | 酸素  | 砲兵  | 寢臺  |
| 紳士  | 本箱  | 放列  | 蚊帳  | 射撃  |
| 機關銃 | 紙製  | 爆撃  | 部隊長 | 草花  |
| 偵察  | 煙幕  | 扇子  | 水蓮  | 戰闘機 |
| 機關部 | 修羅場 | 指揮官 | 散兵線 |     |

第十四 ほまれの記章

新讀本でも今次の事變が本格的に取材されたのは本課が最初である。我が國未曾有の大戦争であり、國力を賭しての聖戦でもあるから讀本の教材と成るのも當然過ぎる。名譽の負傷者を主題として其の赤誠溢るゝ純情には、讀者をして痛く感激せしめ、思はず涙ぐませずには置かねであらう。話し掛ける主人公も相手のをぢさんも其の妻子や醬油屋の主人等全部が全部、變つた立場に在つて夫々の任務を果して居る。

互ひの眞心と眞心とが觸れ合つては妙なる音律を發する。それは全く緊張し切つた琴線の様だ。相互の間には唯純潔な熱情が有るのみだ。同情と感激とで一杯である。負傷して不自由を極めてさへ何の不平もない。それどころか戦死した戦友に申譯無いと託ち、義足を賜つた國母陛下の御仁慈に泣き、感謝と奉仕の其の日々を送るのをぢさんには思はず頭が下るであらう。

興安嶺風の吹荒ぶ戰場に機械化部隊を活躍させ、前課との連絡を取つたのも興味が深い。昭和の鳥居勝商は此處にも生きて働いて居る。斯くてこそ、ほまれの記章は燦然として榮光を放つ譯である。

挿畫の印象と其の説明

第九十三頁の寫眞は最近實施された軍人傷痕記章で、中央の浮彫は武神像、十字形の黒い部分が上代の盾を現し、其の間に交錯された櫻透しの鏃を組合せた見事な新記章である。名彫刻家として定評ある日名子實三氏の創作に成り、昭和十三年九月一日から陸海軍傷痕軍人に授けられる。此の記章は戦傷と公傷の二種に別れ、戦傷者へは全部金鍍金したものを、公傷者へは直接敵と戦つて傷痕を受けざる戦時服務中の傷痕者へは中央の武神像のみ金鍍金したものが授與される規定で、厚生大臣が省令に定められた處に依り、各府縣知



事を通じて傳達される。

### 文字語句

#### 新出文字

障シヤウ后コウ賜タイ

#### 語句と其の解説

**記章**(キシヤウ) 國家的に記念すべき事件に參與し又は關係した者に内閣賞勳局より授與される標章。勅令を以て公布せられ、各種の從軍記章・憲法發布記念章・大婚二十五年祝典之章・皇太子渡韓記念章・韓國併合記念章・大禮記念章・軍人傷痕記章・軍人遺族記章等があり、又之に準ずべきものに各種の褒賞及赤十字社々員章等がある。**義足**(ギソク) 下肢缺損部を補填する器具。歩行と荷重の支持を目的とする。裝用する箇所により下腿義足と大腿義足とに分つ。前者には足關節が可動裝置に依り尖足位になるものと、然らざるものがあり、後者には膝關節及足關節の可動のものとならざるものがある。何れも其の主部は木・アルミニウム・ジュラルミン等を骨子として製作されて居る。尙農業・工業等の労働に於ける特殊の作業に適合する様考案された作業義足がある。例へば農業用としては義足の下端を棒状又は舟底形としたもの等。**興安嶺**(コウアンレイ) 東亞の大山脈、大小二山脈ある。大興安嶺は蒙古高原の縁邊を爲すもので、蒙古と滿洲との境に連り、南は熱河省から北は黒龍江畔迄、長さ一、五〇〇軒。水成岩及花崗岩より成り、高さ一、五〇〇軒位。北部は森林が深い。小興安嶺は黒龍江と嫩江との分水嶺を爲して西北から東南に連る山脈で、龍江・黒河兩省の境にある。多く片麻岩・結晶片岩より成る古い褶曲山脈、中央に和爾冬吉(ホルドンギ)火山があり、大部分は森林である。勿論作話であるから何れとも斷じ難いが、今次の事變を題材としたものとすれば此處の興安嶺は大興安嶺を意味したもので、正確に言へば陰山々脈といふのが妥當であらう。

**故障**(コシヤウ) さしつかへ。さゝはり。さしきはり。障礙。邪魔。**止血**(シケツ) ちどめ。止血法に

は一時的の救急止血法と終極的の永久的止血法とがある。此處のは勿論一時的の止血法である。救急止血法は(1)指壓法(2)緊縛法(3)タンボン壓抵法の三途がある。指壓法は輸入主脈管に指で壓力を加へ、其の管腔を閉塞せしめるもの、緊縛法は出血部位より中樞に位する適宜の部分に帶又は其の他の物を以て緊縛するもの。タンボン壓抵法は殺菌ガーゼを強く創腔に栓塞し、充分壓を加へて強く縛するもの。戦線では不斷からは是等の處置法を心得其の準備を整へてある。**招魂社**(セウコンシヤ) 殉國の志士又は從軍戦

死者の魂魄を弔祭する社。官祭招魂社と私祭招魂社の別があるが、最近訓令を以て各府縣各地に之が設置を奨励して居る。**遺族**(キゾク) 死者の後に残つた家族。戦死した軍人又は戦地で傷病し其の爲三年以内

に死した者・竝に陸海軍大臣が前二者に相當すると認めた軍人の遺族には軍人遺族記章を授與される。制式は縦一〇軒の紫色絹組紐の中央部位に、徑二五軒の櫻花の金色金屬章(櫻花は暗黒色燻)を附する。

**軍人傷痕記章**(ケンジンシヤウイキシヤウ) 名譽ある陸海軍傷痕軍人たる事を象徴し、之を保護・優遇する趣旨から大正十二年に制定された記章。恩給法に依り陸海軍人(准軍人を含む)としての増加恩給又は傷病賜金の受領權の確定した者に授與される。(大正十二年勅令一九九號、昭和六年勅令一九九號改正) 甲乙二種あつて甲種は戦闘又は之に準ずる公務に基因した傷病に就ての者に、乙種は其の他の者に授與される。暗色金屬で准士官以上の者は櫻花・文字・側面を金色、他は銀色(楯を形どつたもの)。前後の經緯から考へ本課も恐らく之に依つたものと想像されるが、挿畫にも示された様に最近此の記章は更に改正され九月一日(昭和十三年)から實施される旨官報を以て公布された。同記章は『戦傷』『公傷』の二種に別れ從來は豫後備役軍人にも授與されて居たが、今回の改正に依り軍病院から退院して引續き現役に服する軍人にも授與される上、保護の徹底を期する爲厚生大臣が省令を定めて傷痕軍人の戸籍簿ともいふべき臺帳を創設、各府縣廳に之を備付け、記章の傳達にも嚴かな式を開き府縣知事の手から傳達される事と成つた。新制定の記章



は彫刻家日名子實三氏の創作に依り、中央に武神像を刻み放射狀に紅七寶の上代楯及平根櫻透の鍔各四箇を配した徑三種の頗る美麗・豪華なもので「戦傷」は全部金鍍金、「公傷」は中公武神像のみ金鍍金、臺は何れも純銀で従來の簡単な楯の面に戦傷・公傷の二字のみを記したものと甚だしい相違である。

### 指導精神

支那事變勃發以來既に一周年、忠勇なる皇軍の力戦奮闘は全支到る所に敵の大軍を撃破し、赫々たる戦果を挙げつゝあるが、此の間砲烟彈雨の裡に名譽の戦傷を負ひ、或は不幸にして疾病に倒れた將兵の數も決して少くはない。これら名譽ある白衣の勇士と従來兎角恵まれることの薄かつた日清・日露兩戦役其の他既往の傷痍軍人に十分なる保護對策を確立することは現時局下に於て喫緊の要務であり、支那事變に有終の美を收め、延いては今後の戦を有利に導き國運發展の素因を爲すものである。一身を抛つて邦家の爲に盡した傷痍軍人に對しては官民舉つて感謝の至情を獻げると共に、出征前の状態を目標としてこれら勇士達が心身共に恢復し社會的・經濟的に自立獨行できる様職業的の基礎を固めさせ、傷痍軍人たるの名譽を永く保ちつゝ君國の爲に更に一層の奉公を爲し得る様に優遇保護の方法を講ずべきは勿論である。然るに傷痍軍人保護事業は頗る複雑多岐であつて、特殊の専門的取扱を要し實施上幾多の困難を伴ふものである。一口に傷痍軍人と言つても其の傷痍疾病の種類・程度・家庭の事情等は全く各人各様であり、従つて之に適應するやう迅速・懇切・的確に措置し成果を擧げる事は中々容易でない。特に注意すべきは従來能く有つたやうに傷痍軍人を以て勞働に従事し得ない廢人で有るとし、或は傷痍事業を單なる慈善事業と考へてはならぬといふ事である。故に政府は今回の保護對策を考究し實施せんとするに當つても深くこれらの點に留意し慎重細心に其の施設方針と實施事項に検討を加へつゝあるのである。

元來傷痍軍人と言へば一般には傷痍軍人を總稱し得る譯語であるが、現時は戦闘其の他公務の爲傷痍を受

け、恩給法に依り陸海軍人（准軍人を含む）として増加恩給・傷病年金又は傷病賜金の受給權の確定した者をいふ特殊の語と成つた。（是等の者は本人の願出に依り陸軍大臣又は海軍大臣から軍人傷痍記事を授與される）以前は英語の *invalid* を採つて廢兵と稱したが、名稱適當ならずして昭和六年名稱を變更。我が國に於ける主なる戦役又は事變に依り生じた傷痍軍人は現在數十萬に及んで居る。是等軍人の優遇に就ては歐米諸國に於ても各々國情に適した制度がある。之を古に遡つて温ねると既に西曆紀元前數世紀の頃人道的救恤の存在を見る。彼のアテーネの如き夫等を悉く國費に依り扶養し、マケドニアは植民地に於て彼等に適當な業務を授けた。科學の進歩に伴ひ戦闘益々慘烈を極め、是等軍人の數愈々多からんとし、其の優遇は更に必要と成つた。我が國に於ても日露戦後廢兵院（後傷兵院と改稱）を設立せられ、一部の傷痍軍人を限り收容されて居たが未だ十分とは言へなかつた。滿洲事變や第一次上海事變、更に今次の事變に生じた傷痍軍人も尠く無いので、最近政府は巨費を投じ大規模の組織の下に之が保護に努めて居る。即ち支那事變が擴大するに及び昨年（昭和十二年）十一月一日内務省社會局に『臨時軍事援護部』が設けられ、同部の『傷兵保護課』が中心と成り傷痍軍人保護對策の企畫調査に當つて來たが、本年（昭和十三年）一月厚生省が新設されたので其の事業は同省に移管される事と成つた。厚生省は直に『傷痍軍人保護對策審議會』を設け、厚生大臣木戸幸一侯を會長とし朝野各方面の權威者五十餘名を網羅して晝夜兼行熱心に議を練つた結果、同一月二十七日の同審議會第二回總會に於て詳細に亘る答申を得た。此の答申に基いて政府は愈々保護對策の確立に乗り出す事になつたが、之に要する昭和十三年度の經費三千五百三十萬圓も去る第七十三回帝國議會で可決されたので、先づ第一着手として厚生省外局『傷兵保護院』を設置したのである。斯くて傷兵保護院は新に傷痍軍人保護事業の中心機關と成り、事業の直接實施に當ると共に道府縣や各種團體の傷痍軍人保護事業の指導助成を行ふ事と成つた。傷兵保護院は厚生大臣の管理に屬し、傷痍人の療養・職業保護に關する事務を掌事になつて居る。院は總裁・副總裁以下官房總務課と計畫・事務の二局に依り構成され、計畫局は指導・計



畫・工營の三課に、業務局は業務・輔導・醫療の三課に各々細分されて居る。總裁は親任の名譽官であつて、初代總裁としては陸軍大將本庄繁男が親任せられた。此の外本事業の重要性に鑑み、院に五名以内の顧問、十五名以内の參與・専門委員（任期二年）若干名を置くことに成つて居る。

軍人・軍屬の傷疾疾病は其の原因に依り等差がある。之を陸（海）軍人軍屬傷疾疾病等差といふ。現行の法規に従へば其の程度に應じ、之を一等症と二等症とに區分、一等症とは

- 1 公務に依り傷疾を受け、又は疾病に罹りたるとき。
  - 2 恩給法（四八條一項一號及二號）に該當する流行病に罹つたとき。
  - 3 軍人軍屬たる特別の事情に關聯して生じた不慮の災厄に因り傷疾を受け又は疾病に罹り、部隊長に於て公傷に準ずべきものと認めたる時。
  - 4 以上各號の傷疾疾病一旦治療の後再發したるとき。
- 等がそれで、一等症は現認證明書（大正十二年閣令七、別紙一四號書式）事實證明書（同上）等傷疾疾病の原因を證明するに足る公文書を以て證明せらるべきである。

二等症とは

- 1 一等症以外の原因に依り傷疾を受け又は疾病に罹つたとき。
  - 2 前號の傷疾疾病一旦治療の後再發したるとき。
- 俗に花柳病又は作爲病等を三等症と稱する事あるも、之は單なる戲稱で傷疾疾病等差は一等症と二等症の二つ以外には無い。本課のをぢさんは殊勳甲、傷疾等差は一等症であるのは勿論である。

### 指導形態

#### 指導上の認識點

- 1 本課の指標は正一君の父の忠君愛國、三郎や醬油屋のをぢさんに見る銃後國民の生活態度等に共感させ、傷疾軍人に對する慰藉や國民的感謝を忘れぬ様心掛させるにある。
- 2 文は平易であり主題感情も生活的で端的に表現されて居るので、成るべく干渉を避けつつ附けに投渡して讀書發見的に味到せしめる様にし、反覆誦讀させてから話方や劇化等多方的に取扱ひ、前項の精神を性格化する迄徹底させるを念とすべきである。
- 3 配當時間は大體四時限を妥當とし、生活文であるから綴方等とも連絡し指導の完璧を期するの心構が望ましい。

#### 第一次指導

- 1 題目の指導。  
▽題目の意味だけを確認直ぐ通讀させる。此の際内容には深く立入らぬがよい。
- 2 自由學習。

▽印象其の他は記帳させておく。

- 3 文の荒筋を掴ませる。  
▽叙述内容を手短かに。
- 4 不明の箇所を質問させる。  
▽新出文字は僅に三字であるから、練習文でも讀ませる積りで別段注意する要もあるまい。

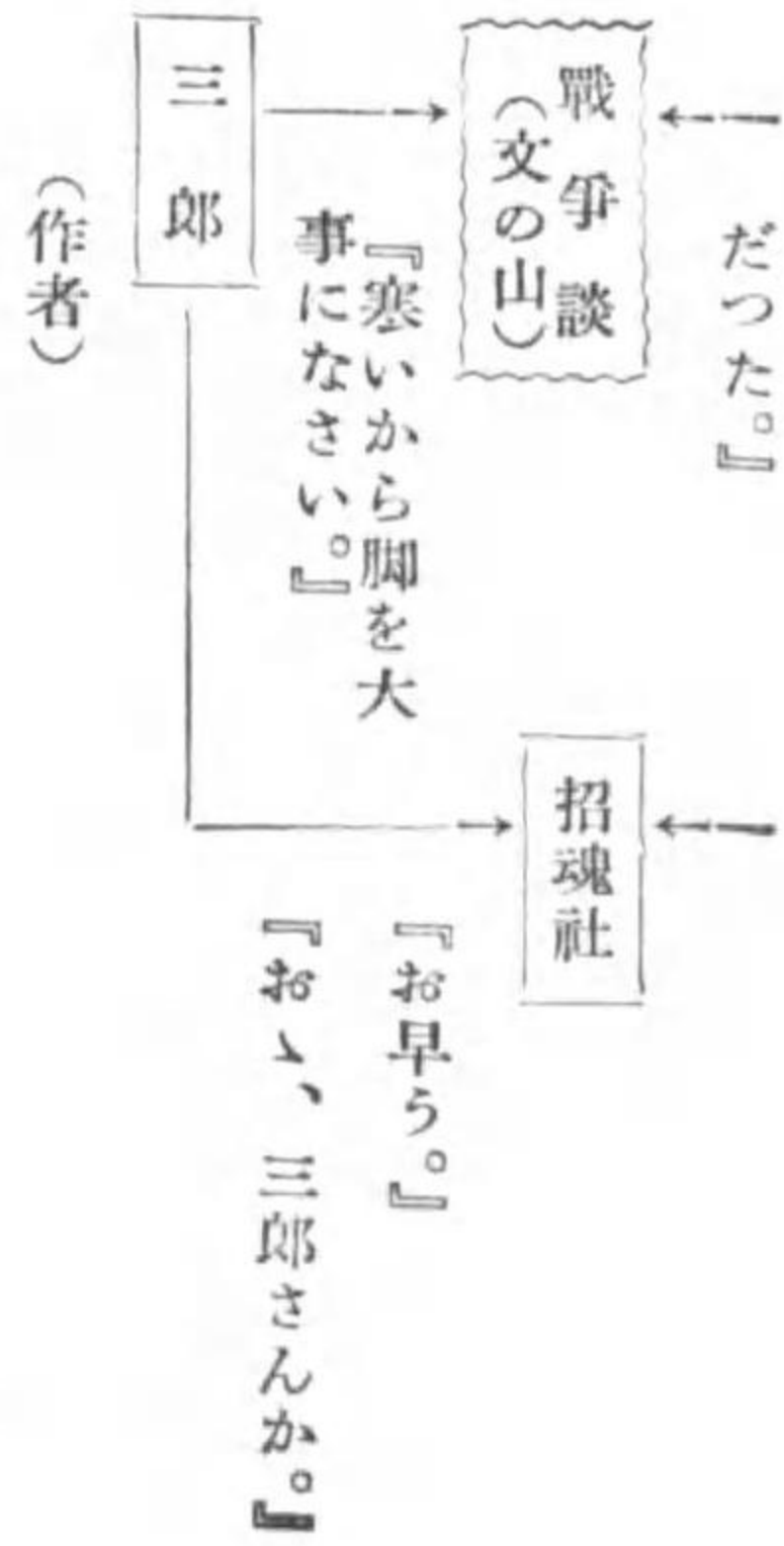
#### 障 后 賜

▽難語句は質問を待ち一齊指導する。  
記章 木槌 たが 義足 負傷 うづく  
手際 戰爭談 興安嶺おろし 輕機關銃  
故障 止血 突撃 參加 招魂社 眞劍  
な様子 遺族 軍人傷疾記章 賜つた  
つり込まれて

- 5 繰返して反覆通讀させる。  
▽文の觀點に注意させて。
- 6 指名讀。  
▽適宜に句切つて、數名に。  
▽文意の所在を探らせる。
- 7 文意の所在を探らせる。  
▽把握した文意は記帳させておく。



- 9 低音讀。  
▽聲を出して反覆讀誦させる。
- 8 話合。  
▽印象や感想を中心に。
- 7 黙讀。  
▽場面の雰囲気にならせて。
- 6 範讀。  
▽文の觀點に注意させて。
- 5 指名讀。  
▽(一)(二)を別々に。
- 4 話合。  
▽板書した文圖を中心に。



- 10 ノートを経て提出させる。
- 第三次指導
- 1 輪讀。  
▽一句づつ、座席順に。
- 2 會讀。  
▽グループ毎にプランを立てさせて。価値の感得。
- 3 皇軍將士の勞苦や銃後國民の感謝態度等。
- 4 話合。  
▽文の着眼・場面の雰囲気・思想關係等。
- 5 話方練習。

- 8 ノートを整理して提出させる。
- 第二次指導
- 1 通讀練習。  
▽全課を一氣に讀破させる。



- 2 話合。  
▽感想や文意を中心に。
- 3 思想關係の吟味。  
▽文脈を辿つて簡単な文圖に纏めさせる。



6 ▽人を極めて、對話的に演習。

▽學級總掛で二幕二場の劇に脚本化させる。  
(第一場)正一の家・(第二場)招魂社頭。

7 劇化實演。

▽第一場は教室・第二場は附近の社頭でロケ

テスト問題

一、次の文にあやまりがあつたら正しなさい。

1 左足をのびし、左足でぐつと木槌をかゝえながら、樽を便つて木のたがをわめる。

2 三郎さん、正一はもうじき歸へります、さつき、樽を居けに醬油屋さんまで行きました。もお少し待つていてやつて下さいね。

3 今日、はたしの上管や戦友の命日なんだ。おぢさんは不自由ながらこうして生きてゐる。それに戦死した人や、其の遺族の人にすまないように思はれる。おはびかた、お参りとしたのだよ。

1 ション風に。

朗讀練習。

視寫・聽寫練習。

新出文字の書取。

語句の應用練習。

12 テスト。

二、次の書取をしなさい。

1 セワ 2 カンシン

3 テツタヒ 4 ギソク

5 センサウダン 6 フシヤウ

7 ムチュウ 8 コシヤウ

9 ゴクラウ 10 セウコンシヤ

三、次の語句を二つ使つて短文を三つ書きなさい

大分 やさしく 運悪く

いきなり 立止つて かたぐ

せつせと だしぬけ 不自由

それつきり

教材の劇化

ほまれの記章

第一幕 正一の家

人物

正一

正一のおとうさん

正一のおかあさん

三郎

舞臺

正一のお父さんの仕事場即ち樽製造場、樽や大工道具、たがにする竹などちらばつてゐる

(幕があくとお父さん、トン／＼トン／＼樽をせつせと作つてゐる。左脚は義足—ゴム長をはかせ光る金をあてゝしばつておく—そばに正一の友人三郎が見てゐる)

三郎 おぢさん、負傷された時は痛かつたでせう。

父 たまがあたつた時は、痛いとも何とも思はなかつたよ。たゞ何かでびしやつとぶたれたやうな感じだつた。(と仕事をしながらいふ)

母 (とそこへ正一の母が火鉢を持つて来て)

父 今日、は午後から大分冷えますね、痛みませんか。ちよつと、うづくやうだがね、なに此のぐらゐ何でもないよ。(ときつぱりいふ)



母 三郎さん、正一はもうちき歸ります。さつき樽を届けに醬油屋さんまで行きました。もう少し待つてみてやつて下さいね。

三郎 僕、かまひませんよ、をばさん。

(母はしきりと仕事を手傳ふ。遠くの道具を取つてやつたり、木くづをかたしたりして)

(間)

三郎 をちさん、をちさんの戦争したのは興安嶺でしたね。

父 さうだ、寒い日だった。今日より餘程寒かった。不意に現れた三千餘りの敵と出合ったのさ。

三郎 味方は?

父 をちさんの大隊で五六百の小勢だ、ところが突撃前の大事な時になつて、運悪くをちさんの輕機關銃が急にきかなくなつたんだ、しまつたと思つて、いきなり『故障』と叫んだ。

三郎 それでどうしたんですか?

父 其の時、隣にゐた分隊長が『あつ』と言つて倒れた、思はず『分隊長殿』と近附くと『おれにはかまふな、早く直して撃つんだ。』と言ふ。これが、分隊長の最後の言葉だった。をちさんの負傷したのは、其の時であつた。をちさんは、たゞもう夢中で故障を直した。『タ、タ、タ、タ、……』と快い音が鳴り出した時の嬉しさ。

三郎 直つたのですか?

父 すると、後の戦友がはひ寄つて『早くほうたいしろ。』と押しのけた。始めて気がついたをちさんは、血まみれの軍服を切開いてすぐ止血をし、ほうたいをしたが、それつきりもう立てなかつた。

三郎 その時、脚をやられたのですか?

父 さうだ、こんな脚ぐらゐで、どうしてあの時、最後の突撃に参加しなかつたか、それがぐやしくて

ならぬ。(といつて涙ぐむ、母も三郎も涙ぐむ—間—この時、正一が)

正一 たゞ今。(と元氣に這入つて来る) おとうさん。醬油屋のをちさんがよろしくといはれました。寒いから脚を大事になさい。さうして出来たらいくらでも作つて届けて下さいいつて。

父 (にこ／＼しながら) さうか。ありがたいことだ。出来るだけ勉強して作らう。御苦労だったな。さつきから三郎さんが来て待つてゐられたんだよ。

正一 三郎君、すみません。

三郎 いゝんだよ。僕、今戦争の話を聞いて、をちさんの勇し事に感心しちゃつた。

正一 勇しいだらう、僕のお父さん!

三郎 ン。(と大きくうなづく)

正一 何して遊ばう? まり投げしようか。

三郎 ン。(正一はポケットからまりを出して、二人で投げはじめ)

—幕—

#### 第二幕 招魂社の前

#### 人物

正一

正一のおとうさん

三郎

#### 舞臺

社頭の光景、實演の際は附近の社を利用したい。

(幕があくと正一の父、左脚に義足をつけ正一と一心に神前で手を合せてゐる。とそこへ三郎が現れる。三郎立止つてじつと見とれる。やがて神前の二人は参拜し終つて歸らうとする)

三郎 お早よう。



父 おい、三郎さんか。君、こんなに早くお参りとは感心だね。

三郎 をちさんこそ脚がわるいのに大變ぢやありませんか。

父 今日は、わたしの上官や戦友の命日なんだ。をちさんは、不自由ながらもかうして生きてゐる。それが、戦死した人や、遺族の人たちにすまないやうに思はれてね。おわびかた／＼お参りをしたのだよ。(といつて、もう一度社殿の方をふりむく)

三郎 あ、をちさん。それ軍人傷痕記章ですね。

父 さうだ。

三郎 ずいぶん光つてゐますね。

父 先日いたゞいたのだが、ありがたいことだ。

三郎 全く生まれの記章です。私たちは其の記章を附けたをちさんたちにいくら感謝しても感謝しきれません。をちさん、ちよつとお待ち下さい。僕すぐお参りしてお供しますから。

(と急ぎ足で社前に進み、うやく／＼しくおがんですぐ戻つて来る)

三郎 石だんです、大丈夫ですか。(と正一と二人でよりそつて助けようとする)

父 ありがたう。ひとりで大丈夫だよ。今日はお参りなので、皇后陛下から賜つた義足をつけたが、これで土を踏むのは、ほんたうにもつたいない。ありがたいことだ。ありがたいことだ。

(正一・三郎感激にあふれた様子でをちさんを見つめ、二人顔見合はせて涙ぐむ)

(舞臺裏では鶯の聲ほがらか)

—(幕)—

## 第十五 萬葉集

時代は更に古に溯つた。我が古典文學の王者たる萬葉集を語るに、人口に膾炙した歌聖人麿の名歌を始め、幾多萬葉歌人の代表的作品を選び、巧に作者の經歷や詠歌の動機等を説かれた邊に、賢明な編纂振が窺はれ寔に敬服の外はない。

日本の文化は支那や歐米の文物を移して發達したが、獨り我が和歌道のみは我が國独自の境地に出發し、且つ獨特の發達を見せて現代に迄及んで居る。俳句も亦和歌から派生した一分野に過ぎない。其の和歌や俳句が國民文學として、古來我が同胞の趣味生活を如何に豊富にしたことか。素より好むと好まざるとの別はあらうが、苟も生を此の國に承けた御民我等は、千數百年來綿々たる歴史を有する我が和歌道に對し無關心で居る譯には行かない。實に萬葉集こそ我が歌道の興隆を促した最初の尊い産物であり、然も千二百年後の今日迄、美しくも又妙なる我が國独自の趣味と強く雄々しき皇國精神とを百花燎亂たる詞藻の間に内蔵し、幾多不朽の傑作を後世に遺して呉れた。之を學び之に親しむのも亦、我等國民の誇であらねばならぬ。

### 挿畫の印象と其の説明

百一頁の寫眞は持統天皇の「春過ぎて夏來にけらし」の御製で名高い奈良縣磯城郡香具山の遠望である。畝火・耳成の二山と共に大和の三山と稱せられ、奈良盆地の南部に鼎立して居る有名な山で、殊に平安朝時代迄の歴史に歌に度々現れて人口に膾炙して居る。

### 文字語句



新出文字

悟 躍 浦 純

讀替文字

萬(新出は卷五、マン) 性(新出は卷八、セイ)

語句と其の解説

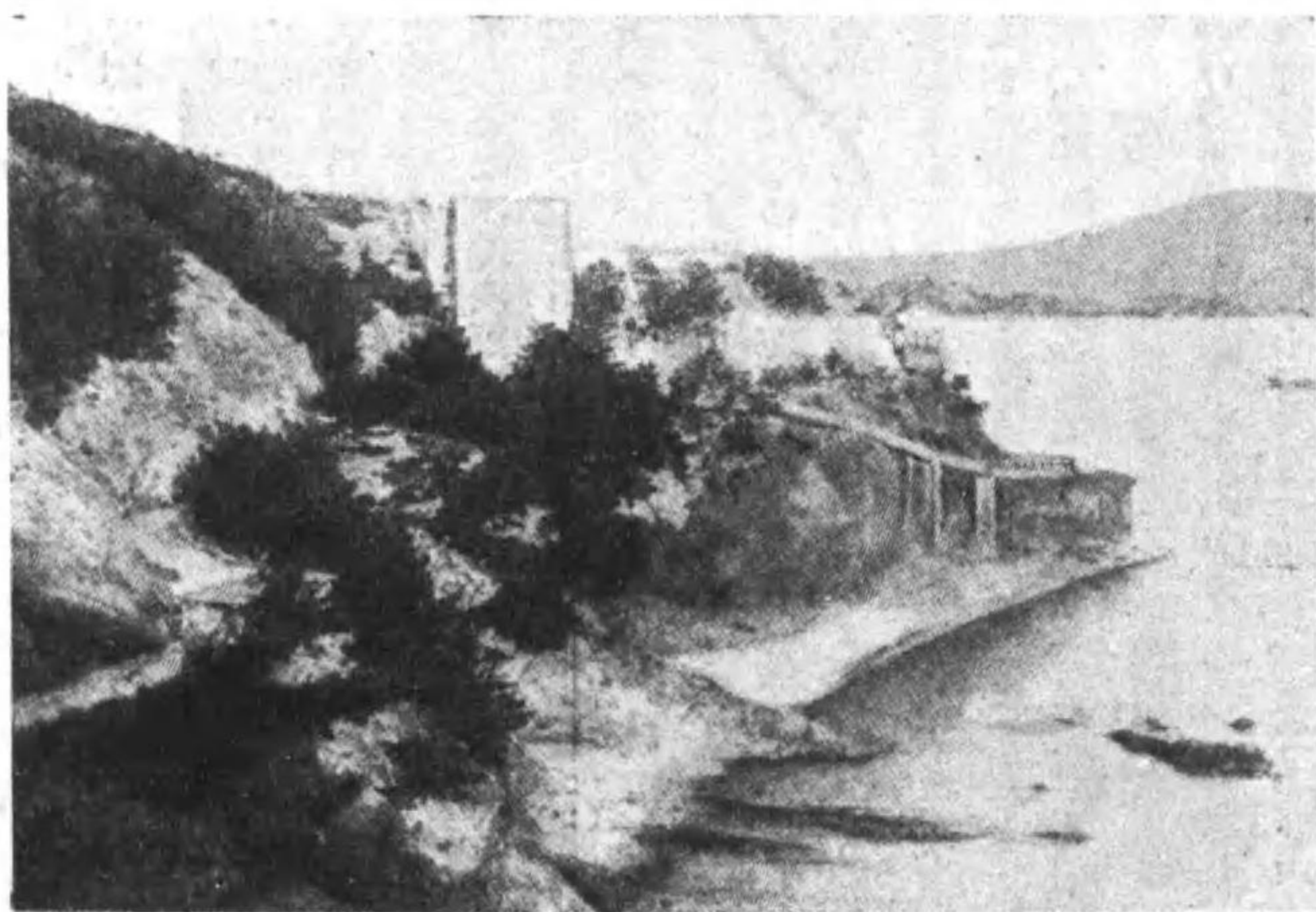
萬葉集(マンエフシウ) 我が國最古の上代歌集。二十卷。仁德天皇の朝から淳仁天皇の天平寶字三年(皇紀七五九年)迄の作を含むが、飛鳥藤原宮時代以後の作が大多数である。萬葉の意に就ては萬世・多數の譬喩。萬の言の葉等數説あるが、萬世説が隱當であらう。雜歌・相聞・譬喩歌・挽歌等の部に分ち、略々時代順に排列されてあるが、卷十七以下は部を分たない。歌體は長歌・短歌・旋頭歌の三種、歌數は四、四六二首、外に或本歌等七三首。撰者は橋諸兄説・大伴家持説・諸兄家持共撰説等があるが、近時の研究では諸兄説の根據は疑はれる。一人一時の撰ではなくて何回にも撰修を重ねて今日の形を成し、其の中の一人として家持の參與したことが認められる。最後の撰修の時期も奈良朝末とも、平安朝初期平城天皇の朝ともいふ。

今日よりはかへりみなくて大君の(ケフヨリハカヘリミナクテオホギミノ) 卷第二十、防人歌の中にある。作者は火長の今奉部與曾布(イママツリベノヨソフ)。火は軍防令に「凡兵士十人爲二火」とあり、今奉部與曾布は其の長である。しこの御楯(シコノミタテ) しこ(醜)は自分を卑下していふ語。御楯は楯となつて防ぐの義。君の御守護。君の守り。しこの御楯は君の御楯となつて寇を防ぐべき自分を卑下し謙つて言ふ。物の數ならぬ藩屏。大伴氏(オホドモシ) 神別。高皇產靈尊五世の孫天押日命に出づといふ。後、淳和天皇の御諱を避けて單に伴氏と稱する。天押日命三世の孫道臣命、神武天皇の東征に隨つて功あり、世々武を以て朝廷に仕へ、大連となる者もあつた。上古に於ては其の勢力盛であつたが、蘇我氏の興るに及んで漸く衰へた。大伴家持(オホドモノヤカモチ) 萬葉歌人。姓は宿禰。天押日命の後、安麻呂の孫、旅人の

子、大伴郎女(イラツメ)は其の母。誕生は元正天皇の養老二年で、死んだのは平安朝の初期、即ち桓武天皇の延暦四年八月二十四日で、年は六十八歳、官位は中納言從三位であつた。彼の作品の最大なるものは萬葉集である。萬葉集の一部(或は大部分)の編纂は不朽の事業と言へる。海行かば水づくかばね(ウミニカバミツクカバネ) 卷第十八、作者は大伴家持。詞書に「賀二陸奥國出レ金詔書二哥一首并短歌」とあり、原歌は「葦原の 瑞穂の國を 天降り しらしめしける 天皇の 神の命の 御代重ね 天の日嗣と しらし来る 君の御代御代 敷きませる 四方の國には 山河を 廣み淳みと 奉る 御調寶は 數へ得ず 盡しも兼ね つ 然れども 吾大王の 諸人を 誘ひ給ひ 善き事を 始め給ひて 金かも 樂しけくあらむと 思ほし て下惱ますに 鷄が鳴く 東の國の 陸奥の 小田なる山に 金ありと 奏し給へれ 御心を 明らかめ給ひ 天地の 神相納受ひ 皇御祖の 御靈助けて 遠き代に かゝりし事を 朕が御世に 顯してあれば 食國は 榮えむものと 神ながら 思ほ召して ものゝふの 八十伴の雄を まつるへの むけのまにまに 老人も 女童兒も 其が願ふ 心足ひに 撫で給ひ 治め給へば 此をしも あやに貴み 嬉しけく 愈思ひ て 大伴の 遠つ神祖の 其の名をば 大久目主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大皇の 邊にこそ死なめ 顧みは 爲じと言立て 丈夫の 清き彼の名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の子等ぞ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立 人の子は 祖の名絶たず 大君に 奉仕ふものと 言ひ繼げる 言の職ぞ 梓弓 手に取り持ちて 劔太刀 腰に取り佩き 朝守り 夕の守りに 大王の 御門を守護 我をおきて また人はあらじと 彌立て 思ひし増る 大皇の 御言の幸の 聞けば貴み 反歌三首 丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸を聞けば貴み 大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立て 人の知るべく 天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く 天平感寶元年五月十二日、於三越中國守館二大伴宿禰家持作レ之」とある。水づくかばね(ミツクカバネ) 水づくは水にひたる。水に漬かる。水びたりになる。草むすかばね(クサムスカバネ) 草むすは草が生える。むす(生)はなり出づ。はえる。



かへりみ ぶりかへつてみる。ぶりむく。躊躇。柿本人麿(カキノモトノヒトマロ)奈良朝の歌人。傳不明。持統・天武二朝に仕へ、紀伊・伊勢・吉野に扈從し、晩年石見に赴任、そこで歿した事が自歌を通して知られるに過ぎない。官位は卑かつたらしい。萬葉集中に長歌十六・短歌六十餘首を入れ、萬葉前期を代表する最大歌人で、殊に長歌に秀でて居る。山部赤人(ヤマベノアカヒト)人麿と並稱される有名な歌人。聖武天皇の朝の下級の官吏であつたが、詠歌に勝れ、歌聖人麿と並んで萬葉集の代表的歌人である。不二の山を詠んだ長歌、眞間手兒名の長歌等が最も有名である。然し彼の特色は短歌にあり、殊に叙景の詠に勝れて、田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞの歌は古來人口に膾炙して居る。東の野にかぎろひの立つ見えて(ヒンガシノヌニカギロヒノタツミエテ)卷第一、雜歌、作者は柿本人麿。詞書に、輕皇子宿三安騎野一時、柿本朝臣人麿作歌とある。かぎろひ 陽炎(カゲロフ)の古語。かが(赫)きらひ(霧)の約轉であらうと。語義多様、(1)立ちのぼる焰、(2)耀く日の光、(3)陽炎・絲遊・野馬の事で春の野に起る陽氣の日の光にちらりと燃える様に見えるもの。此處のかぎろひは(3)の陽炎又は絲遊と解すべきである。文武天皇(モンブテンワウ) 第四十二代の天皇。天武天皇の皇孫、草壁皇太子の第一皇子、御母は元明天皇。持統天皇十一年皇太子と成り、同八月禪を受けて藤原宮(大和國高市郡)に即位し給ふ。時に御年十五。大和の安騎野(ヤマトノアキノ) 大和國宇陀郡、今の松山町附近一帯の原野。和歌の浦に潮満ち来れば濁をなみ(ワカノウラニシホミチチクレバカタヲナミ) 卷第六、雜歌。作者は山部赤人。詞書に、神龜元年甲子冬十月五日幸三紀伊國時、山部宿禰赤人作(反歌)とある。和歌の浦(ワカノウラ) 又、明光浦(アカノウラ) 和歌山市の南部に在る名勝。古來歌枕に入る。藻屑川河口を西北から東南に延びる長さ二・五軒の砂嘴、片男波(赤人の歌即ち本歌に、濁を無みとあるを詠る)は海水浴場。其の内側の濁が古の和歌の浦である。濁の西北隅に妹背山の小島が浮び、西湖の六橋を模した三斷橋がある。妹背山には下り松・多寶塔・觀海閣等があり、背後の尊供(ソング)山は眺望よく前面に玉津島神社・鹽竈神社等の名勝がある。濁をな



和歌浦片男波の遠望(此の歌の“濁を無み”から來たもの)

み(カタヲナミ) 濁を無み。干濁が無くなる。濁は海岸の遠淺で潮の満干に隠現する地。ひがた。無みはなさに。なきまゝ。なくて。なきゆゑ。濁をなみは干濁が無くなるから。干濁が無いゆゑ。あしべ 葦邊。葦の生えた水際。たづ 田鶴。鶴の異名。をのこやも空しかるべき萬代に(ヲノコヤモムナシカルベキヨロゾヨニ) 卷第六、雜歌。作者は山上憶良。詞書に、山上臣憶良沈疴之時歌一首とあり、歌後に、右一首、山上憶良臣沈疴之時、藤原朝臣八東、使三河邊朝臣東人令問三所疾之狀、於是憶良臣報語已畢、有須拭涕悲嘆口三吟此歌とある。をのこやも をのこは男の子。をとこ。男子。やもは助詞、疑問の「や」に詠嘆の「も」の添はつたもので、疑問と共に希望の意を表す。空しかるべき(ムナシカルベキ) 空しくあるべき約。『空し』は空虚。何物も無きこと。無益なること。かひなきこと。又空しく死すこと。みまかること。徒死。名は立てずして(ナハタテズシテ) 名も立てずに。『名』はきこえ。評判。名聲。『立て』はあらはになる。いちじるしくなる。人に知れわたる。顯著。山上憶良(ヤマノウヘノオ



グラ) 人麿・赤人に亞ぐ萬葉集の代表的歌人。大寶元年粟田真人に従つて唐に渡り、遣唐小録となり、和銅七年從五位下へのほり、靈龜二年伯耆守を拜し、更に筑前守と成り、退官後は東宮に侍したといひ、微官では有つたが漢學の素養深く、且つ其の歌には佛教及老莊の思想が反映して居る。戒三惑情二歌・貧窮問答歌・好去好來歌など其の適例である。遣唐使(ケンタウシ) 我が國と支那との國交は推古天皇十五年(皇紀六〇七年)小野妹子を隋に遣はしたのに始まり、隋亡び唐起るに及び、舒明天皇二年(皇紀六三〇年)始めて犬上三田紹(ミタスキ)を唐に遣はし、仁明天皇承和五年(皇紀八三八年)迄遣唐使の派遣十四回に達した。之に依つて日唐兩國の好を修めたのみならず、我が國文化の發達に寄與すること甚だ多かつた。然し航海の困難に使船の覆没漂流する事も稀でなかつた。宇多天皇の朝菅原道眞を遣唐使に任じたが、時方に唐の末路に際したので、道眞の議に依つて之を中止した。あをによし奈良の都は咲く花の(アヲニヨシナラノミヤコハサクハナノ) 卷第三、雜歌。作者は小野老。詞書に「太宰少貳小野老朝臣歌一首」とある。あをによし 奈良にかけていふ枕詞。『あをに』(青丹)は青土即ち綠青、岩綠青の事で、『よし』の『よ』は呼掛け、『し』は強めの助詞。奈良にかゝる枕詞で、其の解(1)青土はねや(黏)して用ひる故アツニ(青土)ネヤシの約、(2)青土は奈良(奈良坂邊)に産する故ナラに續く等、猶數説あるが從ひ難い。兎に角奈良にかけていふ枕詞として取扱へばよい。奈良の都(ナラノミヤコ) 平城京(寧樂京)。古は大抵御代毎に宮都を遷されたが、奈良時代と成り、都下の人口も増し、建築も壯大と成つたので、遂に都が固定する様に成り、和銅三年(皇紀七一〇年)大和の奈良に元明天皇が遷都し給うてから、七代・七十餘年間、概ね都を此の地に置かせられた。其の位置は今の奈良市の西部にあり、東西約四十町、南北約四十五町、北部中央に大内裏(皇居)を設け、それより南へ朱雀(スザク)大路を通じ、以て左右兩京に分け、南北に九條を分ち、道路はすべて碁盤の目の様に正しく引かれた。東大寺の大佛が出来(トウダイジノダイブツガデキ) 天平勝寶元年竣成、同四年開眼供養、孝謙天皇は聖武上皇と共に之に臨ませられた。インドから高僧が渡來して(インドカ

ラカウソウガトライシテ) 大佛の開眼供養の際導師と成つた菩提仙那(ボダイセンナ)をいふ。仙那は彼の地の高僧で朝野の尊信を集めた。小野老(ヲモノオユ) 萬葉歌人。姓は朝臣。天平二年太宰少貳と成り後大貳に至る。同六年從四位下、同十年病み、下野那須の湯に下り歿。續日本紀に「九年六月卒」とあるは正倉院文書に據ると一年を誤る。本課の「青丹吉」の歌は著名。作品は短歌三首。短歌(タンカ) ミジカウタ。歌體。(五)(七)(五)(七)(七)の五句より成る。古代より興り、他の歌體を壓して今日に及んで居る。初二句で切れる形が古く、藤原の宮時代から三句で切れる形を生じ、後、三句切が多く成つて、平安朝時代以後、上三句を上句(カミノク)四・五句を下句(シモノク)と稱する。各句が定音數に足らぬのを「字足らず」、定音數以上なるを「字餘り」といふ。短歌は本來如上の意義を有つもの、和歌はヤマトウタ即ち國歌・國風の總稱なるべきも、後には三十一文字(ミソヒトモジ)の別名が示す様に、和歌と短歌とは全く同義語と成り、和歌は短歌を殆ど其の内容とするもの、如く解せられるに至つた。長歌(チャウカ) ナガウタ。歌體。五音・七音二句の重疊を基本形式とする七句以上の歌。上代には一句の音數に過不足あるものも多い。數章から成る組歌形式と全篇一章とあり、萬葉より大概反歌を伴ふ。柿本人麿に至り長足の發達を致し、奈良朝末に衰へ、平安朝以後試作と擬古の作とを存するのみ。最短の長歌を古今六帖に小長歌と稱する。五七形式と五三七形式とが最も古い。大和に群山あれど(ヤマトニハムラヤマアレド) 卷第一、雜歌。作者は舒明天皇。詞書に「天皇登三香具山ニ望レ國之時御製歌」とある。群山あれど(ムラヤマアレド) 群山は群がれる山。群がり立つ山。重疊せる山。とりよろふ 取具ふ。具(ツナ)はり整ふの意。とりよそふ。とゝのへかざる。天の香具山(アメノカグヤマ) 大和國磯城郡(もと高市郡)香山村に在り、耳梨(成)・畝傍(成)二山と共に大和三山の稱がある。國見(クニミ) 國の形勢を高所から望見すること。國原(クニバラ) くに(國)に同じ。原は廣きに就きていふ。國のひろびろとしたところ。國土。立ち立つ(タチタツ) 前のは煙が起ち又起つ。後のは鳴が飛び起ち又飛び起つ。海原(ウナバラ) ひろびろとした海。うみ。



海洋。滄海。 **かまめ** かもめ(鷗)の古稱。 **うまし國**(ウマシクニ) 美國。上古に我が國土を譽めて呼んだ語。好い國。美しい國。『うまし』は感じて快い。うつくしい。よい。このましい。すぐれてゐる。  
**あきつ島**(アキツシマ) 秋津島(蜻蛉洲)。我が國の異稱。秋の島の意か。豊秋津島又豊葦原之千秋長五百秋之水穂國等といひ、稻の豊熟する國の意で、秋は稻と同義といふ。本來我が本州の異稱。廣く大日本全國にいひ(秋津國など)、又大和國の冠辭とする。(本課は即ちそれである)蜻蛉の古名をアキツといふので、蜻蛉洲と書いて大和國又は廣く日本國の美稱とし、延いては日本國の地形を蜻蛉の兩翅を展げた形に似る等いふのは、神武紀麻間丘望國の條の、猶如蜻蛉之臂喙の文から出た附會といふ。(本居宣長國號考)。 **舒明**  
**天皇**(ジヨメイテンノウ) 第三十四代の天皇。敏達天皇の皇孫、押坂彦人大兄皇子の御子、御母は敏達天皇の皇女糠手姫。推古天皇元年癸丑降誕、天皇の元年己丑正月御即位、都を大和飛鳥岡本宮に遷させ給ふ。在位十三年にして崩御、御壽四十九。 **萬世の意**(バンセイノイ) 契沖が萬葉集代匠記に述べた説、鹿持雅澄も亦之を支持した。萬葉の題號に就ては此の外に之を萬の言の葉と解する説もある。荷田東滿・賀茂眞淵等がそれであるが、今は萬世説が通説と成つて居る。

指導精神

萬葉集は我が國最古の歌集、全部二十卷、萬葉の題號に就ては古來之を萬の言の葉と解するか、萬代の義とするかの論が行はれたが、今後者が通説と成つた。撰者も分明を缺くが、一般には契沖の大伴家持私撰説が採られる。其の主張は(一)家持の父旅人に限り微官の時にも大伴卿と記された事、(二)家持は延暦四年に薨じ集中の歌と年代が合致する事、(三)十七卷以下は殆ど家持の歌日記の如き觀ある事、(四)家持の歌に拙歌と謙遜してある事、(五)家持の妻の母に送つた詠草に尊母とある事、(六)集中作者は官姓名を記す通例なるに反し、家持は名のみ記されること等の内部徴證に據つて爲され、萬葉集は家持の私撰で且つ整はぬ草案の

儘世に行はれたと言ふにある。家持私撰説は古くは藤原清輔・定家にも考へられたが、契沖に及んで確實性を帯び、本居宣長は家持の兩度撰集説を出し、雅澄は契沖説に従つた。然し古今を通じて種々の異説も行はれ、主なるもののみでも聖武朝説・平城帝勅撰説・孝謙帝勝寶五年橋諸兄説・嵯峨帝勅撰四卷説・一二卷勅撰説等を數へる。本集に載録された歌は、仁徳天皇の元年より淳仁天皇の天平寶字三年に至る四四六年間の作四四九六首、細別すれば長歌二六二首・短歌四一七三首・旋頭歌六一首、外に詩四・文一・序一三・狀一二がある。其の作者は上は天皇より下は乞食・遊行女婦に至る迄凡ゆる社會の階級を網羅し、明確に知られる者のみで五六一人、類別すれば天子一二・皇后三・皇太子四・皇子八・皇女六・諸王三五・女王一八・夫人三・大臣五・諸臣一九四・女四一(皇女・女王・夫人・尼・遊行婦を除く)僧尼八・非常者四・白水郎一〇・遊行女婦四・諸國防人若干があり、従つて其の地域も都を中心として廣く全國に互る。此の點に於て上代日本民族の感情の結晶と言ふ事が出来る。代表的歌人には柿本人麿・山邊赤人を始め山上憶良・大伴旅人・同家持・笠金村・高橋連蟲麿等、女流に額田王・大伴阪上郎女・鏡女王・石川郎女・笠女郎・狭野茅上娘子等がある。

集中の和歌の形式を見るに、草創時代に一定しなかつた短歌・旋頭歌・長歌の三體は明かに確立し、句格も定つて五七の音が漸次に多く成つて居る。旋頭歌(五七七七七調)は數も少いが、短歌(五七七七七)は益々隆盛と成り、長歌も著しく發達し五七の句を重ねる事百數十に及ぶ長篇さへ現れた。(最後の句は七七)句の連續は第二・第四の句で切れるものが多く、従つて五七調を成し七五調は僅に認め得るのみで有つた。修辭法では繰返しは減少し、對句が盛んで枕詞・序詞・掛詞等の驅使も自在を極めた。内容に就て言へば多いのは抒情の歌で、戀の種々相・愛欲の姿態は殆ど盡されて居る。わけても純一な感情を其の儘に歌つた相聞や心ならずも遠く行く官人の郷愁を訴へた旅の歌には心曳かれる節が多い。又叙事の歌も少數ではあるが現れて來た。題材には花鳥風月の四季折々の景物や哀別離苦の事象等複雑とは成つたが、矢張手近な自然・身



の廻りの調度を歌材として用ひ、素朴・眞摯の情趣が其の特色である。然して是迄の「諸ふ歌」以外に「讀む歌」が殖えて來た事は殊に注意すべきであらう。卷々に於て特殊なものを挙げると第十四卷の東歌は東國地方の方言で詠じた其の國人の卒直な戀の歌であるが、恐らく當時の地方官等が殊更に田舎言葉を眞似て作つたものであらう。第十五卷には遣新羅使の往還の歌があるが、それよりも中臣宅守と茅上娘子との悲しい戀の贈答が心を惹く。卷十六では有由縁二歌として小説的構想ある傳説を詠んだものがあるが、之は歌物語の源泉と見られるし、後半に載せた滑稽歌は後の俳諧歌との連關を思はせる。然して卷五は憶良の集であり、卷十七以後は全く家持を中心とした大作家の歌日記である。

萬葉集の價値は學術的價値と文學的價値とに分けられる。學術的には資料に乏しい古代の歴史・風俗・習慣・思想等を知る爲、古事記・日本書紀と共に最も大切な資料の一である。殊に國語學及國文學史研究の際古代を探る場合の最大の資料は萬葉集である。即ち古代語の音韻・語法・語彙を調べる場合や我が國の長歌の衰亡・短歌の誕生・邦人の文學意識の發生・古代文學の特質等を探る場合、必ず顧るべきは萬葉集である。次に文學的價値に就て、先づ其の第一は本書が多種多様の性質を持つて居る點である。即ち作者が社會の凡ゆる階級に互つて居る事、内容が美的趣味的なものに限らず、素朴・滑稽・肉慾等様々の性質を持つて居る事、歌體が短歌の外に長歌・旋頭歌、さては東歌・防人歌等種々に互つて居ること等が集つて、八代集以下の歌集に見出せぬ多様な姿を現して居る。殊に萬葉の壯大な美（人麿の作品の如き）素朴な美（東歌や防人歌等）の如きは後の和歌史上に跡を絶つた獨特のものである。多種多様の性質を持つと言ふ事は多種多様の美を現して居り、様々の人の心理、様々の人生を現して居ると言ふ事を意味するもので、本書の大きな藝術價値だと言へる。正岡子規が本集を讚美した大部の根據は此處に在る。第二の藝術價値としては眞實と言ふ事を挙げ得られる。奈良中期以後の宴飲・相聞・季節の歌を除いた萬葉の大部分は、作者の創作態度が心にも無い美飾や誇張を施さぬ眞實の點から見ても、作品を味つて受ける感じの點から見ても眞實と言ふ點で後

世の凡ての撰集に勝つて居る。眞淵や赤彦が本集を讚美したのは此の點である。第三の藝術的價値として現實的・寫實的だつたと言へる。第一に素材の取り方が空想的なものより現實的・實際的なもの、寧ろ現實的なもののみを取つた。次に其の素材の扱ひ方即ち素材を表現する方法が新古今の如く空想的・夢想的で無く、現實的に寫實的にハッキリと言ひ現す。是等の當然の結果として本集は現實味の勝つた作品に依つて占められ、其處に特色と價値のある歌集と成つた。俳句の寫生を歌に應用せんとした子規が本集に共鳴を感じたのは此の故である。結局萬葉の眞生命たる素材が廣汎で如何なる材料も取入れて居る事、作者の歌に對する態度と考へ方が眞實で遊戲的で無い事、表現が率直素朴で必要以上の虚飾を施さぬこと等が指摘される。然して此の精神を最も良く體得した歌人としては前に源實朝があり、後に賀茂眞淵・僧良寛・橘曙覧・平賀元義等があり、最近には正岡子規と其の一派がある。

### 指導形態

#### 指導上の認識點

- 1 本課の指導領域は頗る廣く且つ深遠ある。即ち古代の我が國民が持つ傳來の國體觀念や美的情操を感受させ、皇國精神を體認せしめると共に無私奉公・優美明朗の國民性を陶冶するを眼目とする。
- 2 同時に我が國最古の萬葉集に就て其の作家・作柄・風格・特徴等の大體を知らせ、古事記と共に我が古代精神を宿す一大寶庫たる

所以を納得せしめるを直接目的とする。

- 3 選ばれた歌は何れも人口に膾炙した名吟であり、作家も亦代表的の歌人のみであるから、反覆讀誦させるは勿論、最後は暗誦・暗寫の境地に迄誘致する事を忘れてはならぬ。

- 4 本課は大體四時間位で指導を完了する様立案すべきであらう。

#### 第一次指導



1 題目の指導。

▽前巻の『松坂の一夜』と連絡させ萬葉集が我が國最古の歌集であり、古代精神の一大寶庫たる事を簡単に附説して讀心を唆るが良

2 全課の通讀。

▽存分に時間を與へ自力の限りを盡して通讀させる。

3 讀後の印象や感想等を記載させる。

▽思つたこと・感じたこと・見えて來た光景・強く迫る力等。

4 新出文字の指導

▽其の都度辭書を索引させ自學の呼吸を吞込ませる。

5 難語句の指導。

▽質問を俟つて隨所に指導し重要なものは板書して一齊指導する。

6 個有名詞は引離して入念に指導する。

▽一首毎の歌意や全課の精神を考へさせて。指名讀。

7 低音讀。

▽歌毎に句切つて、次々に讀ませる。全課の文意を掴ませる。

めた 上下を問はず 事に觸れ物に感じ

國民性の特徴 武門の家 上代 長歌

海行かば 水づくかばね 草むすかばね

死なめ かへりみ 躍動 國民的感激

かぎろひ かへりみすれば 殘月 歌聖

湯をなみ たづ をのこやも 空しか

るべき 奮起 あをによし 高僧 短歌

群山 とりよるふ 國見をすれば 國原

煙立ち立つ うまし國 あきつ島 眼前

雄大 明朗 氣性 純な感情 萬世

萬葉集 大伴氏 大伴家持 柿本人麿

山部赤人 天武天皇 大和の安騎野 紀

伊國 山上憶良 遣唐使 東大寺 小野

老 舒明天皇 天の香具山

8 指名讀。

▽歌毎に句切つて、次々に讀ませる。

9 全課の文意を掴ませる。

10 把捉した文意は記載させる。

11 話合。

▽前項の文意や讀後の感想を中心に。低音讀。

▽文の觀點に注意させて。

第二次指導

1 一度靜かに通讀させる。

2 指名讀。

一兵士

千二百年の昔 東國から九州の守備に 今日よりはかへり見なくて大君の しこの御楯と出立つわれは

萬葉集

上は天皇の御製 下はあらゆる階級の人 四千五百首 事に觸れ物に感じ

大伴家持

最も古い歌 大伴氏の言傳へ 海行かば水づくかばね 山行かば草むすかばね

3 中・劣生を主として。

4 純讀。

▽短歌は(五)(七)(五)(七)(七)と御歌所式に 五聲に讀むを本格とする事を注意する。

5 追讀。

▽短歌や長歌の箇所を純讀しては追讀させる 逐次研究。

6 頃合を見て謄寫した文圖を配付する。

軍人の覺悟

我が國民性 の特色

雄々しい歌



大君の邊にこそ死なめ  
かへりみはせじ

柿本人麿 有名な歌人  
歌 聖

文武天皇 (皇子の頃) 狩のお供

調子の高い歌

大和の安騎野  
東の野にかぎるひの立つ見えて  
かへりみすれば月かたぶきぬ

東西の  
美しさ

山邊赤人 人麿と並ぶ有名な歌人

景色が目  
に見える

紀伊の和歌の浦

行幸のお供  
和歌の浦に潮満ち来れば湯をなみ  
あしべをさしてたづ鳴きわたる

山上憶良

遣唐使に従つて支那へ  
元來は學者 愛の心に富む

後人を奮起  
させる

をのこやも空しかるべき萬代に  
語りつぐべき名は立てずして

小野老

歌数は少いが名歌を残した

東大寺の大佛が出来

奈良の都の華やかさ

高僧がインドから渡來  
あをによし奈良の都は咲く花の  
にほふが如く今さかりなり

舒明天皇

第三十四代、歌人に渡らせられる。

長歌中の短いもの

美しい山野の  
光景

萬葉集には長歌が多い  
大和には群山あれど  
とりよるふ天の香具山  
登り立ち國見をすれば  
國原は煙立ち立つ  
海原はかまめ立ち立つ  
うまし國ぞ  
あきつ島大和の國は

萬葉集の歌

雄大・明朗  
極めて純な感情  
萬葉とは萬世の意

古事記と共に  
日本人の誇

6

書取。

7

▽個々の歌を順次に書取らせる。  
引用歌の個別的吟味。

8

▽一首宛字句や歌意や措辭等を細かに吟味さ  
せる。  
話合。



- 9 ▽歌意や文意を考へさせて。低音讀。
- 10 ▽全課に横溢せる皇國精神に傾倒させる。ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

- 1 輪讀。
- 2 ▽歌毎に句切つて、座席順に。指名讀。
- 3 ▽歌と解説を別々に。話合。
- 4 ▽作者や其の歌に對する感懐を中心に。演習。
- 5 ▽グループに分れ個々の歌を散文化させる。讀合せ。
- 6 ▽組毎に代表者を選ばせて。和歌の朗讀練習。
- 7 ▽教師も参加し適宜に範讀を交へる。學習事項の整理。

- 8 ▽内容方面では萬葉集の内容と萬葉歌人・形式上では長歌と短歌。  
一兵士 今日よりは…軍人の覺悟  
大作家持 海行かば…雄々しい歌  
柿本人麿 東の野に…調子の高い歌  
山邊赤人 和歌の浦…潮の音・鶴の羽音  
山上憶良 をのこやも…後人を奮起させる  
小野老 あをによし…奈良の華やかさ  
舒明天皇 大和には…美しい山野の光景
- 9 萬葉集
- 10 千二百年の昔 → 國民性の特徴  
あらゆる階級  
雄大・明朗  
極めて純な感情 萬世に傳へる  
日本人の誇…古事記と共に
- 11 引用歌の暗誦・暗寫。  
新出文字の書取。  
語句の應用練習。  
テスト。

テスト問題

- 一、次の歌を解釋しなさい。
- 1 海行かば水づくかばね  
山行かば草むすかばね  
大君の邊にこそ死なめ  
かへりみはせじ
- 2 をのこやは空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして
- 3 東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ
- 二、次の語句を解釋し漢字には振假名を附けなさい。

- 1 い。
- 1 しこの御楯 2 國民性の特徴
- 3 國民的感激 4 遣唐使
- 5 歌聖
- 三、次の漢字を使つて熟語を作りなさい。
- 1 世 朗 3 眼
- 4 群 庭 6 奮
- 7 歌 8 侍 9 聖
- 10 躍



## 第十六 奈良

奈良の地名の起原は日本書紀に崇神天皇十年武埴安彦の山背に叛するや、官軍那羅山に屯集して草木を蹂躪、依つて其の山を號けて那羅山と呼ぶとあり、後奈良の地名と成つたといふ。一説では朝鮮語の都邑の義から起つたとも言はれる。奈良に都を置かれてからの古史には平城の文字が記され、更に後世では南都の文字が見える。奈良は七代七十五年間の帝都としてのみで無く、佛教文化の源泉地として日本文化史上重要な位置を占め、前課で學んだ萬葉集にも數限りなく詠まれて居る。青丹よし平城の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり」とあるのも其の一つ、又神樂歌に「しろ金のめぬきの太刀をさげはきて奈良の都を練るは誰が子ぞねるは誰が子ぞ」とあるのも其の一である。此の花の都の奈良は今や名勝の古都であり、古代美術や古建築の寶庫と化した。

歴史上の大きな逸話では道鏡に對する和氣清麿の勤王美談を生み、宗教上では行基と良辨・鑑眞等の高僧が現れ、聖武天皇の崇佛道は五丈三尺の大佛建立と成つた。文學的には古事記・日本書紀等の大編纂があり、地方誌として風土記の刊行も逸し難いが、前課の萬葉集二十卷が撰ばれたのも實に奈良に於てであつた。美術では工藝品、殊に木彫に於て後世の逸に及ばぬ傑作の數々を遺し、建築では東大寺以下實に五百四十六の伽藍を數へたと云ふ。

斯くも華やかな奈良の文化を回顧し乍ら、古き都の跡を探勝する興味は洵に津々、其の盡きる所を知らない。讀本も亦此の絢爛・華麗の一課に依つて、九鼎大呂の重を成して居る。

## 挿畫の印象と其の説明

百四頁の寫眞は猿澤の池で、奈良市興福寺の南、三條通を距てた崖下にある。興福寺天平年記に佐努佐波

と見え、龍神池とも稱せられた。奈良八景の一で觀月の名所として知られ、其の廣き東西約百米・南北約五〇米、池中に鯉や龜等が游泳し、興福寺の五重塔が水に映つて其の儘の畫景を成して居る。近景の柳は衣掛の柳で謠曲の采女や歌舞伎の妹背山で名高い美姫采女の哀話がある。奈良の帝の御寵愛の衰へたのを悲觀して、此の池に身を投げる時に衣を掛けた柳だと傳へられ、帝は憫んで、猿澤の池もつらしな吾妹子が玉藻かつかば水ぞ干なまし」と詠じ給うたと大和物語に見えて居る。

百五頁の寫眞は東大寺の一院たる法華堂で、俗に三月堂の名で知られる。東大寺要録に天平五年良辨の創建に成るとあるから、奈良の諸佛寺中でも最古の建築で其處に安置される古佛像と共に、貴重極まり無き存在として國寶に指定されて居る。大佛殿を始め他の諸堂塔は何れも災厄に罹つて居るのに拘らず、此の堂一字は治承・永祿兩度の兵火をも免かれ、創建當初の儘で殿堂其の物も堂内の諸佛像も巖然として在るのである。我が佛教の黄金時代に於ける其の最高文化を代表する所謂天平時代の藝術は、萃まつて此の一堂内に在りと言つて差支ない。寫眞面でも見られる様に單層造りの小建築ではあるが、緩い勾配の屋根と窓及柱の方形と勾欄の調和に何とも言へぬ瀟灑な建築美を見出すであらう。

百六頁の地圖は現在の奈良市と郡山町及び其の附近を示し、之に點線を加へて古への奈良の都、即ち平城京の條坊が示される。平城京の規模は頗る壯大で、碁盤目を成す井然たる都制は現在僅に奈良公園の中央道路から奈良驛を経て、天が賤に至る直線道路に古の三條通りの面影を残すのみと成つた。即ち現在の奈良市は大佛を始め奈良公園の遊覽客の爲發展したもの故、古の平城京の郊外に當る山麓に限られて居る事が此の地圖で讀み得られるであらう。

## 文字語句

## 新出文字



哀イ 缺ケツ

讀替文字

岡ノカ (新出は卷五、ヲカ)

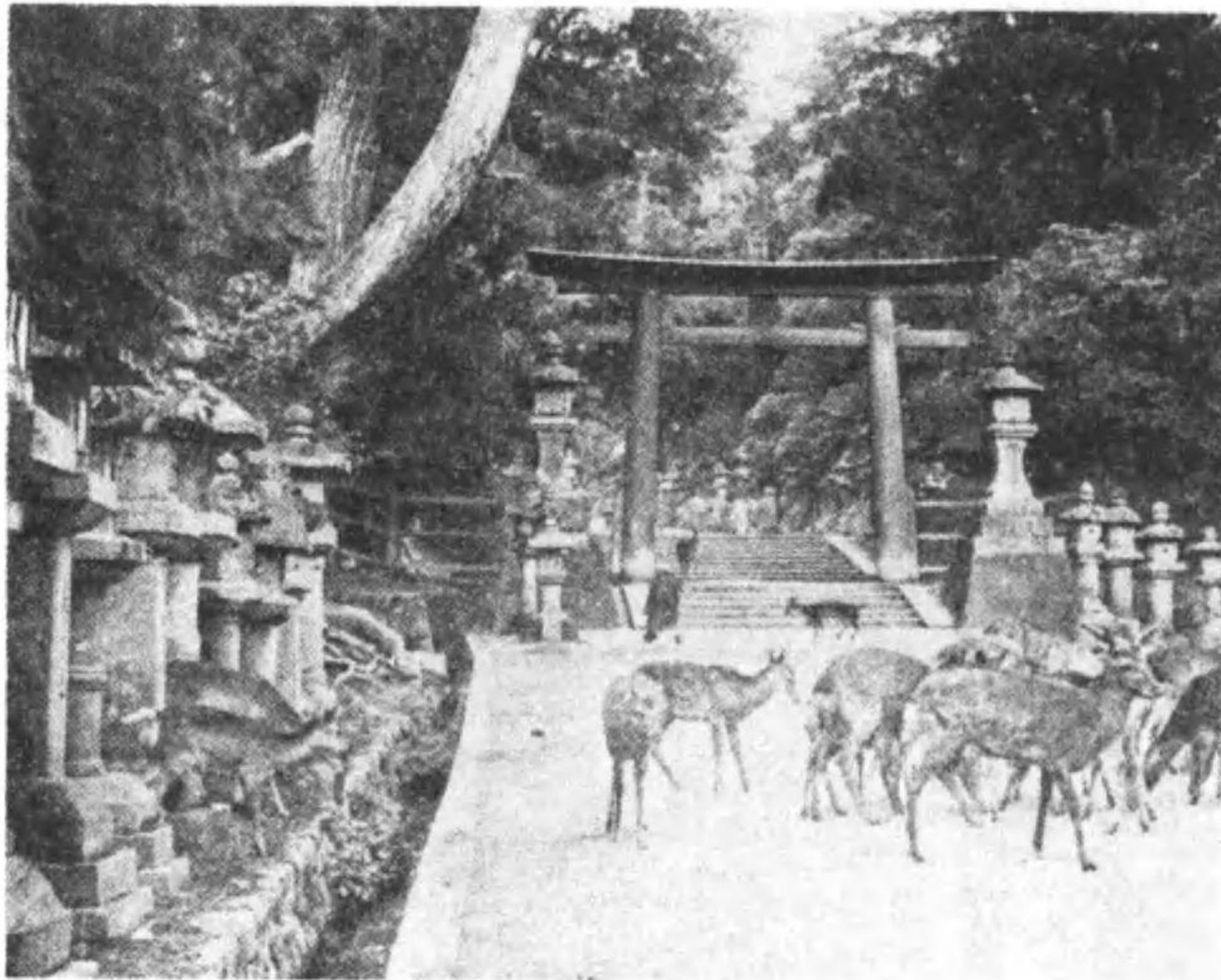
名残ナノコ

首ノボ (新出は卷三、クビ)

回ノク (新出は卷六、クワイ)

語句と其の解説

七代七十餘年の帝都(シチダイシチジフヨネノテイト)元明天皇の和銅元年都を此處に定めるの詔を下し、三年(一三七〇年)宮室の建造成りて都を奠め給ひしより元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁の七代、延暦三年(一四四四年)桓武天皇が山背長岡の新京に移り給ふ迄の七十五年間の事である。 咲く花のほふが如し(サクハナノニホフガゴトシ) 萬葉集卷第三、雜歌、太宰少貳小野老朝臣の歌、青丹吉 寧樂乃京師者咲花乃 薰如 今盛有 に出づ。 春日の社(カスガノヤシロ) 奈良市春日野に在る。官幣大社。藤原氏の氏神社として歴史上に名高い。春日山の麓に鎮座し、境内の廣袤實に二十五萬五千餘坪に及ぶ。桁行五間・梁間二間半の樓門を入ると本殿がある。四社相並び第一殿は武甕槌神・第二殿は經津主神・第三殿は天兒屋根命・第四殿は比賣神である。社殿の形式は春日造の規模を存し、地盤の自然に従つて高低ある百五間の廻廊が左右に緩く繞り、千體の釣燈籠も其の丹壁と美しく調和して居る。一の鳥居の東、寶路の左右に列ぶ石燈籠は所謂春日燈籠で、其の數すべて二千臺、毎年節分の夜には廻廊の釣燈籠と同時に點火して一大美觀を呈する。本社に南隣して天忍雲命を祀つた春日若宮がある。此の社の祭典は本社以上で、舊幕時代には祭祀料玄米二百石を獻じた程であつた。私祭ではあるが、春日祭といひ、薪能・流鏑馬・古代行列等すべて古式に則つた有名な神事である。 西大寺(トウダイジ) 華嚴宗の總本山。奈良市雜司町に在る。もと八宗兼學の道場で南都七大寺の隨一。本尊盧舍那佛は高さ五丈三尺五寸の金銅佛で、世に奈良大佛といふ。天平十三年聖武天皇、近江信樂(シガラキ)に於て大佛造立を發願し給ひ、同十七年其の計畫を現地に移し十九年



春日神社 社頭

尺五寸、而長一丈六尺、廣き九尺五寸、肉髻高さ三尺、眉の長さ五尺四寸五分、目の長さ三尺九寸、鼻の前後二尺九寸四分(朝野群載に鼻長三尺二寸とある)鼻の高さ一尺六寸、口長三尺七寸、頤長一尺六寸、耳長

より鑄造に着手して天平勝寶元年竣成、同四年開眼供養、孝謙天皇は聖武上皇と共に之に臨ませられた。本願は聖武上皇、開基は良辨、勸進は行基、導師は菩提仙那であるから四聖建立の寺といふ。其の後、治承四年平重衡が南都攻の時炎上、建久六年再建、永祿十年松永久秀の亂に焼かれ、寶永五年に重興した。現存の大佛殿は即ち之である。末寺數二十六、今は寺域大に縮少し、舊觀の半を止めないが、尙金堂・二月堂・三月堂・四月堂・開山堂・行基堂・念佛堂・淨土堂・眞言院・勸學院等が山丘に據つて相並び、天平文化の一大記念である。大佛を安置する大佛殿は東大寺の金堂で、殿宇の高さ十五丈六尺、東西十九丈、南北十七丈で廻廊の東西は凡そ四十六丈、南北三十六丈に餘り、東洋第一の大木造建築といはれる。 五丈三尺の大佛(ゴヂヤウサンジヤクノダイブツ) 結跏趺坐高さ五丈三

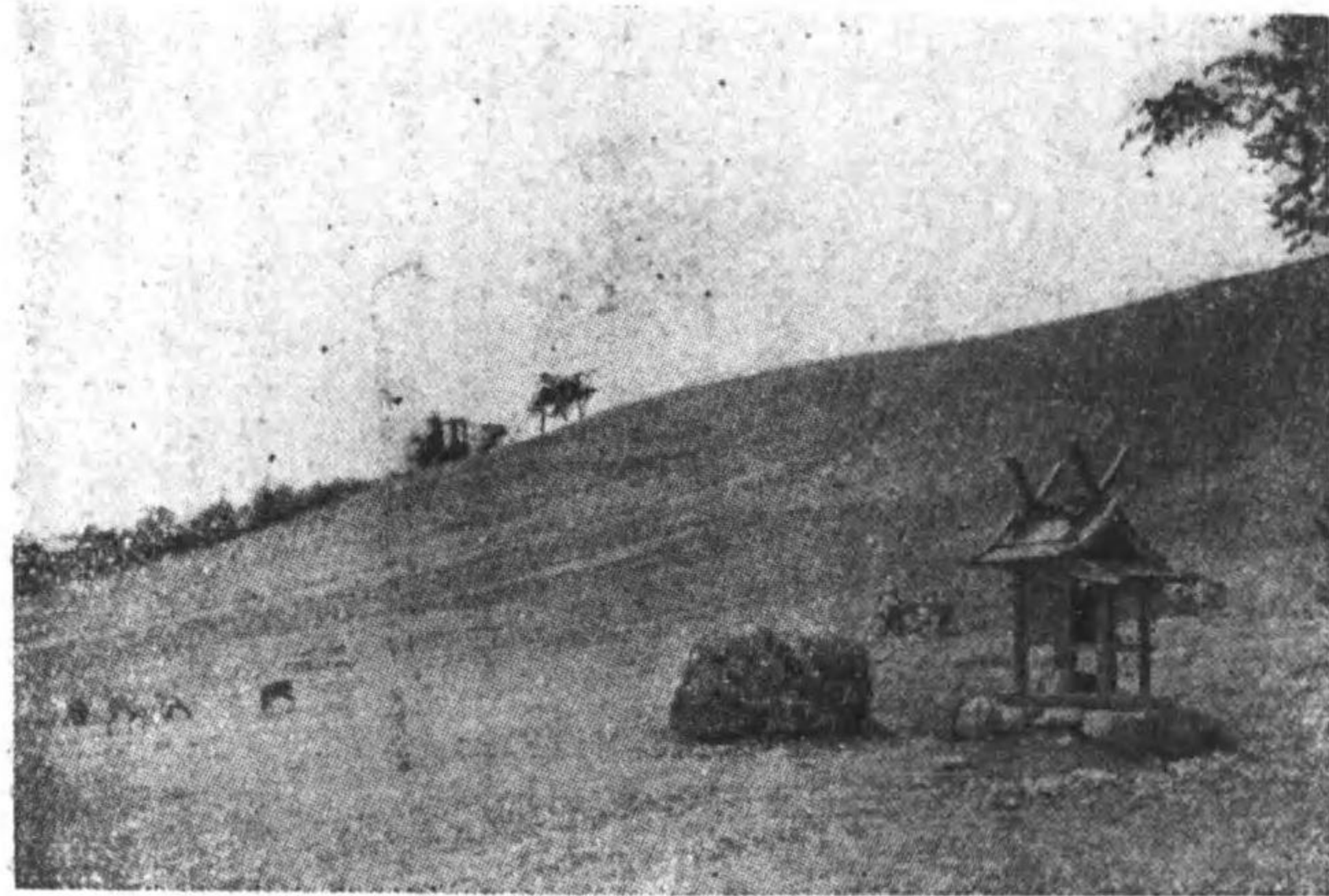




奈良の大佛

七尺五寸、又自三髻際至頂七尺、自三眉上至三髻際一尺九寸三分、眉間一尺一寸、目間一尺六寸、自目至眉八寸、自三鼻前至三眉間一四尺五寸、頸長二尺六寸五分、肩徑長二尺八尺七寸、胸長一丈八尺、腹長一丈三尺、(又或本には一丈五尺、又或本一丈八尺)臂長一丈九尺、自肘至腕長一丈五尺、掌長五尺六寸、中指長五尺、脛長二丈三尺八寸五分、膝前徑三丈九尺、膝厚七尺、足心長一丈二尺(或本右御足裏直徑一丈)以上は記録に依る佛體の寸法であるが、實測

とは多少相違がある。兎に角驚嘆すべき大金銅像、之に配する脇侍菩薩も共に三丈の大なるもので、實に空前絶後の大佛像である。興福寺(コウフクジ) 藤原氏の氏寺で嘗ては南都の僧兵が本據とした所。此の寺の創立は今を去る約千三百年前藤原鎌足が入鹿誅伐祈願の爲丈六の釋迦を鑄奉つたのに始まり、後鎌足の病篤き時夫人が勅許を得て彼の釋迦像を寺に安置したのが本原で、當初山階寺といつたのを天武天皇の時大和の高市郡に遷して厩阪寺と改め、王城奠都の際藤原不比等等今の地に移して興福寺と稱し、藤原氏の氏寺としたのであつた。猿澤の池水(サルザハノチスキ) 興福寺の南崖下、登大路北側に在る。率川(イサ



山 草 嶽

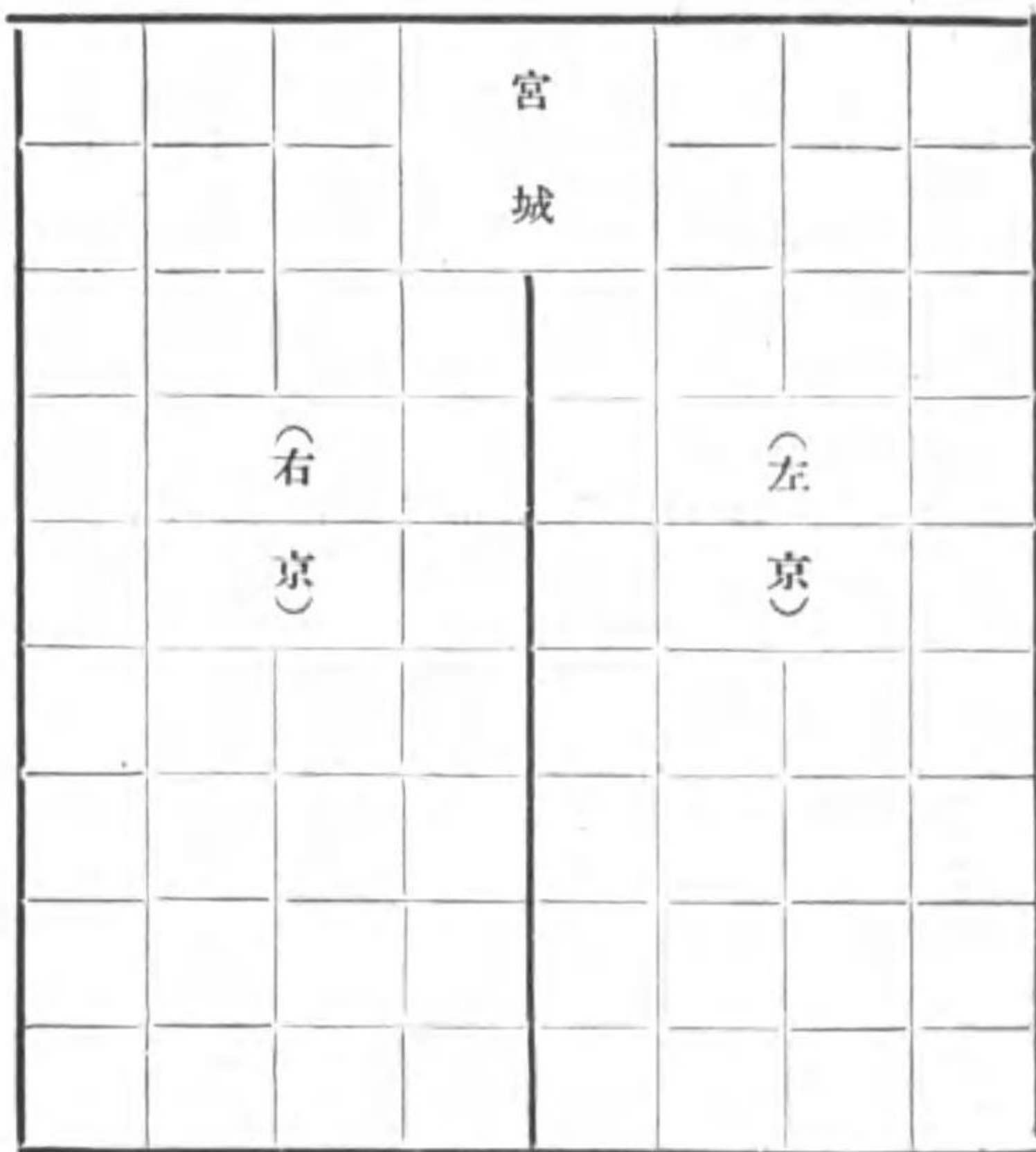
サガハ)の水を湛へたもの、狭澗(ササハ)の義であるといふ。東西百米餘・南北五〇米、池大なるにあらず、水清きにあらざれど傍に聳ゆる興福寺の五重塔の影を宿す所、池邊一樹の楊柳を見る所又捨て難き雅趣がある。況して池邊を逍遙する鹿の夕暮哀音爛々たる、そゞろ世の中は常なきものと今ぞ知るの古歌に相應しい情景を見せて居る。低回去る能はざらむ(テイクワイサルアタハザラシム) 低回は昔を思ひ當時を偲び乍ら、頭を垂れてあちらに行つたりこちらに來たりすること。懐古の情に打たれて其處を離れ兼ねること。低徊。若草山(ワカクサヤマ) 東大寺の東にある。春日山の北尾の一嶺で小さく美しい芝山、殊に春の山燒後は宛として土佐畫の儘の眺めである。中務卿親王の歌に、今も猶妻やこもれる春日野の若草山にうぐひすぞ鳴く、とあるが、昔も今も其の情趣は同じである。三月堂(サングワツダウ) 一名法華堂。三月法華會を修するので此の名がある。二月堂の石階下を左折した所に在り、本堂は天平五年良辨創建。奈良第一の古建築。禮堂(ライダウ)は鎌倉時代の補造で二堂抱合、一堂の如く工匠の妙を見る。本尊不空絹索觀音を初め、堂内安置の諸佛像は天平時代の名

サガハ)の水を湛へたもの、狭澗(ササハ)の義であるといふ。東西百米餘・南北五〇米、池大なるにあらず、水清きにあらざれど傍に聳ゆる興福寺の五重塔の影を宿す所、池邊一樹の楊柳を見る所又捨て難き雅趣がある。況して池邊を逍遙する鹿の夕暮哀音爛々たる、そゞろ世の中は常なきものと今ぞ知るの古歌に相應しい情景を見せて居る。低回去る能はざらむ(テイクワイサルアタハザラシム) 低回は昔を思ひ當時を偲び乍ら、頭を垂れてあちらに行つたりこちらに來たりすること。懐古の情に打たれて其處を離れ兼ねること。低徊。若草山(ワカクサヤマ) 東大寺の東にある。春日山の北尾の一嶺で小さく美しい芝山、殊に春の山燒後は宛として土佐畫の儘の眺めである。中務卿親王の歌に、今も猶妻やこもれる春日野の若草山にうぐひすぞ鳴く、とあるが、昔も今も其の情趣は同じである。三月堂(サングワツダウ) 一名法華堂。三月法華會を修するので此の名がある。二月堂の石階下を左折した所に在り、本堂は天平五年良辨創建。奈良第一の古建築。禮堂(ライダウ)は鎌倉時代の補造で二堂抱合、一堂の如く工匠の妙を見る。本尊不空絹索觀音を初め、堂内安置の諸佛像は天平時代の名



寶で、乾漆・塑像・とりんぐの傑作を集める。二月堂(ニグワツダウ) 大佛殿の東、手向山の西麓丘上に聳え立つて居る。一に額素堂(ケンジヤクダウ)といひ、天平勝寶四年良辨の高弟實忠建立。現在の堂宇は寛文九年徳川家綱の再興、本尊は十一面觀音銅像、別に肉身の温味があると傳へる秘佛の小觀音像を祀る。毎年三月朔日より二七日の間、籠松明・御水取の修二會(シユウニエ)の行法を行ふ。二月(舊曆)修二會を行ふので此の名がある。手向山(タムケヤマ) 手向山八幡宮を以て知らる。若草山に續いた所にあり、東大寺を距る五町。菅公の「この度はぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに」の歌で名高い。手向山八幡は東大寺守護神として聖武天皇が宇佐から勸請し給うたものである。哀音(アイオン) 又アイインとも讀む。かなしいねいろ。ものかなしく聞える聲。風情(フゼイ) かはつたおもむき。特別の味ひ。ありさま。ながめ。情味。情致。風趣。風致。佐保・佐紀(サホ・サキ) 奈良市の北方に在る丘陵、佐保・佐紀は共に添上郡(今奈良市に入る)の古邑。佐保山は佐保の北に在る。一に棹山又は藏寶山に作り、那羅山の中に屬して居る。萬葉に「佐保過ぎて寧樂(ナラ)の手向に置く幣は妹を目離(メカ)れず相見しめとぞ」等とある。春日・高圓の山々(カスガ・タカマドノヤマヤマ) 笠置山脈中の峯々。春日山は高さ約五〇〇米、北に若草山、南に高圓山を控へて居る。矢田山・生駒山(ヤダヤマ・イコマヤマ) 金剛山脈中の峯。矢田山は矢田地藏(矢田寺)を以て聞え、生駒山は景勝の地として知られて居る。北に大内裏(キタニダイダイリ) 大内裏は古昔平城京又は平安京の宮城の稱。平城京は四方八町、平安京は東西八町南北十町、四方に各三門を設け、其の内に諸宮殿・諸官省等がある。皇居を内裏と言ふに對していふ。街路井然として(ガイロセイゼントシテ) 井然は物事の規則正しいさま。正しく整つて居るさま。井々。整然。平城京は北の中央に宮城を仰ぎ、其の正門(朱雀門)より出でた朱雀大路に依つて左京・右京を分ち、東西に走つた九條の大路は之と直角に交つた南北に進む大路に依つて各京共に四坊宛に分れ、各坊は更に縦横に通ずる小路に依つて十六の坪に分れた。坪の數へ方は左京・右京に依つて異なり、朱雀大路に近き方即ち宮城に

(平城京條坊圖)



路大路(極北) 一條  
路大路(極南) 一條  
路大路(二條) 二條  
路大路(三條) 三條  
路大路(四條) 四條  
路大路(五條) 五條  
路大路(六條) 六條  
路大路(七條) 七條  
路大路(八條) 八條  
路大路(極南) 九條(即ち)

左京四坊大路(即東京極) 左京四坊大路(即東京極)  
左京三坊大路 左京三坊大路  
左京二坊大路 左京二坊大路  
左京一坊大路 左京一坊大路  
朱雀大路 (左京一坊) 朱雀大路  
右京二坊大路 (右京二坊) 右京二坊大路  
右京三坊大路 (右京三坊) 右京三坊大路  
右京四坊大路 (右京四坊) 右京四坊大路  
右京四坊大路 (即西京極)

近き方を一と數へた。故に左京九條四坊十三坪といへば宮城の最も東南隅で、右京一條四坊十六坪といへば西北隅である。朱雀の大路(スザクノオホヂ) 又シユジャク。平城京・平安京の中央、二條から九條迄を南北に通ずる大道で、南端には羅城門があり、北は宮城の南面朱雀門に至る。其の東を右京(向つて左)西を左京(向つて右)とする。朱雀は四神の一。南方の星宿に象る。平家物語に「左青龍・右白虎・前朱雀・後玄武、四神相應の地なり」とある。羅城門(ラジャウモン) ラシャウと濁らずに言ふのが普通。平城京・



平安京の正門。朱雀大路の南端に在つて、北端の朱雀門(宮城の正門)と遙に相對する。此の門の内を洛内といひ、外を洛外といふ。名類(ナゴリ) 物事の過ぎ去り人の別れ去つた後、なほ其の面影の残ること。大極殿(ダイゴクテン) 八省院一名朝堂院の正殿。國家の大禮を行はせられる時、天子出御の處。平安京の例に依れば朝堂院の後方龍尾壇なる一段高き壇上に立ち、前方東西に夫々青龍・白虎の二樓を控へ、後方には便殿に相當する小安殿が附屬して居た。九間四面、左右廂を加へて十一間四面、單層四注造、碧瓦を以て葺き、大棟兩端に鸚尾を上げ、床は瓦を敷き、中央に高御座(タカミクラ)を置き、帽額(モカウ)を掛けて居た。平城京の大極殿は制度・規模共に平安京のと同様で、且つ其の先驅を成すものであるが、遺址は今も明に奈良市の西方田間の叢地に劃然と存して居る。羅城門の跡(ラジヤウモンノアト) 今郡山町大字九條の東にある。大宮人の梅をかざし(オホミヤビトノウメラカザシ) 萬葉集卷第十、春雜歌、百礮城の大宮人は暇あれや梅を挿頭(カザ)してこゝに集(ツド)へるの歌に出づ。尙之と能く似た、百礮の大宮人はいとまれや櫻かざして今日も暮しつは新古今集卷二に出て居る。畝傍山・耳成山・香久山(ウネビヤマ・ミ、ナシヤマ・カグヤマ) 大和平野の南部に鼎立して居る美しい山で、平野の中に三つ圓やかに盛られて居る山である。かぐ山は、畝火を愛しと、耳梨と、相あらそひき。神代より、かくなるらし、古へも、さなれこそ、現身も、つまをあらそふらしきと詠ませられた天智天皇の御製を思ひ起す。男山香久山・耳成山が女山畝傍を互に相争うたが、出雲の阿菩の大神の仲裁に依り、播磨の印南國原で戦が止んだといふ。天皇が天武天皇と額田女王を争はれた哀情の歌も此の山に相應しいものである。畝傍山の東南極原に神武天皇の皇居があつた事は又贅するを要しまい。多武峯・吉野の山々(タフノミネ・ヨシノヤマ) 多武峯は標高六一九米、磯城郡の南端に在る。又談武峯・田身峯とも書く。山上の北面に藤原鎌足を祀る談山神社がある。上古鎌足が此の山に登り、中大兄皇子と共に蘇我氏誅滅の策謀を談議したと傳へられ、此の山を談山と稱した。鎌足の墳墓はもと阿威山にあつたが、白鳳七年其の子定慧が唐から還り此の地に改

葬、護國院妙樂寺と號したが、明治に成つて廟を神社に改めた。社殿は壯嚴。満山櫻楓の古木多く、櫻花の季節・紅葉の秋には杖を曳くものが多い。吉野迄は山路一六軒。

### 指導精神

奈良の低回味を叙した感興豊かな美文で、流麗な調と、みやびやかな用語と、懐古の情を唆る地名と相俟つて、其處に美しい姿態を形づくつて居る。内容よりも寧ろ形式に優れた文である。汲めども盡きぬ味があり、幾度讀んでも飽きない趣がある。本課は歴史の知識と趣味とを背景として始めて味ひ得る教材である。文も含蓄が多くて其處此處に古歌等も織込まれて居るから兒童には可なり難解の教材である。適宜に敷衍・附説を試み所謂奈良文化の一般を紹介し、尙又挿畫や寫真帖等を利用して奈良が懐古趣味に富み、豊かな歴史味を抱有して居る點を想像させねばなるまい。

奈良文化を紹介するにはズツと以前の聖德太子の頃から始めなければならぬ。聖德太子に依つて試みられた國家改造が中大兄皇子の手に依つて成就され、初めて統一した組織を見る様になったのが大化の改新である。さうして天智天皇の時初めて完全な法律が出来、更に文武天皇の大寶律令に依つてそれが整頓された。此の制度や律令は唐の模倣であつたのは勿論であるが、然しそれを能く咀嚼し同化して、さうして其處に所謂奈良文化を生んだのである。結局奈良に至つて其の文化の花が咲いたのである。青丹よし寧樂の都は咲く花の匂へる如く今盛りなりと歌つた奈良朝七代七十餘年の精華を招來し、銀のめぬきの太刀を下げ佩きて奈良の都を練るは誰が子ぞの爛熟した文明を形づくつた。奈良は即ち其の遺跡である。本課は冒頭に之を承けて

七代七十餘年の帝都として、咲く花のほふが如しとたへし奈良の都も、色移り香失せて年すでに久し。



と筆を起して居る。「咲く花の匂へる如く」の歌は奈良文化を象徴するに最も適當した古歌で、萬葉集卷三  
 雑歌・作者は小野老であるのは既に學ぶ所。奈良は年古り色あせ今は唯其の名残を留めるのみである。

然れども春日の社は、朱の廻廊山の縁に映えて、森嚴自ら人の襟を正さしめ、云々

茲から其の名残を慕つて古都の面影に憧れるのである。春日の社頭、東大寺、さては興福寺、猿澤の池と  
 懐古趣味に浸らせ乍ら逍遙するのであるが、奈良は山といふ山、川といふ川、一木一草の末に至る迄歴史あ  
 り古歌あり、人をして轉た低回する能はざるの思ひがある。師範学校の門内に遺つて居る八重櫻には、伊勢  
 の大輔の「古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな」の古歌を偲ばせ、三笠の山に安倍仲磨の「天の  
 原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」の歌を思はせ、手向山八幡に詣ては「この度はぬき  
 も取りあへず手向山紅葉の錦神のまに」の歌を思はせ、吾妹子がぬくれた髪をさる澤の池の玉藻と見る  
 ぞかなしき「雪消澤には「春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む」等々、奈良は見るもの  
 聞くもの皆歴史である。行く所佇む所歌であり、詩である。

斯うして若草山・三月堂・二月堂と奈良の歴史美に憧れ乍ら奈良趣味を満喫させようといふのである。佐  
 保・佐紀の連岡、春日・高圓の山々を眺め、田圃の中に昔床しき條坊井然たる古の面影を偲び、大内裏の舊  
 址を見渡しては其の壯麗さを想像し、其處に「そのかみ、大宮人の梅をかざし紅葉かざして往來しけん都大路、  
 今にして思へばたゞ一場の夢に過ぎず」の感を起させる。「大宮人の梅をかざし」は萬葉の「百敷の大宮人  
 はいとまあれや梅をかざしてこゝに集へる」の古歌を織込んだもの、咲き誇る花の如き奈良の昔を偲ばせる  
 に相應しい歌であるが、それも今は虚生の夢、荒果てた舊都、荒廢して仕舞つた現在の奈良の寂しきは奈良  
 をして一段と低回趣味を唆らせる。本課が何處となくさうした寂しみを帯びて居るのも奈良らしい情調で、  
 そゝろに「世の中は常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば」の古歌を思はせる。其の邊の情感に  
 浸らせるのは奈良をして奈良たらしめる大切な心構であらう。

更に首を回らして南を望めば、大和平野の盡くる所はるかに畝傍山・耳成山・香久山の三山まゆず

みの如く、云々

奈良は何處迄も奈良である。畝傍山といひ耳成山といひ香久山といひ、山といふ山、川といふ川、皆歴史  
 の色に染つて居る。それらの山々を見渡し舊都の面影を想像し乍ら奈良情調を味はせようといふのだ。斯く  
 て最後に「愛すべく美しき山野は、太古以來の歴史と結び文學と結びて、感いよ／＼深し。」と力強く結ん  
 である。此の結句は本課の趣旨を現したもので、這般の歴史や文學と結びて更に一層其の感を深くすると  
 いふのが本課の精神なのである。讀者から言へば所謂讀了の感であり、指導者から言つたら取扱の要旨を示  
 したものと云へよう。兎に角力の籠つた讀應へのある教材である。心行く迄讀み浸らせて欲しい。

### 指導形態

#### 指導上の認識點

- 1 前課の後を承け本課は其の舞臺たる奈良に  
 遊ばせ其の風物に懐しみを覚えしめようと言  
 ふのである。従つて奈良の歴史的懐古が主眼  
 であり、奈良情調に浸らせ史的感情を陶冶す  
 るを目的とするは言ふ迄もない。
- 2 文の觀點は低回趣味にあるが、元來低回趣  
 味は景色が好いとか建物が美しいとか言ふこ  
 とからも來るが、それよりも大切なのは其の  
 山川草木、殊に其の地物に纏はる歴史や事蹟  
 を知つた時である。奈良は即ち這般の條件を  
 具備した典型的の古都で、本課は此の懐しい  
 山川を叙するに流麗暢達・滋味掬すべき健筆  
 を以てして居る。指導者は須らく如上の精神  
 を體し、詩情豊かな古都の風物に逍遙遊せし  
 める心構が大切である。
- 3 尙既習の東京・大阪・京都と比較させ、古  
 都の面影を偲ばせると共に文化の推移發展の  
 跡に就て考へさせることを忘れてはなるま  
 い。



4 配当時間は大体四時間位の見當で立案する  
のが妥當であらう。

第一次指導

- 1 題目の指導。  
▽前課の「あをによし」の歌を想起させ讀心を唆つて讀みに入るが良い。
- 2 一度全課を通讀させる。  
▽第一印象其の他讀取つた事項を記載させておく。
- 3 話合。  
▽讀後の印象や感想を中心に。
- 4 新出文字の處置。  
▽字書を索引させ最初一括して授けて置く。  
哀 缺 岡 名 殘 首 回
- 5 再讀させて文の輪廓を掴ませる。  
▽文の書出しはどうか、中核はどこか、結びはどうか等。
- 6 難語句の指導。  
色 移 り 香 失 せ て 年 既 に 然 れ ども 朱

7

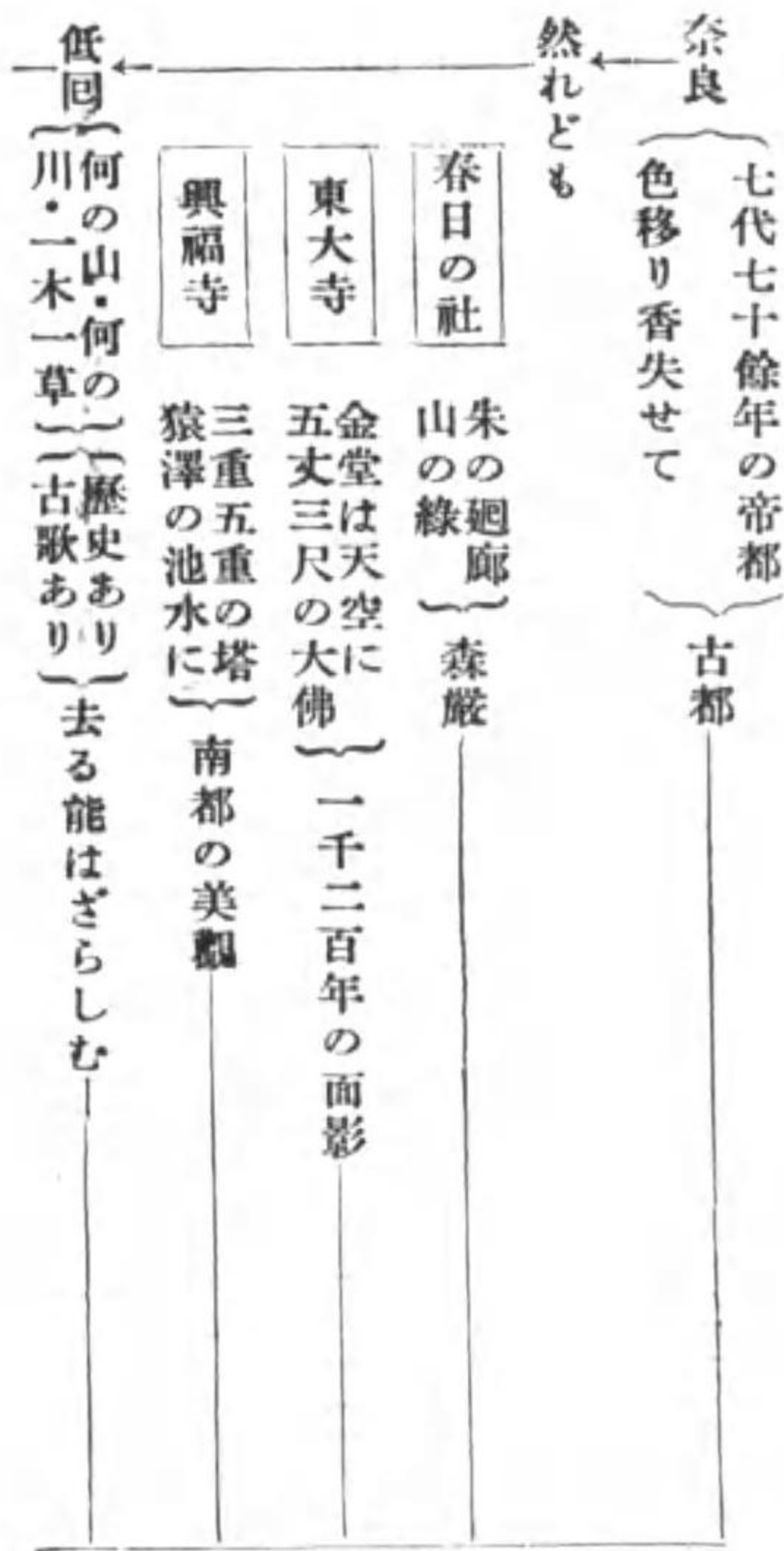
個有名詞の取扱。

- ▽地理的固有名詞は地圖に依つて先づ地點を明かにし挿畫・寫眞・繪葉書等を利用して具體的に取扱ふ。  
春日の社 東大寺 金堂 興福寺 猿澤の池 南都 若草山 三月堂 二月堂 手向山 佐保・佐紀の連岡 春日・高圓の山々 矢田山 生駒山 大内裏 朱雀の大路 羅城門 大極殿 郡山 畝傍山 耳成山 香久山 多武峯
- 8 默讀。  
▽古都の面影を想像に描かせて。

第二次指導

- 1 輪讀。  
▽場面に分けて、座席の順に。
- 2 範讀。  
▽文の感觸に注意させて。
- 3 低音讀。  
▽挿入の地圖と對照させて。
- 4 逐次研究。  
▽頃合を見て次の謄寫した文圖を配布する。

- 9 指名讀。  
▽適宜に句切つて、數名に。  
挿畫と文とを照合させる。
- 10 ▽何處を見せたものか、本にどう出て居るか等。
- 11 低音讀。  
▽聲を立て、反覆讀誦させる。
- 12 ノートを整理して提出させる。

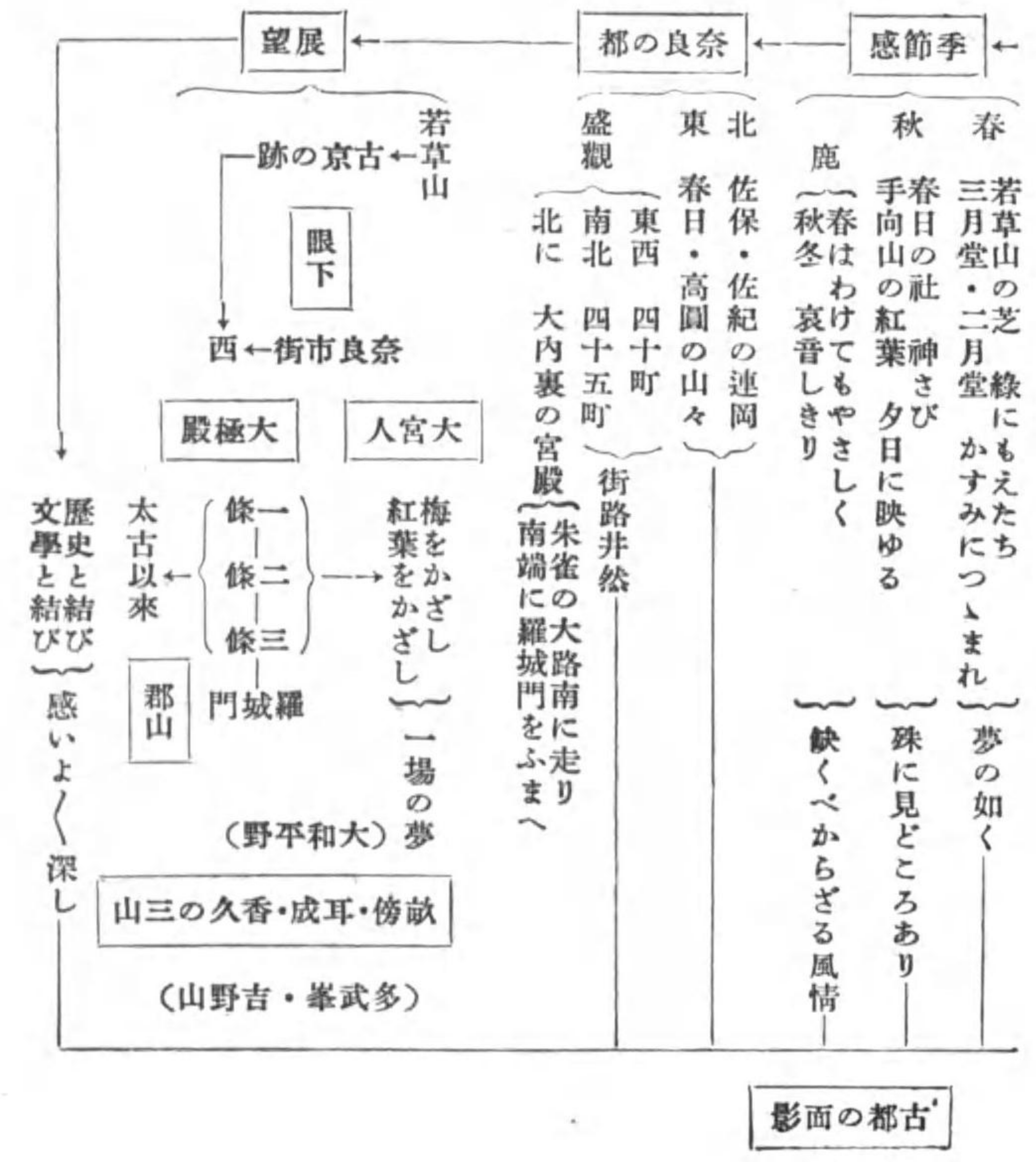




- 5 グループ学習。  
▽配布した文圖を地圖と照合して。  
文意の檢證。
- 6 ▽文意の所在を確め表現面を辿つて例證させる。
- 7 話合。  
▽觀點や文意を中心に。  
默讀。  
華やかな昔を偲ばせて。  
味讀。
- 8 ▽靜かに小聲で音讀させる。  
ノートを整理して提出させる。
- 10
- 1 指名讀。  
▽中・劣生を主として。  
文の觀點を言はせて見る。  
▽紙片を配付してテスト式に筆答させて見る  
のも面白い。
- 2 通讀練習。
- 3

第三次指導

- 4 ▽反覆通讀して表現美を味はせる。  
改作練習。  
▽口語化させて文語の語感や含蓄味を味はせる。
- 5 話方練習。  
▽各自にプランを立てさせ挿畫の地圖を利用して低回味豊かに。
- 6 演習。  
▽案内圖を描かせ略畫や簡単な説明を添へさせる。
- 7 朗讀練習。  
▽教師も参加して適宜に範讀を交へる。  
學習事項の整理。
- 8 ▽内容・形式の兩面に互つて。  
補充説話。  
▽教師の體驗に依る旅行談や印象等。
- 9 視寫・聽寫練習。  
暗誦・暗寫練習。  
新出文字の書取。  
語句の應用練習。  
テスト。
- 10
- 11
- 12
- 13
- 14





テスト問題

一、次の文を読んで後の問に答へなさい。

春は若草山の芝縁にもえたち、三月堂・二月堂  
かすみにつままれてさながら夢の如く、秋は春  
日の社神さび、手向山の紅葉夕日に映ゆる様殊  
に見どころあり、人なつかしげに寄り来る鹿の、  
春はわけてもやさしく、秋より冬にかけて哀音  
しきりに人の眠をさますも、奈良には缺くべか  
らざる風情なるべし。

- 1 春の様子はどんなか。
- 2 秋の様子は？
- 3 『神さび』とはどんな意味か。
- 4 『哀音しきり』とは？
- 5 『風情なるべし』はどこを指して居るか。

二、次の書取をしなさい。

- |   |       |    |        |
|---|-------|----|--------|
| 1 | イロウツリ | 2  | オモカゲ   |
| 3 | ビクワシ  | 4  | サウレイ   |
| 5 | レキシ   | 6  | ガイロ    |
| 7 | テンバウ  | 8  | モミヂ    |
| 9 | ナゴリ   | 10 | ミヤコオホヂ |
- 三、次の文語を口語に直しなさい。
- 1 にほふが如し
  - 2 面影を残せり
  - 3 襟を正さしめ
  - 4 缺くべからざる
  - 5 去る能はざらしむ
  - 6 如何に盛なりしぞ
  - 7 今も残れり
  - 8 往來しけん
  - 9 一場の夢に過ぎず
  - 10 感いよ／＼深し

第十七 修行者と羅刹

第四の『孔子と顔回』では儒教的な東洋哲學の輪廓に觸れさせ、本課では同じ東洋哲學でも佛教思想の片影を窺はせようと云ふのが編者の主旨に違ひない。古代印度の抒情詩の一たる『ラーマヤーナ物語』に、昔この寶洲に大鐵城あり、中は五百の羅刹の住居たり（中略）恆に商人の寶洲に至る者を窺ひ、便ち變じて美女と成り、香花を持し、音楽を奏し、出で迎へて慰問しつゝ鐵城に入らしめ、歡樂の會終りて鐵城中に置き、漸く取りて之を食ふ」とある。之が法華經卷八の『神力品』では、羅刹が釋迦の説法に感化され、外護者と成つたと稱へられ、涅槃經の卷十三『聖行品』の項にも同様の記事が見られる。本課の典據は恐らく後者に屬するであらう。

佛教の所謂悟道の境地を説くに宗教的情緒も纏綿、文學味豊かに脚色した、印度童話風の面白さに兒童も我を忘れるに違ひない。尙涅槃經の聖行品中の四句の偈（諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂）を今様歌に譯したのは古來弘法大師（空海）と言はれて居るが、記録の徵すべきものが無い。頓阿法師の高野日記に、伊呂波歌は金堂御建立の時、大師の作らせたまひて、大工等に唄はしめたまひたるなり」とあるが、恐らく傳説に過ぎないであらう。假名の研究で有名な大矢博士の説に據ると、伊呂波の出來たのは天曆の前後から永觀の頃で、千觀あたりの作であらうと各種の文獻から推定されて居る。平假名を伊呂波歌に配合して有るのを見ると、其の形が涅槃經の四句の偈を今様歌に翻譯して、然も四十七字中一字も重複した文字の無い手際の巧妙さは凡人の能くし難き所、されば後世空海を以て此の歌の作者とし、同時に平假名の製作者に擬したのも成程と頷かれる。何れにしても此の歌が佛法流布の目的を以て作られたものである事は疑ふべくも無い。



## 挿畫の印象と其の説明

百十六頁の挿畫は修行中の釋迦と羅刹との對立を見せたもの。沈思默考、修行の三昧境にある尊い場面丈に畫家の苦心も思ひやられる。之と全然反對の境地を示すのが下段の羅刹である。羅刹は何んな美しい婦人にも化身するが、此處に描かれた形相が本來の姿だと傳へる、即ち俗に鬼といふのは羅刹から始まる。頭に角が見えないのは頭髮が逆立つて居る故であらう。佛體に半裸像の多いのは熱帶地印度に胚胎した故で、美術上でいふ所謂肉體美を現す方便では無い。頭髮が縮んで居るのも裸足も釋迦族の風習から來たものと心得べきである。

## 文字語句

## 新出文字

渴<sup>カ</sup> 謹<sup>フ、レム</sup>

## 讀替文字

悟<sup>ワ</sup> (新出は前々課、ゴ)

食<sup>シキ</sup> (新出は卷五、クフ)

妙<sup>メウ</sup> (新出は卷五、メウ)

## 語句と其の解説

修行者(シユギヤウジヤ) 佛道や武藝等を修行するもの。行者。此處では佛門の行を修める 悉達多(シツダールタ)即ち釋迦をいふ。 羅刹(ラセツ) 梵語 Rakṣa 暴惡可畏と譯す。人を食ふといふ暴惡なる惡鬼。男女あり。慧琳音義に「羅刹此云惡鬼也、食人血肉、或飛空或地行、捷疾可畏也」とある。羅刹衆の王を羅刹天といひ、佛法に歸依して後は守護神と成る。羅刹天は十二天の一で又八方天の一、西南方の護方神。

胎藏現圖曼荼羅では外院西南隅に在つて、其の北に羅刹女が居る。金剛界曼荼羅では西方に居る。十二天の羅刹天は白獅子に乗り、身に甲冑をつけ、右手に刀を持って之を立て、左手は大指にて中指・小指をおさふ。胎藏現圖曼荼羅の像は鎧を被て右手に刀を持ち、左手は大指を以て無名指・小指の甲を捻し掌を立てる。金剛界曼荼羅の像は左拳を腰に當て、右手に刀を持ち荷葉座に坐る。 色はにほへど散りぬるを(イロハニホドチリヌルヲ) 涅槃經の四句の偈(偈は佛の功德を讚美する一種の詩)諸行無常を今様風に翻譯したもので。伊呂波歌の淵源として知られる。釋迦は菩提樹の下に於て正覺を成じて佛陀と成つた。即ち涅槃(ニツパーナ)の境地に達したのであるが、今や肉身を捨てる事に依つて完全に涅槃を實現したので。此の信仰から般涅槃那(パニツパーナ)に入つたといひ、特に佛の場合にはマハー(大)を附して大般涅槃那(マハーパニツパーナ)に入つたといふ。普通我が國では之を「お釋迦様の涅槃」等といひ來つて居る。佛が涅槃に入るや、諸天神は哀歌を捧げたのである。釋提桓因(サッコデーブリーナムインドー)とて我が國では帝釋天の名に依つて知られて居る神であるが、此の神の哀歌は、無常なり(アニツチャー)實に總ての物は(ブダ、サンカハラー)生じては滅すべきもの(ウツパダブダハンミノト)生じては(ウツパデットブ)滅する(ニルツジャンテイ)其等の(テーサム)鎮まるとは(ヴーパサモ)樂なり(スコ)と言ふのであつて、現今南方の佛教徒が葬儀のある毎に棺前に高誦する所の偈文である。其の意味は「げに萬物は無常(常住に非ず)なり。生じては滅すべき本質のもの、生じては滅び行くなり。其等の滅盡は安樂なり」といふ事であつて、經典には色々に譯されて居るが、我が國にて人口に最も膾炙して居るのは「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」といふ偈文で、平假名五十音即ち伊呂波歌は之を翻譯したものであるのは人の知る所である。 雪山(セツサン) 又セツセン。ヒマラヤ山脈のこと。 長い間の難行苦行(ナガイアヒダノナシギヤウクギヤウ) 傳説に據ると釋迦の出家は十九歳であつて、一度北に進んで雪山(ヒマラヤ)に入つて苦行し、其の後南に向つたと傳へて居る。當時の印度文化の中心は恆河(ガンガ)流域の中國地方で、釋



迦も此處を志したが、苦行林の跋伽仙（パールガウア）の許では苦行仙が苦行に依つて生天せんとする見解に飽足らず、又阿羅藍（アラダ）鬘頭羅（ウドラカ）仙が思惟・禪定に依り解脱せんとする數論瑜伽説に近い思想にも満足しなかつた。後から迫つて来た王師・大臣が非常の出家を非難し、先づ王位に即き、後出家じて法を求めよといふ歸國勸告を退け、



苦行釋迦像（捷陀羅）

又王舎城の般荼婆山（バンダウア）に在る時、摩訶陀王瓶沙王（シユレーマヤ）が自ら王國の半を與へるから、王族として家に在れと申出るのも辭退して、自ら恆河流域の聖地伽耶（ガヤ）附近の尼連禪河（ナイランジヤナ）流域の苦行林、ウルヴェールヴァー又は前正覺山に籠つて斷食の苦行を始めた。此の時五人の比丘が苦行者悉達多（シツダールタ）を尊敬して、彼に侍し従つた。悉達多苦行者は六年の苦行を行ひ、斷食して終には米一粒・胡麻一粒を取るに至つ

悉達多苦行者は退轉したと考へ、彼を棄て、去つた。悉達多是現在の佛陀伽耶（ブツダガヤ）の池の菩提樹の下に草刈人から貰ひ受けた吉祥草を敷いて坐禪し、冥想に入つて人生を觀察した。七日にして摩羅（マラー）の軍を降し、即ち愛慾の誘惑に打勝つて心内の障礙を去り、老死ある原因を思惟して緣起法を覺つた。即ち老死の苦は如何にして出離されるかを考へて、生あるが故に老死あり、有あるが故に生あり、取（執着）あるが故に有あり、愛（渴愛）あるが故に取あり、受（感情）あるが故に渴愛あり、觸（感覺）あるが故に受あり、六處（感覺器官）あるが故に觸あり、名色（精神と物質）あるが故に六處あり、識（認識）あるが故に名色あり、行（盲目的意志）ある時識あり、無明（無智）ある時行あり、斯くして人生は苦にて、集ある故苦であり、無明を滅すれば行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・生・老死の悲憂苦惱が順次に滅する。此の滅が解脱であり、滅には道即ち八聖道（正見・正思惟・正語・正業・正精進・正命・正念・正定）に依つて到達できるといふ覺悟を得て、佛陀即ち覺者と成つた。之は佛陀三十五歳の時で、大唐西域記は成道の日を吠舍佉月後半八日或は十五日（三月八日又は十五日）であるとする。然し支那・日本の傳記では十二月八日として居る。本課は此の苦行中の話で、事は大般涅槃經、卷第十三、聖行品第十九之下に詳かである。 渴者（カツシヤ） のどのかはいたひと。 水に渴し切つた人。 惡魔（アクマ） 魔に同じ。魔は梵語の Mara の略。人の善事を妨げる惡神。人の心を惱まし亂す惡靈。圓覺經の註に、莫レ令惡魔外道惱ニ身心とある。 形相（ギヤウサウ） かほつき顔貌。 じゃけん 邪慳。慈悲の心がなく、殘酷に人を扱ふこと。よこしまでいぢわるいこと。無慈悲。 殘忍。 否定（ヒテイ） 然らずとすること。非とすること。ゆるさないこと。打消すこと。肯定の對。

悟（サトリ） さとること。知ること。覺悟。開悟。曉解。又推し量つて知ること。考へつくこと。佛道では迷を脱すること。迷ひを去つて眞理に通ずること。迷妄を脱して眞如の道に入ること。悟道。 行者（ギヤウジヤ） 佛家、修驗道等で、行を修する人。修行者。 ろは言（ウハゴト） 謔言。熱病等に罹つて無意識に口走るとりよめの無いことば。又みだりな言葉を罵つていふ語。俗語の一つ。 有爲の奥山今日越



えて(ウキノオクヤマケフコエテ) 涅槃經の偈の最後の二句、**生滅滅已、寂滅爲樂**を今様歌の調にして詠んだもの。有爲は佛語で生滅無常の境涯をいひ、因縁造作の執着を離れぬこと。此の句の解釋はむづかしくなるが、要するに今日斯うして悟を開いて見れば、是迄の様に淺はかな夢も見ず、又酔ひもしないといふのだ。有爲の奥山を越えるといふのは悟を開くといふ事で、前にも言ふ如く無明(苦樂滅道の四聖諦の眞理を知らぬこと)から行(構成力)、行から識(意識)、識から名色(精神と物質)、名色から六入(客觀的の眼・耳・鼻・舌・身・意の働きに對して外には色・聲・香・味・觸・法即ち觀念といふ對象があつて六入は成立するのである)、六入から觸(觸覺)、觸から受(苦樂の感覺)、受から愛(渴望・愛慾)、愛から取(執着)、取から有(生存)、有から生、生から老・病・憂・悲・苦・惱・失意を發生する。總ての苦の原因は此の様である。無明を全く滅すれば(即ち有爲の奥山を越えれば)行は滅し、行を滅すれば識も滅し、識を滅すれば名色は滅し、名色を滅すれば取は滅し、取を滅すれば生は滅し、生を滅すれば老・死・憂・悲・苦・惱・失意は滅する(滅已)のである。斯の如く苦蘊(苦の集合)を滅すれば醉生夢死の境涯を脱却して、無爲安穩の境地、即ち大般涅槃那(マハーバリニツバーナ)に入る事(寂滅爲樂)になるのだ。

**超越**(テウエツ)とびこえること。順序に拘らず踏越え進むこと。其の物から全く離れて仕舞ふこと。**我が世たれぞ常ならむ**(ワガヨタレゾツネナラム) 四句の偈の第二句、**是生滅法**を今様歌に翻譯したものの。之で涅槃經四句の偈は全部揃つた譯で、伊呂波歌の根源を知らせると共に、四十七字中一字も重複した文字の無い點に着目させねばならぬ。**端嚴**(タンゴン) タンゲンに同じ。端正で威嚴あること。たゞしくおごそかであること。神々しいこと。**嚴正**。帝釋天(タイシヤクテン) 帝釋天と羅刹天とは別體であるが、此處は涅槃經の、その時に釋提桓因(シヤラクデーゾーナーイन्द्र) 能天王とも譯す。帝釋天に同じ)自ら其の身を變じて羅刹の像と作る。形甚だ畏るべしとあるに據つたもの。従つて此の際には羅刹に變裝されたものと見るのが妥當である。涅槃經にも最後には羅刹天が姿を現し、帝釋天と共に釋尊の佛徳を

讚美して居る。即ち、我その時に於て是の語を説き已りて、尋で即ち身を放ちて自ら樹下に投ず。下未だ地に至らず。時に虚空の中種々の聲を出す。其の聲乃ち阿迦尼吒(色究竟天のこと。色界十八天の最上天をいふ)に至る。その時に羅刹釋(羅刹天)の形に還復し(聊か込入つて居るが羅刹が本體に復歸したと解すべきである)即ち空中に於て我が身を接取して平地に安置す。その時に釋提桓因(帝釋天)及び諸の天人、大梵天王、我が足下に稽首し頂禮し讃じて言はく、「善哉、眞に是れ菩薩、能く大いに無量の衆生を利益し、無明黒闇の中に於て大法炬を燃さんと欲す。我れ如來の大法を愛惜するに由るが故に相憐憫す。唯願はくば我が罪咎を懺悔するを聞け。汝未來に於て必定して阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。願はくば濟度せられよ。」その時に釋提桓因及び諸の天衆我が足を頂禮す。是に於て辭し去りて忽然として見えず。云々とある。帝釋天は釋提桓因とも天帝釋ともいふ。梵王と共に佛教の守護を主る神。十二天の隨一で東方の守護神。須彌山の頂上初利天の中央に住み、其の宮殿を善見城といふ。左右に十大天子を伴つて侍衛せしめ、大威徳を有し毎月三齊日に四天子・太子・使者をして四天下を按行せしめ、萬民の善惡邪正を察知せしめる。形像は十二天供儀軌には白象王に乗り五色の雲の中に住み、身は金色で右手に三鈷を持ち左脚を垂れる。三天女があつて各手に蓮華を持ち、又雜華等を盤に盛つて擧げる。但し法隆寺の帝釋天は立像で兩脚を揃へて居る。**禮拜**(ライハイ) 禮して拜むこと。おもに佛を拜むにいひ、その式は兩膝兩膝を地に着けて頭を垂れ掌を合せる。

## 資料

## 原 據

## 聖行品第十九之下 (大般涅槃經卷第十三)

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の讚じたまふ所の如く、「大涅槃經は猶し醍醐の如く最上最妙な



り。若し能く服する有らば衆病悉く除く。一切諸藥悉く其の中に入る」と。我是を聞き已りて竊かに亦思念す、「若し是の經を聽受すること能はざる有らば、當に知るべし、是の人は大愚癡にして善心有ること無しと爲す。」世尊、我今に於ては、實に能く皮を剥ぎて紙と爲し、血を刺して墨と爲し、髓を以て水と爲し、骨を折りて筆と爲して、是の如き大涅槃經を書寫し、書し已りて讀誦し、其をして通利ならしめ、然して後、人の爲に廣く其の義を説くに堪忍す。世尊、若し衆生財物に貪著する有らば、我當に財を施し、然して後、是の大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。若し尊貴の者には先づ愛語を以て其の意に隨順し、然して後、漸く當に是の大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。若し凡庶の者には、當に威勢を以て之を逼めて讀ましむべし。若し憍慢者には爲に僕使と作り、其の意に隨順して、其をして歡喜せしめ、然して後復大涅槃經を以て之を教導せん。若し方等經を誹謗する者有らば、當に勢力を以て之を摧きて伏せしめ、既に摧伏し已らば、然して後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。若し大乘經を愛樂する者有らば、我當に躬ら往いて恭敬供養、尊重、讚歎すべし。」

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、「善哉善哉、汝甚だ大乘經典を愛樂す。大乘經を貪り、大乘經を愛し、大乘經を味ひ、大乘を信敬し、尊重し、供養す。善男子、汝今此の善心の因縁を以て、當に無量無邊恆河沙等の大菩薩の前に超越して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。汝も亦久しからずして復當に我が如く廣く大衆の爲に、是の如きの大般涅槃如來佛性諸佛所説の祕密の藏を演説すべし。善男子、乃昔過去佛日未だ出でず。我、爾の時に於て婆羅門と作りて菩薩の行を修し、悉く能く一切外道の有らゆる經論に通達し、寂滅行を修して威儀を具足す。其の心清淨にして、外より來りて能く欲想を生ぜしむるも破壞せられず、瞋恚の火を滅して常樂我淨の法を受持す。周徧して大乘經典を求索するに、乃至方等の名字を聞かず。我、爾の時に於て雪山に住す。其の山清淨にして、流泉、浴池、樹林、藥木其の地に充滿す。處處の石間に清流水有り、諸の香華多くして周徧嚴飾す。衆鳥羣獸稱讚すべからず、甘果滋繁にして種別計り難し。

復無量の藕根、甘根、青木、香根有り。我、爾の時に於て獨其の中に處し唯諸果を食す。食し已りて心を繫けて思惟坐禪す。無量歳を経るに、亦如來の出世大乘經の名有るを聞かず。善男子我是の如きの難行苦行を修するの時、彼の帝釋、諸天人等心大いに驚怪して、即ち共に集會し、各相謂つて偈を説きて言さく、

各相指示す、清淨雪山の山

寂靜離欲の主、功德莊嚴王

已に貪瞋慢を離れ、永く諸愚癡を斷ず

口初て未だ曾て、麤惡等の語言を説かず

爾の時に衆中に一りの天子有り、名を歡喜と曰ふ。復偈を説きて言さく、

是の如き離欲の人、清淨に勤めて精進す

將帝釋、及以諸天を求めずや

若し是道を求むる者ならば、諸の苦行を修行せん

是の人多くは、帝釋所坐の處を求めんと欲す

爾の時に復一りの仙天子有り。即ち帝釋の爲に偈を説きて言さく、

天主橋尸迦、是の慮を生ずべからず

外道苦行を修す、何ぞ必ず帝處を求めん

是の偈を説き已りて復是の言を作さく、「橋尸迦、世に大士有り。衆生の爲の故に己の身を貪らず。諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、種種無量の苦行を修す。是の如きの人、生死中の諸の過咎を見るが故に、設ひ珍寶の、此の大地、諸山、大海に滿つるを見るときも貪著を生ぜず。涕唾を視るが如し。是の如きの大士、財寶、所愛の妻子、頭目髓腦、手足支節、所居の舍宅、象馬車乘、奴婢童僕を棄捨し、亦天上に生ずることを願求せず、唯一切快樂を受くるを得んことを願ふ。我が解する所の如きは、是の如きの大士清淨に



して染無く、衆結永く盡く。唯阿耨多羅三藐三菩提を志求せんと欲するならん。」  
 釋提桓因、復是の言を作さく、「汝が言の如きは、是の人則ち一切世間の衆生を攝取せんが爲なり。大仙、若し此の世間に佛樹有らば能く一切の梵天、世人及び阿修羅の煩惱の毒蛇を除く。若し諸の衆生、是の佛樹の陰涼の中に住すれば、煩惱の諸毒悉く消滅することを得。大仙、是の人若し當に未來世の中善逝と作らば、我等悉く當に無量の熾然煩惱を滅することを得べし。是の如きの事實に信じ難しと爲す。何を以ての故に、無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發せども、少微縁を見れば阿耨多羅三藐三菩提に於て即便動轉す。水中の月の水動すれば則ち動くが如く、猶し畫像の成じ難く壊し易きが如し。菩提の心も亦復是の如く、發し難く壊し易し。大仙、多人有りて諸の鎧仗を以て牢く自ら莊嚴し、前んで賊を討たんと欲するに陣に臨みて恐怖すれば則ち便退散するが如し。無量の衆生も亦復是の如し。菩提心を發して牢く自ら莊嚴すれども、生死の過を見て心恐怖を生じ、即便退散す。大仙、我是の如く無量の衆生發心の後、皆動轉を生ずるを見る。是の故に我今、是の人専ら苦行を修して惱無く熱無く、道檢に住して其の行清淨なるを見ると雖も、未だ信ずること能はざるなり。我今要す當に自ら往いて之を試みて、其實に能く阿耨多羅三藐三菩提の大重擔を荷負するに堪忍するや不やを知るべし。大仙、猶し車二輪有らば則ち載用有り、鳥二翼有らば飛行に堪忍するが如し。是の苦行者も亦復是の如し。我其の禁戒を堅持するを見ると雖も、未だ其の人に深智有りや不やを知らず。若し深智有らば當に知るべし、則ち能く阿耨多羅三藐三菩提の重擔を荷負するに堪忍せん。大仙、譬へば魚母の多く胎子有れど、成就する者は鮮きが如く、菴羅樹の華多く、果少きが如く、衆生心を發すは乃ち無量有れども、其の成就に及びては少くして言ふに足らず。大仙、我當に汝と俱に往いて之を試むべし。大仙、譬へば眞金の三種試み已りて乃ち其の眞を知るが如し、燒、打、磨を謂ふ。彼の苦行を試むるも亦當に是の如くなるべし。」

爾の時に釋提桓因、自ら其の身を變じて羅刹の像と作る。形甚だ畏るべし。雪山に下り至り、其を去るこ

と遠からずして、便ち立住す。是の時に羅刹、心に畏るる所無く、勇健當り難し。辯才次第し、其の聲清雅なり。過去佛所説の半偈を宣ぶ。

諸行は無常なり、是生滅の法なり

是の半偈を説き已りて便ち其の前に住す。所現の形貌甚だ怖畏すべし。顧眄して徧く視て四方を觀る。是の苦行者、是の半偈を聞いて心に歡喜を生ず。譬へば賈客の險難の處に於て夜行して伴を失ひ。恐怖推索して還たび同侶に遇ふ。心に歡喜を生じて踊躍量無きが如し。亦久病の未だ良醫、臆病、好藥に遇はず、後卒に之を得るが如く、人の海に没して卒に船舫に遇ふが如く、渴乏人の清涼水に遇ふが如く、怨に逐はれ忽然として脱することを得るが如く、久しく獄に繋かれ、卒に出づることを得るが如し。亦農夫の炎旱に雨を得るが如く、亦行人の還たび家に歸ることを得、家人見已りて大歡喜を生ずるが如し。善男子、我、爾の時に於て是の半偈を聞き、心中に歡喜すること亦復是の如し。即ち座より起ち、手を以て髮を擧げ、四方を顧視して是の語を作さく、「向に聞く所の偈、誰の説く所ぞ。」

爾の時に四顧するに餘人を見ず、唯羅刹を見る。即ち是の言を説かく、「誰か是の如きの解脱の門を開き、誰か能く諸佛の音聲を雷震す。誰か生死睡眠の中に於て、獨覺寤して是の如きの言を唱ふ。誰か能く此に生死饑饉の衆生に無上の道味を示導す。無量の衆生生死の海に沈む、誰か能く中に於て大船師と作る。是の諸の衆生、常に煩惱の重病に纏はる。誰か能く中に於て爲に良醫と作る。」此の半偈を説き、我が心を啓悟す、猶し半月の漸く蓮華を開くが如し。善男子、我爾の時に於て更に見る所無く、唯羅刹を見る。復是の念を作さく、「將是の羅刹是の偈を説くや。」覆ねて復疑を生ず、「或は其の説に非じ。何を以ての故に。是の人形容甚だ怖畏すべし。若し是の偈句を聞くことを得る者有らば、一切の恐怖、醜陋即ち除かん。何ぞ此の人形貌是の如くにして、能く此の偈を説くこと有らんや。火中蓮華を出生すべからず、日光の中冷水を出生するに非ず。」



善男子、我爾の時に於て復是の念を作さく、「我今無智、而も此の羅刹、或は能く過去の諸佛を見、諸佛の所に從ひて是の半偈を聞くことを得、我今當に問ふべし。」即便前んで是の羅刹の所に至り、是の如きの言を作さく、「善哉大士、汝何れの處に於てか是の過去の離怖畏者の説く所の半偈を得。大士、汝何れの處に於てか是の如きの半如意珠を得、大士是の半偈の義、乃ち是過去、未來、現在の諸佛世尊の正道なり。一切世間の無量の衆生、常に諸見の羅網に覆はれて、終身此の外道の法中に於て初て是の如きの出世十力世雄所説の空義を聞くことを得ず。」善男子、我是を問ひ已るに、即ち我に答へて言はく、「大婆羅門、汝今我に是の義を問ふべからず。何を以ての故に、我食せざるより來た、已に多日を經たり。處處を求索するに得ること能はず。飢渴苦惱、心亂謬語す。我が本心の知る所に非ざるなり。我今力能く虚空に飛行して鬱單越に至り乃至天上、處處に食を求むるに、而も得ること能はず、是を以ての故に、我是の語を説く。」善男子、我時に即ち復羅刹に語りて言はく、「大士、若し能く我が爲に是の偈を説き竟らば、我當に身を終るまで汝の弟子と爲るべし。大士、汝の説く所の者は名字終らず、義も亦盡さず、何の因縁を以てか説くことを欲せざるや。夫財施は竭盡有り、法施の因縁盡すべからざるなり。法施は盡ること無く、利益する所多し。我今此の半偈の法を聞き已りて心驚疑を生ず。汝今幸くば我が爲に除斷すべし。此の偈を説き竟らば、我當に終身汝の弟子と爲るべし。」羅刹、答へて言はく、「汝、智太だ過ぐ。但自ら身を憂ひて卻て念を見ず。今我定んで飢苦に逼められ、實に説くこと能はず。」我即ち問ひて言はく、「汝食する所の者、是何物と爲す。」羅刹答へて言はく、「汝問ふに足らず。我若し説かば人をして多く怖れしむ。」我復語りて言はく、「此の中獨處して更に人有ること無し。我汝を畏れず、何が故ぞ説がざる。」羅刹答へて言はく、「我食する所は唯人の便肉、其の飲む所は、唯人の熱血、自ら我が薄祐、唯此の食を食ふ。周徧して求索するに、因りて得ること能はず。世、多人と雖も皆福德有り、兼て諸天に守護せらる。而も我、力無くして殺すことを得ること能はず。」善男子、我復語りて言はく、「汝但、具足して是の半偈を説け、我偈を聞き已りて、當に此の身を以て

奉施供養すべし。大士、我設ひ命終すとも、此の如きの身復用ふる所無し。當に虎狼、鴟梟、鵂鶩に啖食せられ、而も復一毫の福を得ざるべし。我今阿耨多羅三藐三菩提を求むるが爲に、不堅身を捨てて以て堅身に易ふ。」羅刹答へて言はく、「誰か當に汝が是の如きの言、八字の爲の故に所愛の身を棄つるを信ずべき。」善男子、我即ち答へて言はく、「汝眞に無智なり。譬へば人有りて、他に瓦器を施して七寶の器を得んが如し。我も亦是の如し。不堅身を捨てて金剛身を得。汝、誰か當に信ずべきと言ふ。我今證有り。大梵天王、釋提桓因及び四天王、能く是の事を證せん。復天眼有る諸菩薩等、無量の衆生を利益せんと欲するが爲に、大乘を修行して六度を具する者も亦能く證知せん。復十方の諸佛世尊の衆生を利する者有り。亦能く我が八字の爲の故に是の身命を捨つるを證せん。」羅刹復言はく、「若し是の如く能く身を捨つれば、諸かに聽き諱かに聽け。當に汝が爲に其餘の半偈を説くべし。」善男子、我爾の時に於て是の語を聞き已りて心中歡喜し、即ち己身所著の鹿皮を解きて、此の羅刹の爲に法座を敷置して白して言さく、「和上、願はくば此座に坐せ。我即ち前に於て又手長跪して是の言を作さん、唯願はくば和上、善く我が爲に其餘の半偈を説きて具足を得しめよ」と。羅刹、即ち説きて、

生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す

爾の時に羅刹、是の偈を説き已りて復是の言を作さく、「菩薩摩訶薩、汝今已に具足の偈義を聞き、汝の所願悉く満足すと爲す。若し必ず諸の衆生を利せんと欲せば、時に我に身を施せ。」善男子、我爾の時に於て深く此の義を思ひ、然して後處處、若しは石、若しは壁、若しは樹、若しは道に此の偈を書寫し即便更に所著の衣裳を繫く。恐らくは死後に於て身體露現せん。即ち高樹に上る。爾の時に樹神、復我に問ひて言はく、「善哉仁者、何の事を作さんと欲す。」善男子、我時に答へて言はく、「我身を捨てて以て偈價を報いんと欲す。」樹神又言はく、「是の如きの偈は何の利益する處ぞ。」我時に答へて言はく、「是の如きの偈句、乃ち是過去、未來、現在の諸佛所説の開空法道なり。我此の法の爲に身命を棄捨す。利養、名聞、財寶、轉輪聖王、



四大天王、釋提桓因、大梵天王、人天中の樂の爲にせず。一切衆生を利益せんと欲するが爲の故に此の身を捨つ。善男子、我捨身の時復是の願を作さく、「願はくば一切の慳惜の人、悉く來りて我の此の身を捨離するを見しめよ。若し少施貢高を起す者有らば、亦我一偈の爲に此の身命を捨つること、草木を棄つるが如くなるを見ることを得しめん。」

我爾の時に於て是の語を説き已りて、尋で即ち身を放ちて自ら樹下に投ず。下未だ地に至らず。時に虚空の中種種の聲を出す。其の聲乃ち阿迦尼吒に至る。爾の時に羅刹釋の形を還復し、即ち空中に於て我が身を接取して平地に安置す。爾の時に釋提桓因及び諸の天人、大梵天王、我が足下を稽首し頂禮し讃じて言はく「善い哉善い哉、眞に是菩薩、能く大いに無量の衆生を利益し、無明黒闇の中に於て大法炬を然さんと欲す。我如來の大法を愛惜するに由るが故に相憐愍す。唯願はくば我が罪咎を懺悔するを聞け。汝未來に於て必定して阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。願はくば濟度せられよ。」

爾の時に釋提桓因及び諸の天衆我が足を頂禮す。是に於て辭し去りて忽然として見えす。善男子、我が往昔半偈の爲の故に此の身を捨棄するが如く、是の因縁を以て便ち超越十二劫に足ることを得、彌勒の前に在りて阿耨多羅三藐三菩提を成ず。善男子、我是の如きの無量の功德を得たり。皆如來の正法を供養するに由る。

善男子、汝今も亦爾なり。阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、即ち已に無量無邊恆河沙等の諸の菩薩の上に超過す。善男子、是を菩薩、大乘大般涅槃經に住して聖行を修すと名く。」

### 指導精神

本課は釋迦の佛徳を稱へ其の佛性を象徴したもので、伊呂波歌の淵源たる涅槃經の四句の偈、諸行無常・是生滅法・生滅滅已・寂滅爲樂が文の中核と成つて居る點に着目すべきである。出所は大般涅槃經卷第十三、

聖行、品第十九之下で、初頭の諸行の無常を明かにした箇所を熟讀し置く要があらう。即ち

善男子、我諸行悉く皆無常と觀ず。云何が知るや、因縁を以ての故なり。若し諸法縁より生ずる者有らば、則ち無常と知る。是の諸の外道、一法の縁より生ぜざる有ること無し。善男子、佛性は無生無滅、無去無來なり。過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、因の所作に非ず、作に非ず作者に非ず、相に非ず無相に非ず、有名に非ず無名に非ず、名に非ず色に非ず、長に非ず短に非ず、陰界入の攝持する所に非ず。是の故に常と名く。善男子、佛性は即ち是如來、如來は即ち是僧、僧は即ち是常なり。是の義を以ての故に、因より生ずる法は、名けて常と爲さず。是の諸の外道は、一法の因より生ぜざる有ること無し。善男子、是の諸の外道は、佛性、如來、及び法を見ず。是の故に外道の言説すべき所は、悉く是れ妄語にして眞諦有ること無し。諸の凡夫人、先に餅衣、車乘、舍宅、城郭、河水、山林、男女、象馬、牛羊を見、後相似るを見れば便ち是常と言ふ。當に知るべし、其の實は是常に非ざるなり。善男子、一切の有爲は皆是無常なり。虚空は無爲なり、是の故に常と爲す。佛性は無爲なり、是の故に常と爲す。虚空とは即ち是佛性、佛性とは即ち是如來、如來とは即ちは無爲、無爲とは即ち是常、常とは即ち是法、法とは即ち是僧、僧とは即ちは無爲、無爲とは即ち是常なり。

又曰く、

善男子、有爲の法は凡そ二種有り、色法、非色法なり。非色法とは心々數法、色法とは地水火風なり。善男子、心を無常と名く。何を以ての故に、性は是攀緣相應分別の故なり。善男子、眼識性異、乃至意識性異、是の故に無常なり。善男子、色境界異、乃至法境界異、是の故に無常なり。善男子、眼識相應異、乃至意識相應異、是の故に無常なり。善男子、心若し常ならば眼識獨り一切法を緣ずべし。善男子、若し眼識異、乃至意識異ならば、則ち無常を知る。法相似て念々に生滅するを以て、凡夫見已りて之を計して常と爲す。善男子、諸の因縁相破壊すべきが故に、亦無常と名く。所謂眼に因り、色に因り、明に因り、



思惟に因りて眼識を生ず、耳識生ずる時所因各異なり、眼識の因縁に非ず。乃至意識異も亦是の如し。復次に善男子、諸行を壞する因縁の故に、心を無常と名く。所謂無常心を修ずる異なり。苦空無我心を修ずる異なり、心若し常ならば常に無常を修すべし。尙苦空無我を觀ずることを得ず。況や復常樂我淨を觀ずることを得んや。是の義を以ての故に、外道法の中、常樂我淨を攝取すること能はず。善男子、當に知るべし、心法必定無常なり。復次に善男子、心性異なるが故に名けて無常と爲す。所謂聲聞心性異、緣覺心性異、諸佛心性異なり。一切外道心に三種有り。一つには出家心二、つには在家心、三つには在家違離心なり。樂相應心異、苦相應心異、不苦不樂相應心異、貪欲相應心異、瞋恚相應心異、愚癡相應心異、一切外道心相亦異、所謂愚癡相應心異、疑惑相應心異、邪見相應心異、進止威儀其の心も亦異なり。善男子、心若し常ならば亦復諸色を分別すること能はず。所謂青、黃、赤、白、紫色なり。善男子、心若し常ならば諸の憶念法忘失すべからず。善男子、心若し常ならば、凡そ諸の讀誦增長すべからず。復次に善男子、心若し常ならば、説きて已作、今作、當作と言ふべからず。若し已作、今作、當作有らば、當に知るべし、是の心必定無常なり。善男子、心若し常ならば則ち怨、親、非怨、非親無けん。心若し常ならば、則ち我物、他物、若しは死、若しは生と言ふべからず。心若し常ならば所作有りと雖も、增長すべからず。善男子、是の義を以ての故に、當に知るべし、心性各々別異なり。別異有るが故に、當に知るべし、無常なり。と、斯くて色の無常を説き我に執するを破し、本課の出所たる羅刹の場面（資料参照）に入つて居る。釋迦は正しくは釋迦牟尼といひ、又世尊とも如來とも釋尊ともいふ。西紀前五六世紀頃、中印度の北端迦比羅衛城主淨飯王の子として生れ、幼名を悉達多と稱した。時は四月八日、所は藍毘尼園無憂樹の下で母后摩耶が分娩の期近づいて實家なる拘利城へ赴かれる途上での出来事であつた。傳説に依れば母の右脇から生れ、直に四方に行くこと七歩、天上天下唯我獨尊と獅子吼し給うたといふ。然るに不幸にも母は産後七日にして歿し給ひ、爾來其の妹波闍波提の手で養育され、文武の諸道を修習した。十九歳で拘利城主善覺王の女耶輸陀

羅を迎へて妃とし、十年の後男子を儲けた。之を羅睺羅といふ。悉達多は少時好んで沈思冥想に耽り、憂鬱、厭世の傾向があり、父王は之を憂へ、新婚と同時に寒・暑・雨の三殿を作り、婬女を侍せしめ音楽を奏せしめる等、娛樂の方法を講じたが、太子の心は益々内省憂悶に傾き、或時は農耕の祭に農夫の勞苦を察し、鳥獸蟲魚の相喰むを實見して獨り閻浮樹下に世の苦を靜思し、又或時は城外に出遊しようとして老者を見、病者に遇ひ、死者を送るを望んで無常の感愈々深く、出家・沙門に會ふに及び、彼の如くならうと心に期し時たもあつた。又一夜苦惱して眠れず偶々起きて宮女等の形を亂して熟眠した所を見て、茲に決然として出家の意を定め、御者車匿を召して愛馬に乗じ、夜半王宮に出でて修道の途に上つた。これ太子二十九歳の時である。斯くて太子は東方藍摩城外の林中に入り、衣冠を捨て一介の沙門と成り、車匿に命じて珠飾衣服を持ち歸つて父王並に妃に出家の事を告げしめた。之より太子は歸城を勧める王使の言を斥け幾多の修行者・學者に就いて道を求めたが、未だ生死の迷を絶滅する究竟の解脱に達し得ず、遂に自ら克苦思惟して之を發見せんと尼連禪河の邊なる苦行林に六年の修行をした。けれども身體衰弱するのみで解脱を得なかつた。茲に於て徒に身神を衰耗せしめることの非を悟り、河水に浴して身を清洗し、村の長の女須闍陀の供養せる乳糜を受けて氣力を恢復し、伽耶の畢波羅樹下に至り、石上に吉祥草を敷き、茲に端座して正覺成らざんば此の座を起たじと誓つて解脱の法を觀じた。茲に於て幾多の惡魔に打勝ち、遂に三十五歳の二月八日（異説あり）曉天に及んで迷の因を悟り、邪欲を去つて正覺を得、再び苦界に沈むこと無き難苦解脱の境に入つた。之を成等正覺といひ、一求道の沙門は茲に佛陀即ち覺者と成つたのである。釋尊はなほ樹下に在ること七日、解脱の安きを味ひ、人生因果の關係即ち十二因縁の理を順逆に觀察し、終に之を一切の人に聞かしめ、俱に覺りに入らしめんと欲し給うた。之より釋尊は傳道の旅に出で、先づ波羅奈斯城の鹿野苑に赴いて、嘗て苦行を俱にした憍陳如等の五人に教を説き、彼等は前後して佛弟子と成つた。茲に佛と法と僧と具足して三寶の佛教教團が形成された。之を初轉法輪（初めての傳道教化）といふ。其の後釋尊は摩揭陀・橋



薩羅の二國を中心として、恆河沿岸の中印度諸國を遊化し、諸人の來つて弟子と成るもの甚だ多く、或は國王・長者の歸依を受け、竹林精舍・祇園精舍の如き幾多の道場を獻ぜられ、教團は頗る發展した。釋迦の父王及び姨母・妃等も亦皆其の弟子と成つた。一方には又釋尊及び其の弟子に様々の中傷を加へ、迫害を加へ、教團の發展を惡むもの輩出したが、之は却て釋迦の人格の偉大を立證する材料と成つたのみで一も其の目的を達したものは無かつた。斯くて東は瞻波より西は憍賞彌及び摩偷羅、南は摩揭陀より北は迦比羅衛城に至る廣大な地域を傳道する事四十五年、其の夏吠舍離城外竹林村に於て兩期を過した時、其の入滅近き事を覺知し、之を諸弟子に豫告した。斯くて北方拘尸那揭羅に向つて最後の遊行を成し、行く行く諸弟子等に教誡を與へつゝ、憍連若跋提河畔の娑羅林に入り、茲に於て一老梵志、須跋陀羅を化して最後の佛弟子と成し、諸弟子に對して我が滅後も嘗て定め説いた戒・法を大師とし、放逸を戒め勤行精進にして生死を超越せよと遺誡を與へ、其の夜半寂然として大涅槃に入つた。時に二月十五日で佛壽八十歳。遺骸は大迦葉の到達を待ち拘尸那揭羅の未羅族に依り、無上の尊崇と嚴肅な葬法（轉輪聖王の法式）に依つて城外の天冠寺に於て荼毗に附し、佛骨を摩揭陀其の他の八國に分奉し、各々佛塔を建立して安置し厚く供養した。後阿育王出でて各地の塔を開き、八萬四千の塔を建て分祠したと傳へる。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の指標は釋迦が身命を賭して悟入の道を得、衆生を救はんとした人間性の偉大さに直接させ、宗教的情操哲學的思索の芽生を促し、人生の意義生死の問題に就て感ずる所ありしめ、小我を捨て大我に生きるの態度を馴致するにある。

らしめ、小我を捨て大我に生きるの態度を馴致するにある。

- 2 既習の『鐵眼の一切經』と關係附け釋迦が人類に及ぼしたる影響の偉大さに感激させ、生活態度の範を其處に歸依欣求せしめる事を

念としたい。

- 3 尙本課の中核たる涅槃經の四句の偈は、佛徳の讚美歌であり平假名五十音の原據たる事を知らせるのも忘れてならぬ大切な觀點の一つである。

- 4 表現の潤達さ・筆致の自然さに氣附かせ叙事の中に籠る叙情の豊かな點を認識させ文に於ける會話活用の呼吸を呑込ませると共に文學趣味の啓培に資するは是又忘れてならぬ形式上の任務である。

- 5 配當時間は大體四時間位で如上の指導を完了する様立案すべきであらう。

第一次指導

1 題目の指導。

▽板書して讀ませ羅刹が地獄で罪人を呵責するといふ惡鬼の一種、黒身・朱髮・獸牙・雁爪・碧眼の異形を呈し、常に人の血肉を食ふ魔物である事を知らせて讀心を咬るがよい。

- 2 存分に時間を與へ先づ全課を徐に通讀させる。▽讀んで得た第一印象や感想等は残らず記帳させておく。

3 指名讀。

▽適宜に句切つて、數名に。

- 4 再度通讀させて不明の箇所を抽出させる。質疑應答。

▽新出文字は辭書を輔導して索引させる。湯 惛 謹 食 妙 禮

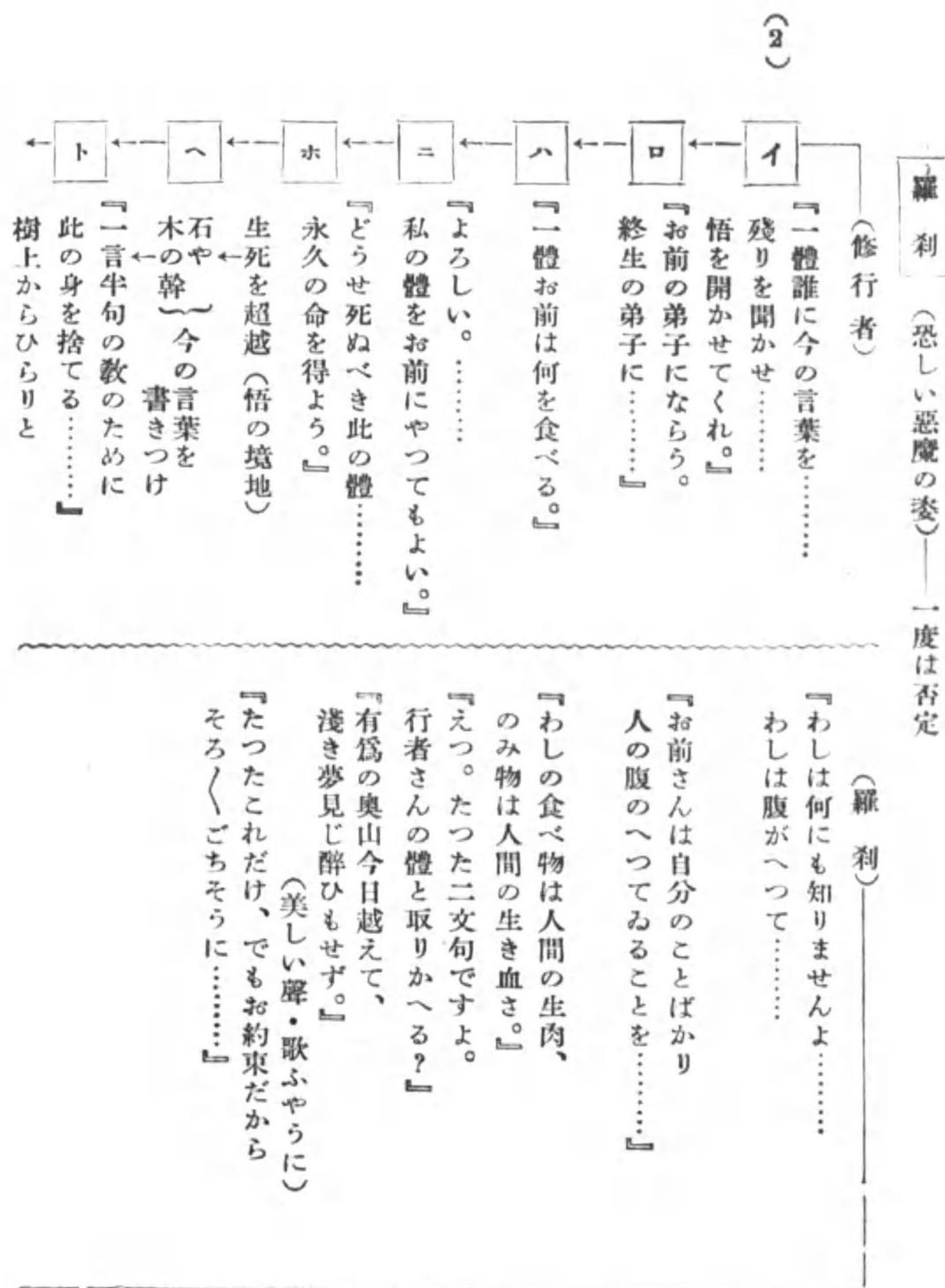
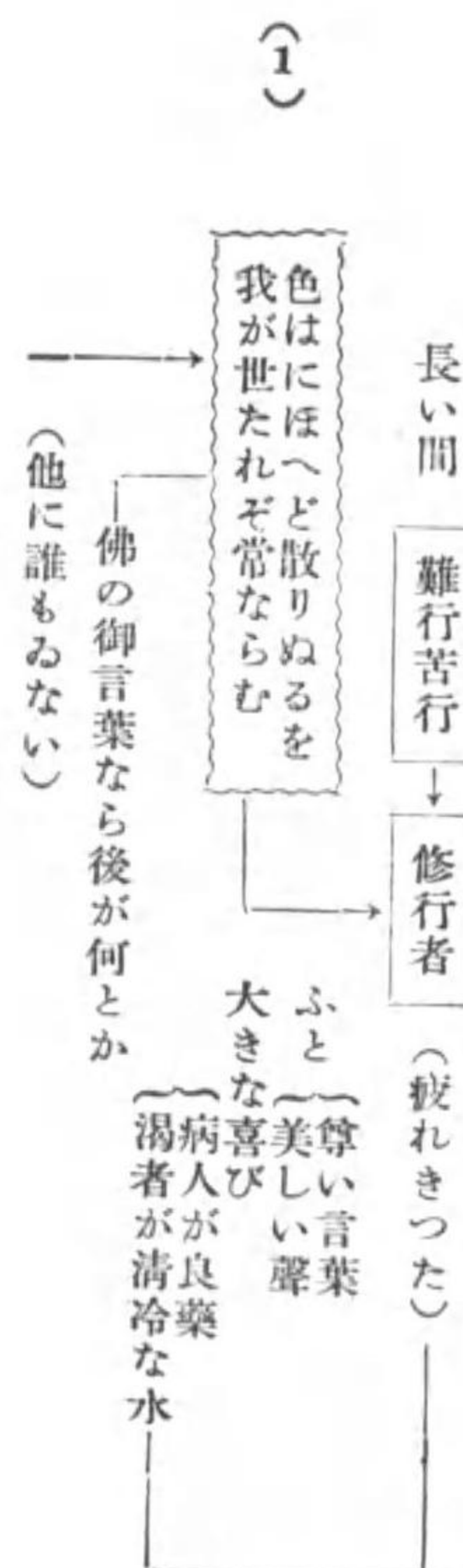
▽難語句は先づ類推させてから指導する。

色はにほへど 常ならむ 難行苦行 修行者 良藥 湯者 清冷 無常 運命 惡魔の姿 形相 無知 じゃけん 否定 悟を開かせ とぼけ 行者 うは言 けんそん 終生 生肉 生き血 食ひしんばう 舌なめずり 永久の命 謹んで おもむるに有爲の奥山 淺き夢 ぎよろり うつとり 生死 超越 淺はかな夢 迷 悟の境地 あまねく てつぺん 餌食 感動 一言半句 妙なる樂の音 端嚴 安置 諸の尊者



第二次指導

- 6 ひれ伏し 禮拜 一すぢに 道を求め  
個有名詞の取扱  
▽特に附説を要する個有名詞は一々板書して  
入念に指導する。  
雪山 羅刹 帝釋天 お釋迦様
- 7 自由に讀ませて文の荒筋を掴ませる。  
▽場所・人物・事の次第など。
- 8 文意の所在を探らせる。  
▽把握した文意は記帳させて置く。  
低音讀。  
▽聲を出して反覆通讀させる。  
ノートを纏めて提出させる。  
雪山の山の中
- 5 逐次研究。  
▽頃合を見て次の謄寫した文圖を配付する。
- 4 話合。  
▽把握した文意や觀點を中心に。
- 3 範讀。  
▽一度範讀してから重要な箇所を更に追讀さ  
せる。
- 2 輪讀。  
▽大きく句切つて、座席順に。
- 1 數回繰返して通讀させる。  
▽不明の箇所は其の都度質問させる。





- 2 指名讀。  
▽中・劣生を主として。
  - 3 話方。  
▽對者を極めて劇的に。
  - 4 演習。  
▽學級總掛りで、一幕物の劇に脚本化させる。
  - 5 劇化實演。  
▽扮装や背景等を工夫させて。
  - 6 學習事項の整理。  
▽今様歌を中心に全課の學習事項を要約させる。
- テスト問題**
- 一、次の今様歌に句讀點を付けて解釋しなさい。  
色はにほへど散りぬるを  
我が世たれぞ常ならむ  
有爲の奥山今日越えて  
淺き夢見じ酔ひもせず
  - 二、次の漢字を組合せて熟語を十作りなさい。  
業 修 否 運 良

- 7 補充説話。  
▽釋迦の行跡や平假名五十音の起源等。尙既習の『鐵眼の一切經』と連絡させ佛典の浩瀚なことを附説する。
  - 8 視寫・聽寫練習。  
暗誦・暗寫練習。  
新出文字の書取。  
語句の應用練習。  
テスト。
  - 9 暗誦・暗寫練習。
  - 10 新出文字の書取。
  - 11 語句の應用練習。
  - 12 テスト。
- 三、次の□の中に適當した字を入れなさい。
- 1 □の尊者、多くの天人たちが□れて、修行者の足下に□伏しながら、心から□した。
  - 2 一言□□の教のために、此の□を□□る我
- 渴 無 惡 終 行  
難 生 命 藥 言  
苦 魔 定 常 者

- 6 話合。  
▽前項の文圖を前にし會話の筋を要約させて。
- 7 書取。  
▽重要な箇所を選ばせて。
- 8 低音讀。  
▽場面を想像に描かせ劇的・表情的に。
- 9 今様歌の吟味。  
▽先づ口語化させて。

チ — 修行者 — たゞ一すぢに道を求め

---

音の樂なか朗らか上天

羅刹 ← 端嚴な 帝釋天

修行者 を空中に捧げ  
地上に安置  
（禮拜）

諸の尊者 多くの天人 ひれふし

お釋迦様

- 10 話合。  
▽讀後の感想を中心に。
- 11 指名讀。  
▽個讀に範讀を交へて。  
ノートを経て提出させる。
- 12 ノートを経て提出させる。

**第三次指導**

- 1 通讀練習。  
▽文の觀點に着目させて。



を見よ。

3 まさか、此の□□じやけんな羅刹の□□と

は思へない。

教材の劇化

修行者と羅刹

人物 修行者 (釋迦)

羅刹 (後、帝釋天)

多くの尊者

天人たち

雪山の山の中

舞臺

深い森、木立の間から雪を頂いた峯が見える。下手に机を一二脚おき、前を木の枝で蔽うておく、机にあがれば木に登った様に思はせる、幕があくと修行者、鹿の皮を着て面やつれし、石の上に坐つて目をつむつてゐる、と舞臺裏から聲がする。

色はにほへど散りぬるを、  
我が世たれぞ常ならむ。

(と修行者は耳をそばだて、おごそかな顔つきで)

今のは佛の御聲ではなかつたらうか？ だが佛の御言葉であれば、其の後に何か續く言葉がなくては？ (小首をかたむけ) はてふしぎだ。

(とあたりを見まはす、此の時異形の羅刹が後の森からそつと出て来る)

修 あゝ、此の羅刹の聲であつたらうか。

(ふしぎさうに下を向いて)

まさか、此の無知じやけんな羅刹の言葉とは思へない。(間) いや、彼とても、昔の御佛に教を聞かなかつたとは限らない。よし、相手は羅刹にもせよ、悪魔にもせよ、佛の御言葉とあれば聞かねばならぬ。

(とひとり言をいって、今度はうやくしく羅刹の近くへ進み)

一體、お前は誰に今の言葉を教へられたのか、思ふに佛の御言葉であらう。それも前半分で、まだ後の半分があるに違ひない。前半分を聞いてさへ私は喜びにたへないが、どうか残りを聞かせて、私に悟を開かせてくれ。

(羅刹はとぼけて)

わしは、何も知りませんよ。行者さん。わしは腹がへつてをります。あんまりへつたので、つい、うは言が出たかも知れないが、わしには何も覺えがないのです。

(一そうけんそんなして) 私はお前の弟子にならう、終生の弟子にならう。どうか残りを教へて頂きたい。

(首をふつて) だめだ、行者さん。お前は自分のことばかり考へて人の腹のへつてゐることを考へてくれない。

修 一體お前は何をたべるのか。

羅 びつくりしちやいけませんよ。わしのたべ物といふのはね、行者さん、人間の生肉、それからのみ物といふのが人間の生き血さ。(といつて舌をなめずる)

修 (おちついて) よろしい。あの言葉の残りを聞かう。さうしたら、私の體をお前にやつてもよい。



羅 えつ。たつた二文句ですよ。二文句と、行者さんの體と取りかへてもよいといふのですかい。  
 修 (どこまでも眞劍に) どうせ死ぬべき此の體を捨て、永久の命を得ようといふのだ。何で此の身が  
 惜しからう。

(といふとすぐ着て居た鹿の皮をぬいで地上に敷き)

修 さあ、これへおすわり下さい、謹しんで佛の御言葉を承りませう。

羅 (座について、美しい聲で)

有爲の奥山今日越えて、

浅き夢見じ酔ひもせず。(と歌ふやうに言ふ)

たつたこれだけですがね、行者さん。でも、お約束だから、そろ／＼ごちそうになりませうかな。

(といつて、ぎよろりと目を光らせる)

修 (うつとりとして前の言葉を口の中でくりかへし)

生死を超越してしまへば、もう浅はかな夢も迷もない。そこにはほんたうの悟の境地がある。(とう  
 れしさうな様子をし)

あゝ、此の喜びをあまねく世に分つて、人間を救はねばならぬ。(といつてあたりの石や木の幹に今  
 の言葉を書きつけては讀む)

色はにほへど散りぬるを、

我が世たれぞ常ならむ。

有爲の奥山今日越えて、

浅き夢見じ、酔ひもせず。

(書き終ると、すぐ手近の木の枝—机の上—へ登り)

一言半句の教のために、此の身を捨てて我を見よ。

(といつて舞臺裏へ飛びおる。音だけきかせ同時に妙なる樂の音をレコードにて出す。其の間  
 に羅刹と修行者は大急ぎで仕度し、帝釋天は釋迦を連れてうや／＼しく中央に坐らせる。

此の時音樂は高潮して諸の尊者、多くの天人たちがまはりから登場して修行者の足下にひれ伏し  
 て禮拜する)

莊嚴極まる光景を見せて——(幕)——



## 第十八 歐洲めぐり

印度渡りの古代思想から、場面忽ち一轉、近代文化も目まぐるしい歐洲めぐりの壯途へ上る事と成つた。前巻で印度洋を越えてスエズ運河を経た讀者は、必然歐洲の國々へと足を運ばねばなるまい。

前半には世界的大都ロンドン・パリ兩都の特徴を語つて餘す所無く、筆致も亦頗る明るく印象的であり、場面が急テンポで轉換する様は恰も映畫のスクリーンを観るの感がある。

後半のイタリヤでは前半兩都の印象記と趣を異にし、其の語るところ頗る親善的である。固より昨昭和十二年締結された兩國間の防共協定以前から、國民の趣味なり風土なりに相通するものがあり、互に國境を越えて相親むものが有つた。今日ではそれが一層顯著で交情の密なる眞に涙ぐましいものがある。

獨逸に至つては更に國防精神に於て我が國と一脈相通するものがあり、防共協定と共に水魚も唯ならぬ國際的關係を結ぶに至つた。勿論本課の日伊・日獨の親善關係は、特に新讀本の爲に作られたものではあるまいが、此の際それが如何にもびつたりする。黒シャツの青年・ヒトラー青少年團・かぎ十字の腕章（ハーケンクロイツ）等、讀むからに胸の高鳴を覺える。地理的教材であると共に文學的作品でもあり、各國の特徴を對照し得て興味深く、殊に親善關係を促進する上に重要な役目を果たすであらう。

結びの「荒城の月」は土井晩翠の作詩、作曲は瀧廉太郎に成り、明治卅一・二年頃（作曲者が廿一歳の頃）發表の名曲で、同氏は此の作曲後間もなくドイツに留學し大に其の天分を歌はれたが、惜しい哉明治卅六年廿五歳で夭折した音楽の鬼才であつた。大分縣竹田町出身、日本獨唱曲最初の傑作として有名であり、現在でも盛に愛唱されて居る。

## 挿畫の印象と其の説明

ロンドン市を貫通するテムス河のロンドン橋を北方へ渡ると、直ぐに世界經濟の中心地たるブロード街に出る。百十八頁の寫眞は其の中心を成す國立イギリス銀行前の廣場である。正面がイギリス銀行・之と相對立するのが市長官邸、其の東に取引所があり何れも大建築である。銀行前の廣場には靛型の馬車が動いて居たり、屋根の高い頗る舊型の自動車走つて居るのを見ると、恐らく十數年前の寫眞に違ひない。現在はまだ繁華で目が廻る様である。

百十九頁は前に言ふテムス河のロンドン橋を少し溯つて第五番目のウェストミンスター橋を渡つた河畔に聳える世界的大建築として有名な國會議事堂である。チェードル・ゴシツク様式の五層建築で、立憲政治の歴史の最も古い國だけに議事堂の歴史も古く西曆一八四〇年に起工し十二年の歲月を要して完成して居る。建坪實に五二六八坪、其の高い塔から打鳴らされる鐘の音は霧深きロンドン全市に鳴響き、クリスマス當夜には我が國に迄再三ラヂオに依り中繼放送されたのは人の知る所である。

百二十頁の寫眞は國會議事堂の西に隣して建てられるウェストミンスター寺院の大建築である。前に言ふウェストミンスター橋の上から眺めると、國會議事堂と同寺院の二つの大建築が重なつて實に一大美觀を呈する。英國代々の皇帝・皇后・皇妃を始め大政治家や將軍或は大學者・大藝術家等の國家的大人物が此の會堂で葬儀を挙げられ、然もそれが無上の榮譽とされる。會堂の屋根の高さは三七米、寫眞に見える表側の塔の高さは七五米、全會堂の長さ一七一米といふ壯大さである。

百二十二頁の寫眞は巴里市の中心地セーヌ河畔のコンコルド廣場である。コンコルド廣場と言へば直ぐ思ひ出すのはフランス大革命に於て西曆一七九三年一月廿一日、ルイ十六世が同廣場でギロチン斷頭臺の露と消えたのを始めとして、ジロンド黨數千名が處刑された血腥い思出の地であると共に、封建時代のフランス



を轉覆し現代の共和制誕生の記念の地でもある事である。廣場の周圍には諸官衙が連なり、東方に接してチ  
ユイレリー公園・西方に接して美術館・美術展覽會場等が肩を並べ、セイヌ河を挟んで對岸に國會議事堂が  
望まれる。

百二十四頁は世界的に有名な巴里のエトアール凱旋門である。コンコルド廣場を西にシャンゼリゼー街を  
二軒許り行くと、放射線街の中心を成す廣場に突兀として此の凱旋門がある。西曆一八〇六年ナポレオン一  
世の命を奉じて、建築家のシャングランが之を設計し、一八三六年竣工を告げて居る。高さ四九、五五米、横  
幅四四・八二米、奥行二二・一米の矩形の中央に大きなアーチが開き、當代の名匠の彫刻が刻まれ一大美觀  
を呈する。中にもリユードが彫つた、出陣“は世界的名彫刻として知られる。世界大戦後祖國の爲戦死した  
無名戦歿者の墓がアーチの下に設けられ、巴里を訪ふ國賓は必ず公式に參拜するを儀禮とする。毎年の觀兵  
式も此の凱旋門を中心として行はれる。凱旋門の左方壁面に見える彫刻がリユードの傑作、出陣“であり、  
左方がコルト作、ナポレオンアポテオジー“と稱する名作である。

百二十六頁の寫眞は伊太利北部の大都ミランに在る世界的の大伽藍ミラン大寺院の夜景である。此の大伽  
藍は一三八六年に起工・一五七七年に完成といふ長期に互り念入りに建築され、其の外觀は一見してローマ  
の影響を受けた事が明かである。全體の構造は白大理石を用ひてあり、甚だ華麗なものである。其の屋上高  
く突出した小尖塔も壯觀だが、外壁に多くの人像が配され、夫々立派な作品として裝飾的效果を充分に發揮  
して居る。殊に此の寫眞の如く夜間イルミネーションで照明されると、燦然一大寶石の如き盛觀を呈する。

百二十七頁の寫眞はナポリ市街とナポリ灣の風光である。嘗てはナポリ王國の首都で有つたが、今は伊太  
利に屬し三大都市の一と成つた。伊太利を訪問する者は必ず一度はナポリに遊んで其の繪の如き風光を讚美  
し、年中氣候溫和の爲思はず長逗留をして仕舞ふと言はれる。ナポリ灣を距て、白煙を吐く山が名高いヴェ  
スヴィオ火山である。人口に於ても實に九十八萬一千を數へ、總てローマ・ミラノの兩大都を凌ぐかの感が

ある。

百三十一頁の寫眞版はヒトラー・ユーゲント(獨逸青少年團)の行進である。其の颯爽たる雄姿は恰も本  
年(昭和十三年)八月日本にも來朝してお馴染であらう。肩に擔いだのはナチス黨旗で卍字を逆にしたハー  
ケンクロイツの徽章は殆ど獨逸全土に國旗として尊重されて居り、其の左腕にもハーケンクロイツ(かぎ十  
字即ち左卍)の腕章が見える。

百三十三頁の寫眞はベルリン市の中央部にある國會議事堂附近で、飛行機上より撮影した鳥瞰寫眞である。  
寫眞の中央に見える最も大きな建物が國會議事堂で、其の横に流れる川はベルリンシュパンダウ水路運河。  
此の種の運河はハーフェル湖とテゲル湖及シュプレー河を連結して縦横に開鑿されて居る。議事堂前の廣場  
は公園で、薔薇園と稱する一大公園の一部を見せて居る。

文字語句

新出文字

邸 則 衆 彫 疾 覽 弊

讀替文字

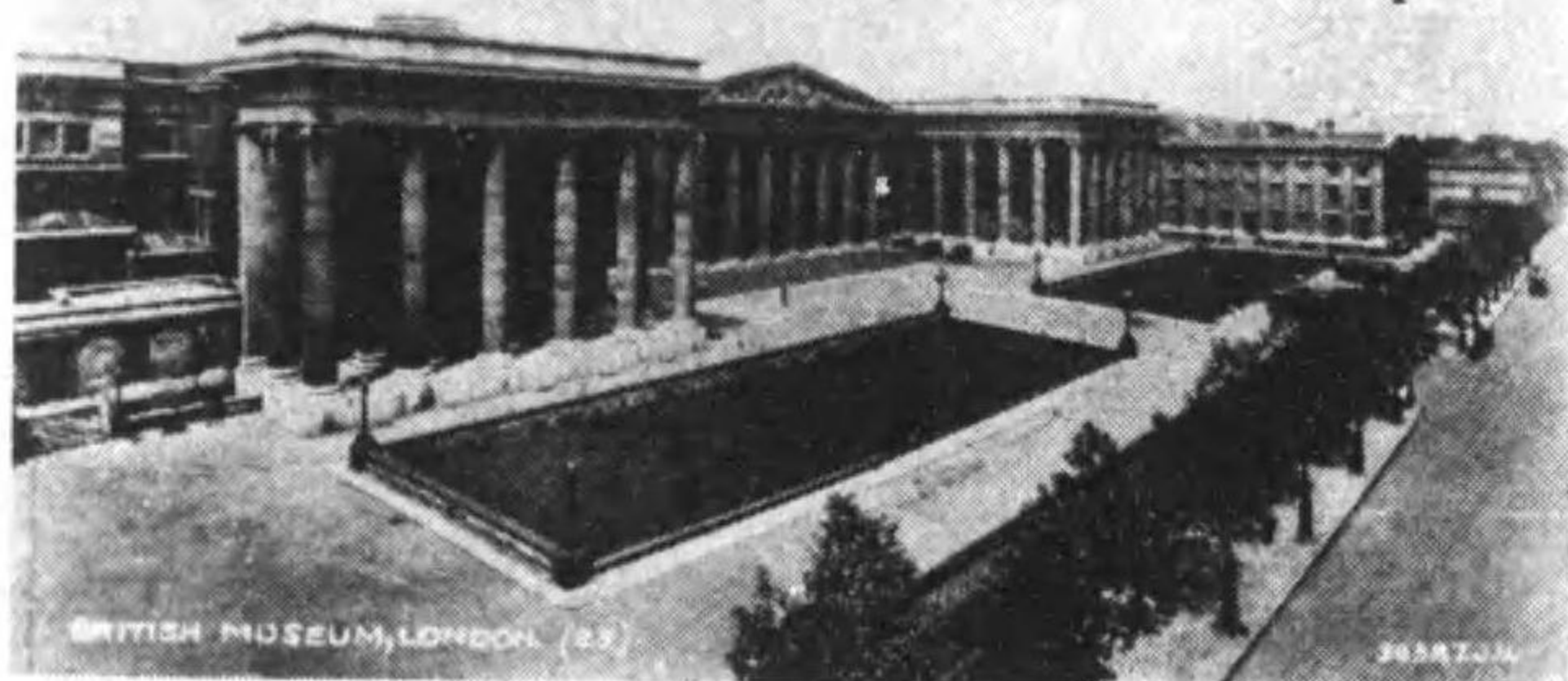
驅(新出は卷十、カル) 跡(新出は卷十一、アト) 疲(新出は卷八、ツカレ) 主(新出は卷四、マシ)  
由(新出は卷六、イウ) 腕(新出は卷七、ウデ) 力(新出は卷三、チカラ)

語句と其の解説

ロンドン 又ランダン。大英帝國の首府。大ブリテン島の東南部に位し、テムズ河の最下流に跨る。世界  
第三の都會、大英帝國商業の中心、アングロサクソン文化の中樞であると共に世界交通・貿易・金融の一大



中心地。ロンドンには(1)狭義には歴史的の倫敦、即ち現在のシティーで面積約二・七平方軒の地域を指す(2)普通所謂ロンドンは面積約三〇〇平方軒、人口約四四〇萬、シティー及ウエストミンスター市其の他



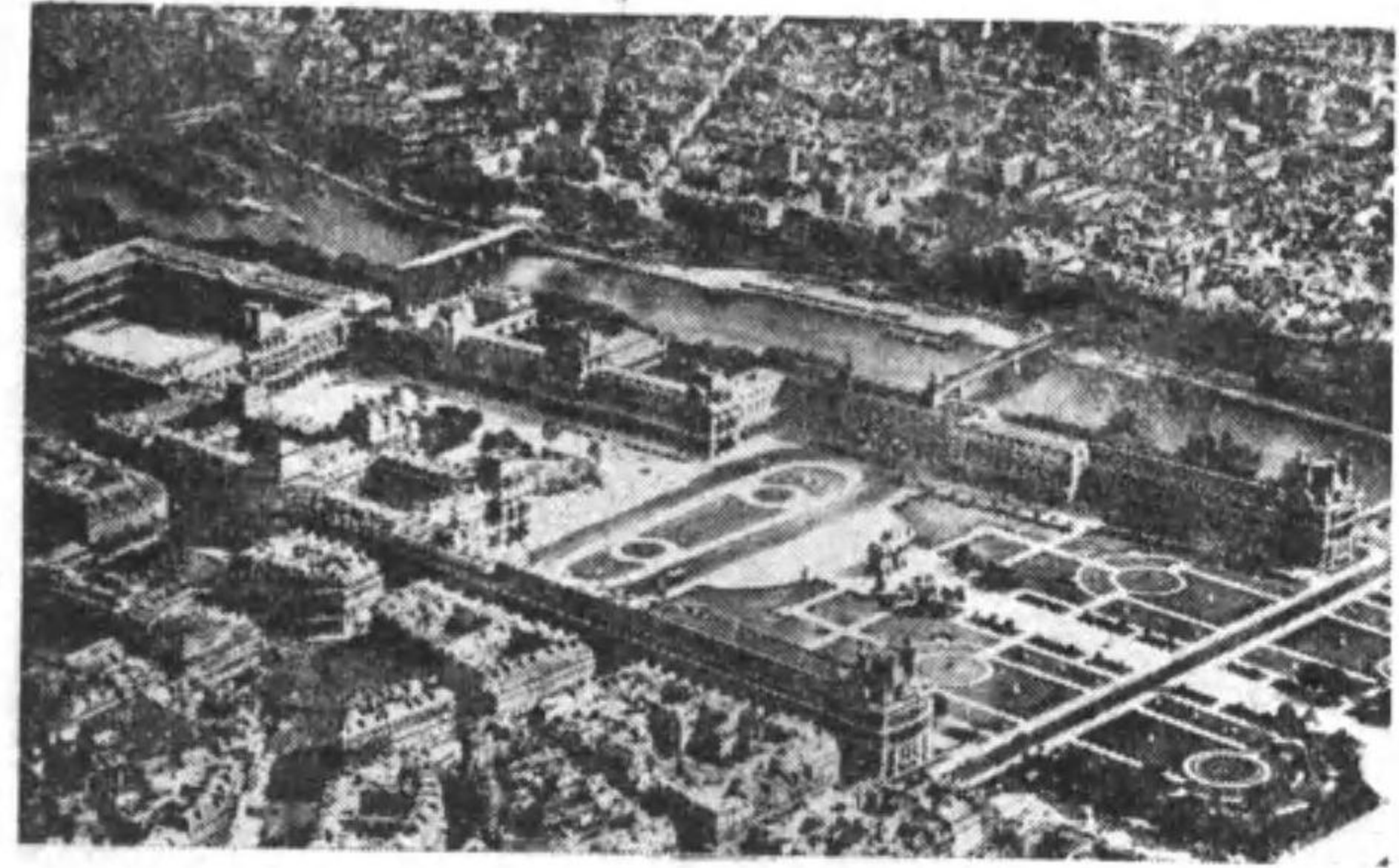
大英博物館

二七區より成る。(3)尙隣接地を合して大ロンドンと呼ぶ場合は面積約一、八〇〇平方軒、人口八四〇萬一千、世界最大の都會と成る。シティー ロンドンはテムズ河を挟み市の大部は左岸にあり、ウオータールー橋・倫敦橋・塔橋(タワーブリッジ)等の橋梁と地下鐵道等に依り右岸と連絡。左岸の最古のシティーは商業の中心、ロンバード街には古來大銀行櫛比、其の末端の交叉點には英蘭銀行、株式取引所が相並んで世界スターリングブロックを統率、其の他傳統に誇るルドホール・セントポール寺・市長公邸・リンカーンズイン及倫敦塔の史蹟等がある。大英博物館を始め(ダイエイハクブツクワンヲハジメ) ロンドンは大英博物館・倫敦大學・ロイヤルソサイエティーの他、グイクトリアアンドアルバート博物館・自然科學博物館・王立美術院(ロイヤルアカデミー)セントバートンロミュー病院等に依り歴史的な學藝都市でもある。テムス河のほとり(テームスガノホトリ) シティーの西隣ウエストミンスター市は政廳區域とも言ふべく、バッキンガム宮殿・セントジェイムズ宮殿・國會議事堂やダウニング街を中心と

する内閣諸官廳・首相官邸の他にウエストミンスター寺は對岸のカンタベリー大監督邸たるランベス宮殿と相對して英國宗教を支配、又中軸のピカデリー街は行人雜間の殷盛な街路で、老舗並び新舊ボンド街やリジエント街に通じ、此の一帶をウエストエンドと俗稱する。ロンドンとウエストミンスター市とは同じ大ロンドンではあるが、互に市たる名を失はず、二市二十七市區が各獨立性を保つて居るのも面白い。イギリスが生んだ(イギリスガウンダ) ウエストミンスター寺院は聖ペテロの僧院ともいひ、代々戴冠式も此の會堂で行はれ、世々の王后も爰に葬祀・英國の誇とする著名の政治家・軍人・學者・詩人・文學者等の墓碑もある。政治家ではグラットストーン・老ヒット・少ヒット・學者ではニュートンを始めとし、海王星の發見者アダムス、進化論のダーウイン、作曲家のオルランドギボンズ、文學史を飾るアチソン・マコーレー・ミルトン・ウオーツウオース・マッシュュー・アーノルド・チャールスキングスリ・サッカーレー・スコット・ラスキン・オリヴァー・ゴールドスミス・シェークスピア・テニソン・スペンサー・ブラウニング・ロングフエロー・ドライデン等の文豪や詩人、王侯ではエドワード一世を始め、エドワードコンフエツサー・リチャード二世・エドワード三世・リチャールズ二世・チャールズ二世・ウィリアム三世・ヘンリー七世・ジェームス一世・ジョージ二世・女帝エリザベス・メリー一世等の墓があり記念碑があり彫像がある。大小の公園(ダイセウノコウエン) 重要な公園としてはリジエツ公園・ウイクトリア公園・ハイド公園・ケンシントン公園・セントジェイムズ公園・バタシー公園・キュー植物園・リツチモンド公園・ハムステッドヒース等の外、グリニヂ公園の天文臺・ウインブルドン公園のテニスコート等が著名である。パリイ フランスの首府。パリ盆地の中心に位してセーヌ河に臨み、北緯四八度五〇分一秒、東經二度二〇分一四秒に在る。他國の主府より政治・經濟・文化の中心性が強い。又藝術・遊覽都市として世界第一、且つ流行の一大中心として永く世界の文化を支配して來た。現在人口二八九萬一千(大巴里は三八〇萬)人口の變遷は一三〇〇年頃一二萬、一六〇〇年頃二〇萬、一七〇〇年頃五〇萬、一八〇〇年頃六〇萬、一八五〇年一〇〇萬、一



八八〇年二二〇萬、面積八〇平方軒(大巴里は六〇〇平方軒)周圍の長さ三四軒、街路總延長一、〇〇〇軒。現在の巴里は經濟都市としては世界の貿易に與らぬが内國商業の中樞を成し、工業は大工業よりも小工業著しく發達、餐澤品・美術品・化粧品の製造は世界第一。住民の



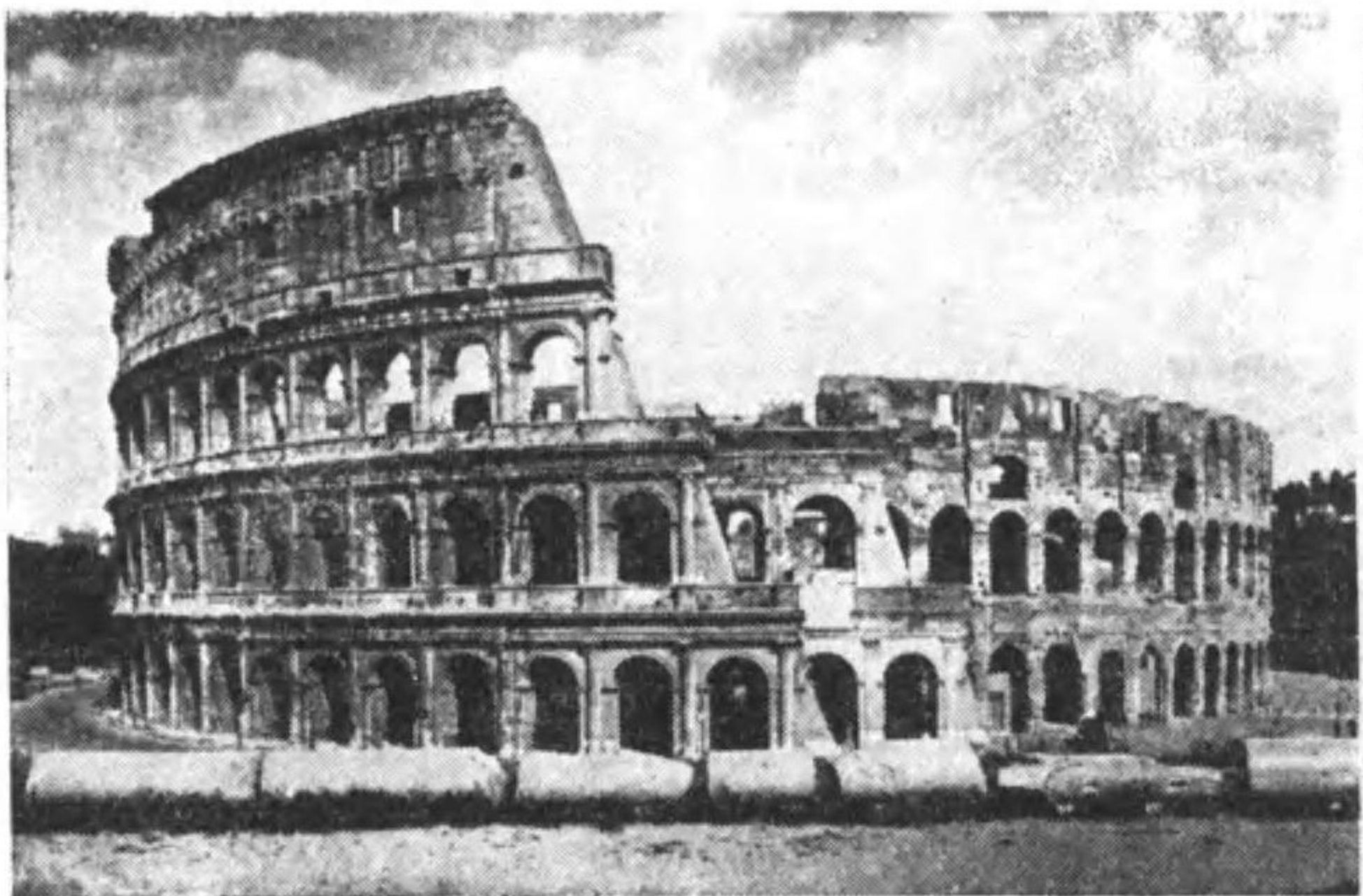
ループル博物館

四分の一は工業に従事、又圖書出版の大自然。街の形態はシテ島を中心とする三重環狀地帯から成り、最内部の固有の市部は華麗なブルヴァール大街路に圍まれて居るが、之は一三七〇年に築かれた城壁をルイ十四世が取拂つて街路にしたもの。第二の環狀地帯は城外の地を含み外方の大街路に圍まれる。此の大街路は一七八四年乃至一七九一年に城壁の設けられた所で、一八六〇年に取拂はれた。第三の環狀地帯は一八五九年巴里に併合された部分で、一八四一年乃至一八四五年に築かれた城壁に圍まれ之も今は破壊され巴里の行政境界を成す。市内の街路は廣く美しく同心圓及放射狀に走り諸所に廣場・花園・宮殿あり、又セーヌ河の架橋も美觀。核心部シテ島の川中島は永い間王室・教會・立法の中心を成した所で、中世の宗教美術の寶玉たる最美のゴシック建築ノートルダム寺院及ナントシヤベル寺院があり、又有名な裁判所もある。本課は主として此の地帯の印象を叙して居る。 **コンコルドの廣場**(コンコルドノビロバ)バリの中心はルーヴル宮にある。南はセーヌの流に

臨み、北はリヴォリ街に接し、東ルーヴル街を正面とする。間口約百七十五米、之と略同じ奥行を以て井桁に圍む三階建の中には方約百二十米の中庭がある。此の宮殿を主體として長さ約四百五十米の兩袖が西へ向つて蜿蜒と連續する厩大なもので、實に帝王后妃十代三百數十年に互る大造營である。此の大宮殿の後庭として西に華麗なテュイレリーの花園が接續する。美しい事と壯大な點に於て世界第一と言はれるコンコルドの廣場は此の花園の西に在る。 **シャンゼリゼーの大通**(シャンゼリゼーノオホドホリ) 之も美しい事に於て世界第一の稱がある。シャンゼリゼーの大通は街路といふよりは寧ろ日比谷公園程のものを長く連ねた大公園といつた方がよい。中央は大河の様な車道で、其處に自動車の潮が後から後からと押寄せせる。車道の兩側に並木道があり、鬱蒼たる街路樹が左右各二列に連續して居る。並木道の外に副車道があり、其の外に廣い歩道がある。此の歩道は木立物古りた庭園を控へ右はガブリエルの大通に續き、左はプティバレー・グランバレーの庭を抱擁して居る。樹蔭にはベンチが並び、諸所に大理石像や銅像が浮いて見える。 **凱旋門**(ガイセンモン) エトアールの廣場に在る。ナポレオン一世が一八〇六年十月に起工し三六年に完成したものである。十二路の集まる廣場の中央に巍然として聳える。ルーヴル宮を起點としてテュイレリーの花園からコンコルドの廣場、更にシャンゼリゼーに連なり、遂に此のエトアールの大凱旋門に達する長さ約三千六百米(約三十二町)の一大美術地帯は、寔にルーヴル宮殿の壯大な後庭であり、此のエトアールの大凱旋門は遙にテュイレリーの小凱旋門と相對して、ルーヴル宮殿への總門たる位置に存在する。巴里の中心がルーヴルに在るといふのも成程と頷かれる。 **ルクサンブル美術館**(ルクサンブルビジュクワン) 國立美術館。ルクサンブル公園内に在つて、其の北の一角に位する。此の美術館に陳列される美術品はやがて(作者の死後十年)ルーヴルへ移るべき國寶であり、従つて十九世紀後半以降、佛蘭西の新美術を代表するものとして世界が此の美術館を重ざる。ルクサンブル美術館と相提携して現代の佛蘭西美術を代表するものにシャンゼリゼーのプティバレー美術館があり、一千八百七十五年以降、年々サロンに出品されたものの中、



市に依つて購入された名作が此處に陳列されて居る。イタリヤ ヨロップ 巴洲南部地中海中央の半島王國。アルプスの南斜面・ポー平原・長靴狀半島及シシリ・サルディニアの諸島より成る。佛瑞・獨・ユゴスラヴィア諸國に接。半島の東はアドリア海、南東はイオニア海に面し、西側はチレニア海・リグリア海に依てサルディニア及佛領コルシカ島を分つ。凡そ北緯三七度から四七度に互り、面積三一萬平方呎。我が本州より稍大。人口四、一一七萬餘、密度我が國に略同。近時エチオピアを併合して國勢大に振ふ。我が國とは防共協定に依り特殊の關係がある。ミランの大寺院(ミランノダイジケン) ミランは又ミラノといひ、北部ロンバルディア州の首都、羅馬に次ぐ大都市。市の核心はツォーモ廣場で此の國最良の大理石造のゴチック式大寺院、即ちミラン大寺院がある。其の他多數の教會・宮殿、著名な博物館・圖書館・スカラ劇場があり、又有名な墓地等がある。人口一〇四萬九千。尖塔(セントタフ) 先端の尖つて居る塔。ゼノア ジェノヴァ。別名をラリシユベルバ(豪華の意)といふ。西北部ジェノヴァ灣頭の商港にして且つ軍港。地中海最古の港の一。市内に古代の大寺院・教會・執政宮其の他の宮殿・大學・美術學校等がある。コロンブス出生の地として知られ、故宅があり記念像が立つて居る。人口六〇萬八千。ローマ イタリヤの首府、且つ法王の居所。ステツプ狀のカンパニア平原に在り、町はテヴェレ河に依り不等の二部に分れる。波狀地形を呈して所謂古代の羅馬七丘、今日では十一丘の上に擴張して居る。丘陵は凝灰岩臺地の浸蝕丘で、バラティノ丘は古代王宮の廢墟、キリナル丘は現在の王宮、セリオ丘には博物館と成つて居るラテラの宮殿があり、アヴェンチノ丘には寺院及農家、エスキリ、丘及ヴィミナル丘は全く市街地と成り、ジアニコロ丘及モンテピンチオ丘は別荘・公園地を成す。ヴァティカノ丘にはヴァティカノ宮殿及サンペトロ寺院がある。古代大羅馬の首府と成り、次で法王の居所と成つて全羅馬舊教國の中心を成し、一八七一年以來統一された王國の首府と成つた。従つて二千年來の古蹟・建造物・藝術品に富むこと世界に比を見ない。セントピーター寺院(セントピータージケン) サンピエトロ寺院をいひ、羅馬カトリック教の大本山。ヴァティカン宮殿に隣し



ローマの遺跡

使徒ペテロの菩提寺。西曆三三〇年コンスタンティヌス大帝の命に依りバジリカ風の會堂が建てられたが、十六世紀に至り、ユリウス一世の時大建築家ブラマンテの進言に依り一五〇六年大工事を開始、彼の死後ラファエロ・サングロ・ジョコンド・ミケランジェロ等の巨匠が關係し一六二六年に竣成、ルネサンスの代表建築と成る。パチカン宮殿(パチカンキユウデン) サンピエトロ寺院と相隣して居る。尙羅馬の略中央に位するクイリナーレ街に面するクイリナーレ宮殿は法王の夏の別荘である。ローマ法王(ローマホフワウ) 羅馬カトリック教會の首長、Popeと云ふ。Popeは父の意。父とは元來教會の監督に對する敬稱であつたが、第五・六世紀以來羅馬教會の權力の伸張に従ひ、其の監督の稱號と成つた。第十二・三世紀時代法王の權力は政教兩界を壓し、帝王の帝王と自稱したが、其の末期には司教制度發達して法王の獨裁權に對抗した。近世に成り政治的權力は制限されたが、宗教的には其の絕對權を主張、ヴァティカン會議(一八七〇年)は之を教義として認めた。昔のローマの遺跡(ムカシノローマノキセキ) クイリナーレ廣場から南に進み、やがて西に向ふと其處に始めて廢墟が街衢の間に散在する。街路から稍下つた地面に半ば折れた圓柱が數列に並ぶのは第二世紀の劈頭トラヤヌ



ス皇帝がダキア人を征服した勝利を記念する爲に建設したと傳へる壯麗なトラヤヌスのフォルムの一部、バジリカウルビア殿堂の名残である。北に接して聳えるトラヤヌス柱は高さ八十八呎の大理石圓柱であり、其の表面の浮彫約二千六百の像形は總て皇帝の軍功を語るもの。此の圓柱の下に彼の皇帝は埋められ、柱頭に高く同じ皇帝の彫像が立つて居たのを後世聖ピエトロの像に代へて仕舞つた。フォロトラヤノの北は一路を隔て、サンタマリアデイロレット・サンノーマイマリアの莊嚴な二つのドームが聳え、西はヴェネチアの廣場に華麗壯大なヴィトリオエンマヌエレ二世の記念碑を仰ぐ。其の南のサンギウセツヘベディファレニヤミ寺院のさゝやかな堂宇の地下にはカルチエルメルチヌスの牢獄があり、殘虐なネロ皇帝の爲に聖ピエトロ・聖パオロが此處に囚れたといふ傳説がある。暗い地下室から出ると直ぐ南に厩然たる廢墟があり、此處彼處に數基の圓柱が並び立ち、其の上に石梁が今にも落ちさうに載つて居る。礎石のみが數列に並んだ所があり、骨組だけ残つた凱旋門がある。廢墟は西へ長く延び殆ど限を知らぬ程で、前面の丘陵にも大建築の廢墟らしいアーチが層々疊々として重なり續き、ローマの史蹟は歩に隨つて現れ低回する能はざるの感がある。

**ナポリ** イタリアの南部、ティレニア海岸に位し、此の國屈指の大都市、且つジェノヴァに次ぐ海港。繁盛なカンパニア地方の首都。ナポリとは新市の意、古代希臘の植民地として名づけられた。又昔のシシリー王國の首府たりし所。鍋狀陥落に依るナポリ灣の北角に位置し、東方に有名なヴェスヴィオ活火山を望み風光明媚の地として世界に知られる。更にボンベイ及ヘルクラネウムの遺蹟を控へる爲外人の來遊する者甚だ多い。

**ロンバルヂヤ平原**(ロンバルヂヤヘイゲン) ポーア河の流域に屬する北イタリアの平原でポー平原とも言はれ、ロンバルヂヤ地方が此の平原の中心地域を成しイタリア中最大の經濟的價值を有する。

**黒シツの青年**(クロシヤツノセイネン) ファッシストイタリアの青年をいつたもの。ムツソリーニに依つて統率されるファッシストは皆黒シヤツを着用する。(別項参照)

**フロレンス** 又フィレンツェ。トスカナ地方の首邑。イタリア第七位の都會。豊饒ナル盆地の山麓地帯、海拔約五〇米に位する。ドイツ及イタリ

ヤから羅馬への要路に當り、且つ北部アベニン越を扼する重要な交通地理的位置を占める爲、中世の終頃にはイタリア及西歐第一流の商工・金融都市と成つた。此の名残として今日尙工藝が發達し、又十數萬の人が麥藁細工に従事。然し市の眞價は豊富な美術品及建築物に在り、又自然と人工の織り成せる風致は國際觀光都市として申分がない。

**ベニス** 又はヴェネチヤ。イタリアの北東部、アドリヤ海の北西隅にある舊都。アドリヤ海に通ずるヴェニス潟湖中にある一一七箇の小島の上に立ち、宛然浮べる樓閣の如く古來「水上の都」といはれる。中世の盛大な貿易港で壯麗な建築物が多く、往時の繁榮が偲ばれる。今は軍港を兼ね、硝石・寶石・レースの産が多い。キウデッカ・サンマルコ・グランデの三大運河は市の主要水路で、此の外約一五〇條の運河に依つて一二〇餘の小島に分れ、三八〇餘の橋梁を架する。市内の交通は主として輕艇ゴンドラに依り、本陸からは長い堤防を通ずる汽車の便がある。主要建物はサンマルコ寺院(市を守護する聖堂で、大理石の大建築。其の前の廣場は市内第一の大廣場で休日には市民を以て埋まるといふ)デュカレ宮(舊政廳)サンジョルジョマジョレ寺・サンマリヤデラサリユー寺・王宮・美術院・圖書館等。唄のゴンドラ、大運河の美觀、夜のヴェニスは異色を以て聞える、人口二五萬六千。

**或驛て停車すると**(アルエキデテイシヤスルト) 此の話は井上越氏の印象紀行に見えて居る。同書に據ると「四時股賑なバドヴァに停車する。ルネッサンス時代にはジオット・ドナテロ・マンテナなどの巨擘が據つて、藝術に重きをなした處だ。更にローマに次いで伊太利半島第二の大都市であつた。どや／＼と私たちのコンバートメントに、四五人の伊太利青年が詰掛けて、席は忽ち一杯になつた。彼等は一齊に私たちを見て「ヤボネ、ヤボネ」と私語いで袖を引合つてゐる。云々とある。勿論附説の要はあるまいが、指導者としては現實感を持たせる上から知つて置く要があらう。

**しどろもどろ** 甚しくしどろなるさまにいふ語。しどろは秩序なく亂れたるさま。とゝのはず打亂れたるさまにいふ。

**今渡りつゝある長橋**(イマワタリツ、アルチャウケウ) 同様に印象紀行に「何時の間にかヴェネチアが刻々として迫りつゝあるのを感じた。遂に二百二十二の橋脚



アーチを連れ、長さ約二哩に及ぶといふ瀉の橋にさしかゝつた。それは恰も我が瀨名湖の今切の鐵橋を思はせるものがあつた。ヴェネチアの市街は唯此の長橋によつてのみ大陸と接觸してゐるのだ。橋の彼方にアラビアンナイトの國の都を思はせるドームや尖塔を持つ所謂水の都が浮んで見えた。云々とある。ベルリン ナチスドイツの首都。且つプロシアの首都。政治・交通・經濟の中心で殊に學術では永年世界の中心を成して來たドイツの核心部。北獨平野の中央、エルベ河支流シュプレー河に跨る。人口の推移は一七四〇年、一〇萬二千、一八四〇年、三二萬三千、一八八〇年、一一〇萬。一九二〇年シャルロテンブルク・シエーネバルク・ノイケルン・シュパンダウ等二〇餘町村を併合して大柏林市を形成。面積八七四平方呎、人口四二四萬三千。住民稀薄な平野から人口の孤立的大集團を作る。カギ十字の腕章(カギジフジノワンシヤウ) ナチス黨の徽章ハーケンクロイツ、即ち左まんじ(卐)を言つたもの。(別項參照)腕章はうでしるし。ナチス黨はヒトラーを始め皆腕に卐の腕章をつける。ヒトラー青少年團(ヒトラーセイセウネンダン) ヒトラーユージュメントをいひ、我が國の青年團・女子青年團に類するナチスドイツの全青少年團をいふ。一九二六年創建。少年・少女に政治的・軍事的教育を授けるを目的とする。廣義のヒトラーユージュメントは四箇の集團より構成され、(1)ヒトラーユージュメント(十四歳から十八歳に至る青年に依り成るもの)(2)ドイツ少年團(十歳から十四歳に至る少年に依り成るもの)(3)ドイツ女子青年團(十四歳から二十一歳に至る女子に依り成るもの)(4)ドイツ少女團(十歳から十四歳に至る少女に依り成るもの)以上四箇の集團は合してヒトラーユージュメントと成り、國家青年總統の下に直屬。全國を二十四の地區に分ち、各地區は更に其の構成人員に應じ、三、〇〇〇名・六〇〇名・一五〇名・一五名と各分團に分れる。教練・労働奉仕・體育運動は其の主なる仕事である。ヒトラー ナチスドイツの總統。ブラウナウ(舊獨塊國境)の税關吏の子。初め藝術家を志したが、兄の失敗の爲一時農業労働者と成り、後ヴァインで圖案家及廣告畫工と成る。塊國ドイツ人の不遇を慨して大ドイツ建設を志し、一九一二年ミュンヘンに赴き、次第に政治



昭和十三年八月十七日  
宮城を拜するヒトラーユージュメント

問題に興味を傾け、ドイツ労働者の民族的協同を志向。マルクス主義とユダヤ人を初めより忌避、國民主義と社會主義とは必ずしも對立すべきもので無いと確信。世界大戰に義勇兵としてバイエルン第十六聯隊に屬し參戰、負傷。一九一八年ドイツ革命當時は衛戍病院に入院、大戰參加の體驗と獨・塊國境のドイツ人として生れた彼の運命とに依つて祖國の政治的悲境を打開すべく、一九一九年國家社會主義ドイツ労働黨を組織して黨首と成り、翌年ミュンヘンに第一回大會、二十五箇條の黨綱領を發表。一方に戰國的な突撃隊を組織。一九二三年十一月ルーデンドルフ將軍と氣脈を通じ、國民革命を企て失敗、五箇年の刑を受け入獄、一箇年で保釋。一九二五年國民社會主義ドイツ労働黨(俗稱ナチス)を再編成、合法的場面に於ける政權獲得を志向し、ユダヤ人排斥・大資本家征伐・ヤング案反對・共産主義撲滅を黨是として、賠償問題・失業問題等に依り財政不安に悩むドイツ人心を獲得。一九三〇年の總選舉には一〇七名の代議士を得て第二黨に躍進、ブリュニンゲ内閣に反對してハルツブルク戦線を組織、ヒンデンブルクと大統領職を争つ



て失敗したが、三六%の投票を得て第二位。一九三二年の總選舉には二二九名を得て第一黨となり、パーベ  
ン・シュライヘル内閣を倒して遂に一九三三年一月ヒンデンブルクより内閣宰相に任命され、ヒトラー内閣  
成立。所謂國民革命を開始し、第三帝國の標語の下に反對政黨を次々に禁止し、又は自發的解消せしめ、  
同三月には議會より立法權を奪取したのを手始めに、州及自由市の獨立權を矢繼早に奪ひ、一九三四年八月大  
統領に任じ、更にドイツ國總統の位置に就き、黨即國家の獨裁權を掌握、ユダヤ人排斥・共產主義打倒・シ  
ユライヘル暗殺等に依つて反ナチス派分子を一掃。外交政策としては國際聯盟を脱退・賠償金拒絶・ザール  
占領・埃國ナチスの煽動・ダンツイヒ進出等、大ドイツの夢を着々と實現。國內的にはヒトラーユーゲント  
の勞働奉仕・輸出統制・教育・新聞等のナチス化等に依つて全く獨裁政治を完成。ゲーリング・ゲッペルス  
等を股肱として國勢隆々、今や世界を壓するの觀がある。 **我々日本人には**(ワレ／＼ニッポンジンニハ)  
日・獨・伊三國の防共協定を暗示して居る。我が國は今やヨーロッパの雄邦ドイツ・イタリヤとがつしり手  
を握り、斷然たる壓力を英・佛・ソ聯は勿論世界の全面に加へて居る。所謂東京・ベルリン・ローマ樞軸が  
即ちそれで、好意を見せるのも當然である。 **或夜、私は**(アルヨ、ワタクシハ)某歸朝者の土産話として昔  
て新聞に見えて居た事實に據つたもの。友邦ドイツの親善振が思はれる。 **旋律**(センリツ)音の週期的抑  
揚。音の抑揚が規則正しく循環すること。節奏。律動。諧調。 **荒城の月**(クラウジヤウノツキ)我が國藝  
術歌曲の代表的なもの。一。明治三十年代の原作ながら今日に至る迄愛唱される。大正末以來藤原義江好ん  
で之を唱ひ一層普及した。土井晚翠作詞、瀧廉太郎作曲。今は山田耕筰改編曲(獨唱曲)徳山璉編曲(三部合唱  
曲)等で行はれる。エルンストブツチェル作曲の變奏曲(ピアノ獨奏曲)もある。(一)春高樓の花の宴、めぐる  
盃影さして、千代の松ヶ枝わは出でし、昔の光今何處。(二)秋陣營の霜の色、鳴き行く雁の數見せて、植うるつ  
るぎに照りそひし、昔の光いま何處。(三)今荒城の夜半の月、替らぬ光たがためぞ、垣に残るはたゞかづら、  
松に歌ふはたゞ嵐。(四)天上影は替らねど、榮枯は移る世の姿、寫さんとてか今も尙、嗚呼荒城の夜半の月。

### 指導精神

英・佛・伊・獨の四國が擧げられて居るが、時代色の反映した點に於て何と言つても獨・伊に生新潑刺た  
るものがある。前の二國と後の二國が對立の情勢にあるのも面白く、殊に防共色の濃厚な點は注目し値する。  
取扱に際しては先づナチスとファシストの大體を心得て置かねばならぬ。

ファシスト即ちファシズムの名稱は伊語ファシショから出で、それは東又は房を意味し、同志の強力な  
結合を表象する。其の使用する徽章は古代羅馬の官吏が用ひた紋章ファッセスを以て表し、斧を繩で巻い  
た束であるが、此の表徴は古代の神聖羅馬帝國の傳統を回想する以外に大した意味は無く、其の本質は一人  
の強力な獨裁者の下に權力國家を實現し、資本主義の統制的維持・存続を計らうとするに在る。従つてファ  
シズムはイタリヤに生れ、ムッソリーニに依つて提唱實現されて居るが、ヒトラー治下のナチスドイツも  
其の他人民の自由を抑壓し強力獨裁の反動政治を主張する諸國政府及政治團體は之を一括してファシズム  
と規定する事が出来る。自由主義乃至共產主義理論が國際的であると同様、ファシズムも國際的である。  
ファシズムは最初ムッソリーニが一九一九年(大正八年)三月ミラノに於て組織したものに始まり、最初  
の黨員は一五〇人に過ぎなかつたが、羅馬進軍の成功(一九二二年十月)後躍進的に擴大、現在のファシス  
チ黨はファシスチ國家を組織、黨即國家である。其の最高機關はファシスチ大議會で、各國の政府に該  
黨、其の主腦は統治の指導者で唯君主に對してのみ責任を有する。一九二八年ムッソリーニは職能議會制度  
を發布、全國を一選舉區として各産業別團體から代議員候補を選挙せしめる制度を採つたが、各團體から選  
出した定員に二倍の代議員候補はファシスチ大會議に依て選擇決定、四〇〇名に制限される故、其の根本  
に於ける獨裁制には變化が無いわけである。國民勞働の基本を指示する勞働憲章(一九二七年發布)は組合  
國家の本質を提唱すると共に産業に對する強力な國家干渉を宣言したもので、勞働の自由・企業の自由は否



定されて産業及労働の國家管理即ちサンディカリズム的色彩を持った統制資本主義の様態を示し、他のファッシズムの統制經濟の典型と成つたのである。

ムッソリーニのファッシズムは一九一九年ミラノに誕生したが、それ以前にイタリアには既にファッショ擡頭の地盤は成熟して居た。イタリアが世界大戰に参加したのは一九一五年五月であつたが、それ迄に參戰・非戰の兩論が激しく闘はされた。ムッソリーニは主戰論者の一人で、其の爲に社會黨を除名され、自ら戰場に立つた。然るに世界大戰の結果イタリアに與へられた物は僅にアフリカの一部であつた爲、參戰軍人の不満は強く、其の結果愛國詩人ダマンチオの一九一九年に於けるフェーメ占領と成つた。戦後の外交交渉に失敗したイタリアは内政に於て國家財政に破綻を生じ、豫算の不均衡・失業者の増大は労働爭議を頻發せしめ、北部イタリアの六〇〇の工場が労働者に占領される等、赤色革命の前夜の觀を呈したが、社會黨の無氣力は政權獲得迄に至らず、中心政權の動搖の爲ニッチ・ギオリッチ・ボノミ・ファクタの諸内閣は相次で倒れ、議會の無力を極端に露呈、爲に大資本家・中産階級・農民階級共に強力政權を渴望。其の機に乗じて或日刊新聞を主宰し愛國主義を宣揚して居たムッソリーニは一九一九年三月ミラノに一團を組織し、反議會主義・反國際主義を標語として次第に勢力を獲得、舊軍人・都市及農村の中産階級の支持に依つて強力な戰闘的集團を組織、佛革命の國家内國家の編成に成功、一九二二年十月の羅馬進軍の以前に既に社會的地盤を獲得、羅馬進軍後も王室をイタリア統一の表象として尊崇した所から軍隊の反抗に遭はず、漸次ファッシズム軍隊と正規軍の接近を計つて黨國家の樹立に成功した。積極的な政治哲學が最初から有つた譯では無く、政治理論・國家哲學・教育理論等は政權奪取に成功した後、黨の理論家達に依つて構成されたもの、茲にファッショ革命の特異性と理論的脆弱性がある。一面之は羅匈系イタリアの國民性に合したファッショ成功の戰術であつたとも見られる。要するに歐洲大戰に依る經濟の破壊とプロレタリアートの進出はブルジョアジーをして恐怖手段・獨裁制を以てプロレタリアートの進出を阻止せしめんとした。之がファッシズム發生

の經濟的根據であつて、彼等は強力を以て破綻に瀕した資本主義を盛り返さんとしたのである。斯くして發生したファッシズムは小ブルジョア・ルンペン・プロレタリア等を手に入れ、更に國權主義者・國粹主義と結んで武力を以てプロレタリアートの發展を阻止し、更に政治上の獨裁を行つた。此の現象は獨リイタリアのみに止らず、資本主義の相對的安定を経て世界恐慌に入ると共に世界的に一種の勢力と成つて來た。一九三〇年に於けるドイツの選舉の結果に依るナチスの勢力擡頭の如きはそれを物語つて居る。之は本來的ファッシズムであるが、社會民主主義は直接間接に此の傾向を助けるものであるとし、第三インターナショナルに屬する諸黨はそれに對して社會ファッシズムなる名稱を附して居る。

次にナチスであるが、ナチス又ナチは國民社會主義ドイツ労働黨の俗稱、社會民主黨のソチに對していふ。ヒトラーに依て一九一九年ミュンヘンに結盟、戦後ドイツの社會不安に乗じ漸次黨勢を擴大、結盟當初七名の黨員に過ぎなかつたが次第に増加し、一九三三年十二月黨と國家の一致確保の法令を發布してからはナチスは即ちドイツ國家を意味し完全な黨國家を具現。黨首ヒトラーはドイツ國家の總統の地位に就き、黨旗ハーケンクロイツはドイツの國旗と成つた。ドイツは世界大戰終末の際に革命起り（一九一八年）帝政は廢せられ共和政治と成つた。然し新國家では比例選舉が行はれた爲に多數の政黨對立し、其の聯合に依つて政治は爲されたが國政安定を缺ぎ國威は振はず、殊に經濟界の不況は人民の不满に堪へぬ所であつた。之に乗じて勢力を伸したのがヒトラーの國粹社會黨即ちナチスで、一九三三年遂に政權を掌握した。之は一國一黨主義で黨の綱領を強制實施せんとし、國粹尊重・國家強化・國利民福の増進を理想とし、外に對しては國威發揚に盡力しヴェルサイユ屈辱條約破棄を計り、既に其の軍事條項の廢棄を行つて軍國として重きを成し、時局に巧に處して着々と國家の地位向上を圖つて居る。然も最近此の兩國は我が國と防共協定を結び、今や日獨伊三國は友邦として世界の赤色ルートを睥睨しつゝあるのは人の知る所である。尙ナチス黨の標章はハーケンクロイツで左萬字(卐)を用ひる。之はヒトラーに依つて初めてナチス黨の黨旗に使用されたが、現



在ではドイツの國旗と成つて居る。サンスクリットのスヴァステイカより出で、我が國の卍と同一起源であるが、卍が左鉤なるに對してハーケンクロイツは右鉤なのが特徴、此の紋様の分布は世界的でヨーロッパは固よりアジアでは印度を始め、支那・日本・マレー半島・ポリネシア群島、アフリカでは西部黄金海岸・コング領域、アメリカではミシシッピ河流域・中米・ブラジル等に見る。タダセム民族中には見ない所から、アリア民族の象徴として反セム運動の旗印と成り、ナチスドイツで猶太人排斥の爲此の象徴が採用されたのださうである。

指導形態

指導上の認識點

- 1 ロンドン・パリ・イタリヤ・ベルリンと歐洲の各地・各都市を巡遊した印象的紀行文に依り、歐羅巴諸國の實狀を知らせ世界的知見を広めると共に、他を見るは自己を省るの言葉通り、祖國及我が帝都東京並に我々の生活態度を内省させ我が國文化の向上に貢献させようと言ふのが本課の指標である。
- 2 形式方面に於ては各國の特徴を巧みな文學的表現に依り變化あり統一あらしめた點を認識せしめ、觀光趣味を養ふと同時に此の種紀行文の好範例たらしめる事も逸すべからざる。

觀點の一である。

- 3 特に現時我が國と防共協定を締結せるイタリヤ及ドイツを之と對立的關係に在るイギリス・フランスに配し、其の緊張せる國情・友朋的な國際情誼に就て椽大の筆を揮ひ、現下の複雑なる國際情勢を暗示した點に着目すべきであらう。
- 4 指導に際しては隨所に本課の挿畫を活用するは勿論、世界及歐羅巴の地圖・各地の寫眞・繪葉書等の利用・並に各國情を物語つた案内記等與へ、具體的・實踐的に學習せしめるを念とせねばならぬ。

第一次指導

- 1 題目の指導。  
▽世界地圖を示して地點を知らせ既習の『歐洲航路』と連繫させて讀心を唆るが良い。
- 2 自由學習。  
▽時間を與へて自力の限りを盡させる。  
ノート作業。  
▽題目毎に讀後の印象や感想を整理して記載させる。
- 3 話合。  
▽前項の印象や感想を自由に話させる。  
不明の箇所を摘出して質問させる。
- 4 新出文字は辭書を繰らせて索引させる。  
弊 則 衆 彫 疾 驅 覽 跡 疲  
弊 主 由 腕 力
- 5 難語句は一應類推させてから適宜に指導す

る。  
がつしり 押すな押すな 心臓 目まぐるしい 交通の難所 不規則 射出 群衆 おびたしい 交通整理 歴史の遺物 世界的名作 繪畫史 前者 後者 政治家 詩人 文學者 發明家 美術的 彫像 壁面 雜沓 自然郷 高樓 よそほひ 三角洲 銳角 分岐點 優麗 噴水 放射 パリー子 疾驅 胸がすく 藝術の都 美術の粹 美術展覽會 歌劇劇場 さきがけ 點出 尖塔 白大理石 大伽藍 新興の意氣 農村疲弊 黒シヤツの青年 由來 すり 乞食 緊張 正しい發音 しどろもどろ 圓屋根 服裝 かぎ十字の腕章 國際飛行 四通八達 疾走 森林地帯 近代科學 力める 満員 食卓 奏樂 樂長 旋律 滿堂を壓して  
▽地名は地圖に依り人物や物名は寫眞其他を利用して入念に指導する。



ロンドン シティー 市長公邸 取引所  
 イギリス銀行 大英博物館 美術館 テ  
 ームス河 國會議事堂 ウェストミン  
 ター寺院 パリール コンコルドの廣場  
 シャンゼリゼイの大通 ナポレオンの凱  
 旋門 ルーブル博物館 ルクサンブル  
 美術館 ミランの大寺院 ゼノア コロ  
 ンブスの家 ローマ セントピーター寺  
 院 ローマ法王 バチカン宮殿 ローマ  
 の遺跡 ナポリ ロンバルヂャ平原 フ  
 ロレンス ベニス ベルリン かぎ十字  
 の腕章 ヒトラー青年團 荒城の月  
 書取。

6 各都市・各場面の印象を書取らせる。  
 挿畫の觀察。

7 順次に觀察させ文に何う出て居るか、其の  
 箇所を書取らせる。

百十八頁 (ロンドンのシティー)  
 百十九頁 (イギリスの國會議事堂)  
 百二十頁 (ウェストミンスター寺院)

百二十三頁 (パリ市街)  
 百二十四頁 (ナポレオンの凱旋門)  
 百二十六頁 (ミランの大寺院)  
 百二十七頁 (ナポリの風光)  
 百三十二頁 (ヒトラー青年團)  
 百三十三頁 (ベルリン市街)

8 低音讀。

9 挿畫や地圖と對照させて。  
 話方。

10 各都の特徴や印象を中心に。  
 指名讀。

11 一場面づゝ、輪讀式に。  
 ノートを整理して提出させる。

**第二次指導**

1 全課を一度靜かに通讀させる。

2 不明の箇所は其の都度質問させる。  
 輪讀。

3 一場面づゝ、座席順に。  
 指名讀。

4 一篇毎に人を代へて。  
 話合。  
 5 讀後の印象を中心に。  
 一篇づゝ逐次に研究させる。

**ロンドン**

シティー街 (ロンドンの心臓)

市長公邸・取引所・イギリス銀行

ロンドン第一の交通の難所

交通整理 (つくぐと感心)

大きな建物

大英博物館を始め大きな博物館や美術館

國會議事堂 (建物の偉觀)

ウェストミンスター寺院 (歴史ゆかしい)

大公園 (至る所)

方敷料 無限の自然

自然郷

**パリ**

美しい大通 (四通八達)

コンコルドの廣場

シャンゼリゼーの大通

▽頃合を見て板書で纏める。  
 (注意) 以下一篇毎に取扱ふのであるが、繁を  
 避けて此處には、其の一つを挙げ他を類推し  
 て頂くことにする。



ナポレオンの凱旋門  
美術の都 (都市の美観を誇る)

ルーブル博物館  
ルクサンブル美術館  
歌劇劇場

流行のさきがけ (パリー子)

イタリヤをめぐりて

日本に似たところが多い

京都や奈良をしのぶやうな古都

ナポリは我が鹿兒島市に似通つてゐる。

名所

ミランの大寺院

コロンプスの家

ローマ

セントピーター寺院

パチカン宮殿

昔のローマの遺跡

フロレンスの古美術

ベニス水の都

今のイタリヤ

新興の意氣にもえてゐる。

6 書取。

▽板書事項を敷衍して書取らせる。

7 一篇毎に文意を掴ませる。

▽ゆつくり黙讀させて。

8 範讀。

▽一篇づゝ範讀して觀點や文意を確める。

9 ノート學習。

▽地圖や挿畫を参照し印象や景觀を手際よく

10 話合。

纏めて記帳させる。

11 低音讀。

▽文意や感想を中心に。

ミラン・ローマ・ナポリは實業都市  
ロンバルヂヤ平原に農村疲弊の聲がない。  
主な停車場には黒シャツ青年が見はる。  
イタリヤの日本語研究  
『ジャポネーゼ、ジャポネーゼ。』

ベルリン

新興の意氣は更にすばらしい。

道行く人も緊張し切つてゐる。

ヒトラー青年團がねり歩く。

紙くづ一つ落ちてゐない。

國際飛行の中心都市 (三分毎に發着する)

日曜は郊外に出かける 近代科學を家庭生活に應用する。

我々日本人には好意を見せてくれる。

荒城の月 (胸がどきめく)



- 12 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

- 1 通讀練習。  
▽各篇を別々に反覆讀誦させる。
- 2 會讀。  
▽ゲループ毎に問題を作製させて。
- 3 指名讀。  
中・劣生を主として。
- 4 演習。  
▽繪葉書や寫眞に地圖や略畫を配して趣味豊かな友達宛の手紙を書かせて見る。
- 5 話方練習。

テスト問題

- 一、次の反對語を書きなさい。
- 1 後者      2 午後      3 發
- 4 適當      5 國內      6 開

- 6 ▽前卷の『歐洲航路』と連絡させて。  
學習事項の整理。
- 7 ▽内容上ではイギリス・フランス・イタリア・ドイツの國狀、形式上では印象的紀行文の様式・構想・措辭等。  
補充説話。  
▽東京・ローマ・ベルリン樞軸、ファッション・ナチス等に就き。
- 8 朗讀練習。
- 9 視寫・聽寫練習。
- 10 暗誦・暗寫練習。
- 11 新出文字の書取。
- 12 語句の應用練習。
- 13 テスト。

- 7 模型      8 不規則      9 散
- 10 勉強
- 二、次の括弧中の語句の正しい方を残し他を消し

なさい。

- 1 テームス河のほとりに堂々たる國會議事堂があり、此其の近くにウエストミンスター寺院がある。建物の偉觀は前者にあらうが、歴史ゆかしいのは後者である。
- 2 あらゆる流行のさきがけをするのも、またベルリン  
ローリン  
マだといはれてゐる。

- 3 道行く人は、男も女も緊張し出してゐる。きちんとした服裝が先づそれを物語る。
- 三、次の書取をしなさい。

- 1 ガイロ      2 シンザウ      3 セイリ
- 4 キブツ      5 テンランクワイ
- 6 ビクワン      7 シック      8 ワンシヤウ
- 9 ヒヘイ      10 フクソウ



第十九 リヤ王

曩に第九の『末廣がり』では我が國に發達した純粹對話劇とも言ふべき能狂言が提出され、本課では本格的な戯曲文學が初めて現れた。茲に於て兒童の文學的鑑賞も横に擴充された譯である。

言ふ迄もなく本課は世界の文豪シェークスピアの傑作の一端を窺はせると同時に、内容的にはリヤ王父子の情愛に共感させ、眞實・眞情の價値を暗示して劇文學を味はせようといふ、一石二鳥の意圖に出たもので、其の巧妙な編纂技巧が先づ讀者の興味を唆る。

リヤ王が初演されたのは西曆一六〇六年十二月廿六日で、今を去ること實に三百三十餘年の昔の事であるが、其の時代から沙翁四大悲劇の一に數へられ、悲劇として最高の傑作と賞讃された。各國の國語にも翻譯され我が國ではシェクスピア劇紹介の恩人坪内逍遙博士の邦譯に依つて廣く愛讀され、日本の舞臺に脚光を浴びた事も屢々である。

挿畫の印象と其の説明

百三十八頁の挿畫はリヤ王劇の舞臺面で、玉座を圍む三王女と近臣達、今しも老王が末の王女コーデリヤに問ひ掛ける場面、膝の上には領土の地圖が擡げられて居る。

百五十頁はコーデリヤが發狂した父王を其のベッドに慰める場面、父子諸共悲歎の涙に暮れる此の劇のクライマックスである。コーデリヤの側に立つて居るのは侍醫、左側に半身を見せて居るのは近侍であらう。此の場面は畫家ジョーイの描いた沙翁劇の原圖に據つたもので、それと對照して見ると興趣更に深いものがある。

第十九 リヤ王

文字語句

新出文字

齡 域 劣(オトリ) 避(サケ) 判 賢 介 悔

讀替文字

惠(新出は卷六、メグミ) 値(新出は卷十一、チ) 斷(新出は本卷、タツ)  
許(新出は卷六、ユルシ) 后(新出は本卷、コウ) 額(新出は本卷、ガク)  
損(新出は卷七、ソン) 皮(新出は卷五、カハ) 閉(新出は卷五、トデル)  
照(新出は卷五、テル) 雷(新出は卷五、カミナリ) 探(新出は卷七、サグル)  
狂(新出は卷七、クルフ) 抱(新出は卷六、ダク) 思(新出は卷三、オモヒ)

語句と其の解説

リヤ王(リヤワウ) 沙翁四大悲劇の一。五幕物で一六〇二年のフォリオ版のある所から見れば、作られたのはそれ以前の事であらう。リヤ王にはアルバニー公爵の妻ゴネリルとコーンウォール公爵の妻リガンと處女のコーデリヤの三人の娘があつたが、年老いた爲娘達に領土を分配しようとした時、姉の二人は甘言で王の心に入つたが、二人の姉よりも父を愛して居た妹は僞らずに自分の心持を語つた爲に父の怒に會ひフランス王の妻と成つて去る。父から領土を分けて貰つた二人の姉は次第に本性を現して父を虐待し、終には嵐の中へ追出して仕舞ふ。哀れな老王は嵐の荒野をさまよひ、果ては怪しげな歌などを歌ふ狂人に成つてさすらひ歩く。コーデリヤは不孝な姉を懲しめようとフランスから軍勢を率ゐて來たが、今は不義の戀にさへ耽る姉達の爲に却つて戦に敗れ、捕へられて殺されて仕舞ふ。リヤ王も亦何時も忠實に従つて哭れたケンント伯爵





沙翁のリヤ王劇 (ジョーイ原圖)

る家。旅館。やどや しり押(シリオシ) そかに煽動すること。又は其の人。こしおし。

の顔さへ見分がつかず、狂ひ乍ら不幸な一生を終るといふのが其の梗概、坪内逍遙の譯がある。 **高齡(カウレイ)** 高きよはひ。としより。老年。高年。 **恩惠(オンケイ)** めぐみ。なまけ。恩に同じ。 **おいとしく** いとしくの敬。氣の毒である。あはれである。ふびんである。いたはしい。いとほしい。 **境域(キヤウキキ)** 土地のさかひ。又は其のひろさ。境界。 **犠牲(ギセイ)** 神に供へる生き乍らの畜類。いけにへ。轉じて他人の爲に己を顧みぬこと。ひとみごくう。 **餘生(ヨセイ)** あまりのいのち。のこりのいのち。おひさき。餘命。餘齡。 **婚約(コンヤク)** 結婚の約束をすること。 **持參金(チサンキン)** 結婚の時里から縁家へ持つて行く金。 **勸懲(カンダウ)** 罪を勸考して律に當てること。尊長の旨に悖つて縁を絶たれ返はれること。勸氣に同じ。 **無作法千萬(ブサホフセンバン)** 極めて無作法なこと。無作法は作法の正しくないこと。ぶしつけないこと。無禮に同じ。千萬は度の甚しいさまにいふ語。いたり。しごく。 **はたご屋(ハタゴヤ)** 旅籠屋。旅人を宿し又は其の食事を取りまかなふを業とするしるから人の尻を押すこと。かげで助勢すること。ひ **皮肉(ヒニク)** 鋭く骨身にこたへる様な非難。遠まはし

意地のわるい非難をすること。 **後悔先に立たず(コウクワイスキニタズ)** 後悔先に立たず提灯持は

後に立たずの諺に出で、事後に悔いても役に立たぬの意。後悔と槍持は前に立たずの諺もある。

**飼犬に手をかまれ(カヒイヌニテヲカマレ)** 我が眷顧を與へたものに却て害を被るの意を含めた諺。

**御照覽(ゴセウラン)** 照覽の敬。照しみること。神佛が明に御覽になること。みそなはすこと。 **瀧つ瀬(タキツセ)** たきに同じ。 **つんざけ** つんざくは突き裂き破る。強く破る。つきさく。 **ぎやく待(ギヤクタイ)** 虐待。殘酷に待遇すること。ひどくあたること。むごいもてなし。 **探知(タンチ)** さぐり

知ること。かぎつけること。偵知。 **發狂(ハツキヤウ)** 氣ちがひになること。氣が狂ふこと。 **侍醫(ジイ)** 君側に侍る醫者。おそばいしや。 **はためく雷(ハタメクイカツチ)** はためくは雷などが轟きわたること。鳴り響く。はたたく。霹靂に同じ。 **御亂心(ゴランシン)** 亂心の敬。心の狂亂すること。ものぐるひ。さちがひ。狂氣。 **御本復(ゴホンブク)** 本腹の敬。病氣のなほること。平癒。平復。全快。

資料

原 據

リヤ王 (坪内逍遙譯)

リヤ 此間に其方達のまだ存せぬ内密の旨意を申聞かさう。……地圖を持って。……まづ我王國をば三つに分けた。余も高齡に相成つたによつて、すべて面倒な政治上の用向は悉く若い強健な者共に委ねて、身輕になり、靜かに死の近づくのを俟うといふ決心ぢや。……我愛子ゴオンノール。……また子たるの愛に於ては少しも劣ることのないアルバニー公爵、余は今日只今、化粧料として副遺すべき娘共の所領を公けに致さうと存ずる。然るは今にして永く未來の争根を絶たためぢや。フランス王とバアガンデーの公爵とは末姫コオデリヤの愛に對する競争者となつて、其戀を遂げうために久しう此の宮中に逗留せられた、其の



返辭もまた今日の管ぢや。……女どもよ、今や余は、支配をも、所領をも、國事に關する心勞をも悉く脱ぎ棄て、しまはうと存ずるによつて、聞かせてくれ。其方達のうちで誰れが最も深く予を愛してをるかを、眞に孝行の徳ある者に最大の恩恵を與へようと思ふ。……長女ゴネリルから申せ。

ゴネリ 父上、わらは、口で申し得らるゝより以上にあなたをば愛します。目よりも、空間よりも、自由よりも、貴き又は稀なるありとある價あるもの以上に、命よりも以上に、威嚴や健康や美や名譽の添つた生命以上に父上をば愛します。子の曾て獻げ、父の曾て受ける限りの愛を以て。……息をも乏しからしめ、語をも不能ならしむる愛を以て、恰どそれはどの、ありとあらゆる愛以上にあなたを愛します。

コオデ (傍白) コオデリヤは何とせうぞ？……心で愛して黙つてみよう。

リヤ (地圖を指し) 此の線より此の線まで、爵翁たる森林と豊饒なる平野、魚に富める河々と裾廣き牧場とを有する、此の境域一圓の領主とそなたをする。これはそなたとアルバニーとの子々孫々にまで永久の財産ぢや。……さて余が最愛の二女リガン、コオンソールの奥方は何といはるゝな？

リガン わたくしも姉上と同じ心でございます。姉上と同様におぼしめして下さいまし。眞實わたくしが思つてをる通りを姉上がおつしやるのでございます。只少しおつしやり足りませんばかり。わたくしは、最も大切な感覺の、ありとあらゆる歡樂をも仇敵と斥け、只一へに陛下を愛敬し奉るのを幸福と思つてをりまする。

コオデ (傍白) で此のコオデリヤは！……いや、何にもいふまい、連も此の心は舌でいはれるやうな軽いものでないから。

リヤ これがそなた及びそなたの子孫の世襲の財産ぢや、我が美なる王國の此の豊かな三分の一は。……廣さに於ても、價格に於ても其の樂しきに於てもゴネリルに遣いたのに少しも劣らん。さて、末でもあり、ちびでもあり、予の秘藏子、フランスの葡萄もバアガンデーの乳も夢中になつて戀しがつてをるコオデリヤ

よ。姉たちのよりも一段豊かな三分の一を貰ふために、そなたは何様なことをいふぞ？ 申せ。

コオデ 何にもいふことはございません。

リヤ なんにも？

コオデ はい、なんにも。

リヤ なんにもないところからは何にも生れん。改めて申せ。

コオデ わたくしは、不仕合せなことには、心にある事を口に出すことが出来ません。わたくしは義務相當にあなたを愛します。それより多くもなく、少なくもなく。

リヤ どうしたのぢや、コオデリヤ？ いひかたを繕はんと身の爲になるまいぞよ。

コオデ 父上さま、あなたは私を生んで、育て、かはゆがつて下さいましたから、そのお禮に正當な子たる者の義務だけは盡します。命令を守ります、愛しもし、敬ひもします。……何故に姉上がたは夫をお迎へなされましたか、眞實あなたばかりをお愛しになるなら？ 恐らく私は、もし婚禮すれば眞實に事へねばならぬ夫の爲に、愛をも心づかひをも勤めをも半分は傾けねばなるまいと存じます。父上ばかりを愛さうと思つたら、私は決して姉上がたのやうに結婚はいたしませんまい。

リヤ それは本心でいふのか？

コオデ はい、本心でございます。

リヤ 幼少でありながら、さほどまでやさしげの無い？

コオデ 幼少であつても、申すことは眞實でございます。

リヤ 勝手にせい。なりや其の眞實を持參金にしをるがよい。太陽の聖き光をも、ヒケートの神祕をも、夜の闇をも、人間が生死の因たるあらゆる天體の作用をも誓にかけて、予はこゝに、父たる心づかひをも、近親たることをも血族たることをも抛棄て、今日より永久に汝をば勘當する。殘忍野蠻のおのが食慾を壓か



す爲に實の子をも食ふといふ彼のシ、セ人をも友達ともして、憐みいよはつたはうがましぢやわい。昨日までは女であつた汝をばいたはり憐むよりは。(以下略)

### 指導精神

リヤ王はシェイクスピアの四大悲劇の一で、ハムレット・オセロ・マクベスと共に普く世に知られて居る。蓋し世界的名著の一つ位は知らせて置き度いといふ意圖に出たものであらう。劇の筋は主人公の老王リヤは孝女のコーデリアを憎み、却つて不孝の娘達に逐はれ、嵐の中を彷徨し、今はフランス王妃たるコーデリアに救はれる。後コーデリア牢中に死するや自らも死す。事ジョフリーの古英史に出で、又ホリンシェットの編年史にも出づ。スベンサーも *Fairie Queene* の第二巻に用ひた。元はケルト傳説の海の神リア魔女と婚し、其の娘等を白鳥に變へられ、白鳥は基督教の最初の鐘の鳴る迄アイルランドの海に漂ふべしとあるに據る。ホリンシェットの編年史にはイギリスのブリティンにリヤといふ王があつた。年が老いて國政を執ること困難と成り、三人の娘に領地を分け自分は娘の領地を廻つて餘生を送らうと考へた。娘はゴネリル・リガン・コーデリアの三人であつた。リヤ王は領地を分け與へる際三人の孝心を試さうとして、『そち達三人の中で誰が一番父を愛するが、孝心深い者に一番良い土地を與へよう。姉から順々に言つて見よ。』と命じた。二人の姉は心にも無い上手な口を利いて良い土地を得ようとした。けれどもコーデリアは無口であつた。殊に姉二人が心にも無いことを言ふのを聞いて、慙と『私は子としての義務を盡します。』といふのみであつた。父王は怒つて領地全部を二人の姉に與へて仕舞つた。其の上二人の姉をアルバニー及びコホンオールの兩公爵家に嫁がせた。然し捨てる神あれば拾ふ神あり、コーデリアはガリヤ(今のフランス)王アガニッパスに救はれ、ガリヤの王妃と成つた。ガリヤ王はコーデリアの純眞な優しさを喜び、二人の姉よりも孝心深い娘である事を知つて居た。

リヤ王は其の後二人の娘の所へ行つた。素より心の良くない二人は父王を苦しめた。其の上二公爵は兵を出してリヤ王を討ち王權全部を取つて仕舞つた。さうして約束の扶持も呉れなく成つた。リヤ王は悲しきの餘り前非を悔ひ乍ら、ガリヤのコーデリアを訪ねて行つた。早くも様子を知らつたコーデリアは人を遣つて父王を助け、自分の宮殿に連れ歸らせた。さうして兵をブリティンに出し父王を再び王位に即けようと兩公爵軍と戦ひ、見事な勝利を得て二人の公爵は敗死した。リヤ王は再び王位に還り、コーデリアの温かい手は養はれ楽しい月日を送つて居たが、それも東の間であつた。二人の姉の子マーガンとキネダックとは女王コーデリアを憎んで遂に兵を擧げた。コーデリア軍は散々に負けて俘虜と成り牢獄に入れられたが、自分の運命を悲しみ遂に自殺して仕舞つたと出て居る。リヤ王發狂の場而其の他シェイクスピアの作とは多少異つて居るが、筋は大體之から取つたものと言はれて居る。作を通してシェイクスピアの偉大さを窺はせると共に、本格的劇としての取扱に力を用ふべきであらう。

シェイクスピアはイギリス國民の最も良きものを最も良き時に出て表現した代表的文豪である。其の生誕は一五六四年(永祿七年)で、端をイタリヤに發した文藝復興の大潮流が正に此の島國に押寄せ、未墾の處女地に燦爛の文化を咲かせた時である。神の禮讚と來世の思念に没入した中世紀の幕が閉ざされ、近代の舞臺は此の時に始まるのであるが、此の再生期の特徴は當然人の信頼と現世の肯定とでなくてはならぬ。神の全能の前に餘りに無力と成つて居た人間は、爰に再び人間の力を見出す時が來た。若くして精氣潑刺たりし人間は、無限の好奇心と冒險慾とを以て海に陸に未發見の地を求めて進んだ。天體の秘密も人身の靈機も人知を以て探索し得る可能性を信じた。現代に至つて遂に生みの親なる人間を壓迫し盡さんとする科學の生誕は實に此の時にあつた。此の時代の藝術上の産物が、人體美を主とするイタリヤ美術と人間の涙と笑ひを解剖するイギリスの演劇とであつた事は當然の歸着である。此の點でシェイクスピアは再生期の代表者でもある。そしてイギリス一國で言へば、統一と國威宣揚に國民舉つて無邪氣な誇りと感激に満ちた若き時代であつた。



一人の市人としての彼は全く平凡な記録を残して居ることは、如何にも片手に算盤を持ち片手に詩を作るイギリス人らしく、又眞に偉大な人物は詩人と政治家とを問はず、決して奇矯變態なもので無いことを立證して居る。ウォリックシャーといふ丘と平野の牧羊の中部の一州が彼の搖籃地で、祖先は農民であつたが、小才の利いたらしい父はストラトフォード、オン、エヴォンといふ當時人口二千許りの町に出て雜貨商を營み、長子をウィリヤムと名づけたのが此の大戯曲家である。彼は町の小學校に學んだが、十三歳の頃には退學して家業を助け、十八歳隣村の農家の娘アン、ハザウエーを娶り、やがて三人の子の父となつた。斯くて何時迄あるべきで無いと思つたのか二十二歳の頃單身首都ロンドンに出て其の頃次第に隆盛に向ひつゝあつた劇場に關係し、先づ俳優として幾らか其の伎倆を認められた。そして次第に文筆を練り、二十九歳の時美神グイーナスが情事を解せぬ美少年アドーニスに戀慕して失望の餘り、すべての戀を呪ふといふ神話を題とした『グイーナスとアドーニス』を出版し、翌年には『ククリースの落花狼藉』と題する長詩を公にした。之は横暴な王子タークインの強襲に逢うて夫の不在中操を汚されたローマの烈婦の惱みと自殺とを歌つたものである。此の二長篇の物語詩で詩人としての盛名を得たが、彼は其の才能の然らしめた故か、それとも當時日の出の勢であつた物語詩人スペンサーに此の方面では及び難しと悟つたのか以後専ら心を劇作に潜め唯時の流行であつた十四行詩(ソネット)百五十四首を作つた丈である。

シエクスピヤが劇に筆を染めたのを其の二十六歳と見、最後の作を四十七歳の一六一一年とすれば、前後合せて二十一年間の筆勢に依つて作る所三十七種、平均一ヶ年二篇弱である。之を分つと大凡四期と成る。即ち二十九歳迄の四年間を第一期、仕事場に於ける時代とする、手當次第に先輩と合作したり、先人の作を改訂したりして腕を磨いた練習期で、話も事件も稀薄だが野趣と言葉の興味に添へ、人生に於て事業と戀愛の輕重を考へさせる『戀の無駄骨折』、友情と戀愛のロマンス『ヴェローナの二紳士』、二對の雙子に絡る誤解と混雜の『間違ひの喜劇』、悲劇では殘忍と流血の『ダイタス、アンドロニカス』、そして折から横溢

した國民の愛國熱に乗じ、史劇『ヘンリ六世』三篇、『ジョン王』『リチャード三世』を上演して居る。三十歳に成つて腕に十分の自信を得た彼は世間に出て思ふ存分に其の才藻を發揮した。騒々しく又牧歌的な喜劇の時代と言はれる。空想的にも無力な『リチャード二世』や、『ヘンリ四世』三篇、『ヘンリ五世』と尙史劇を續けて居るが、此の内に老武士フォルスタッフの如き無類の好漢を活躍せしめる挿話があつて愉快な喜劇味に輝いて居る。喜劇其の物に至ては言ふも更なり、『眞夏の夜の夢』の幽艶にも精妙なる、『じゃく馬馴らし』の皮肉嘲諷、『から騒ぎ』の清澄痛快、戀の淡いもつれは『十二夜』に面白く、牧歌的田園趣味は『ウインザの陽氣な女房』から『御意のま』に於て更に清新を加へた。然し人生は愉快な方面のみではない。『ヴェニスの人』一味の喜びはシャイロクックに取つて癒され難い惱みである。こよなく美しい純情の『ロミオとジュリエット』の戀は宿命でもあるかの様に破れ、二人は死なねばならなかつた。理想の錯誤は高潔なブルータスをして親友『ジュリヤス・シーザー』を刺させる。

三十八歳から四十五歳のシエクスピヤは彼の思想も技巧も最も圓熟した時であつて、所謂四大悲劇なるものは悉く此の期間に發表された。即ち『ハムレット』、『マクベス』、『オセロ』、『リヤ王』の四つがそれで、第一は亡靈の暗示に心迷ひ、其の戀も忘れて父の仇を討つ若き王子の悲劇、第二は妖婆の豫言に驕慢な己の心をいよ／＼高ぶらせ、主君を弑して野望を遂げて後苦しむ將軍夫妻の悲劇、第三は餘りにも若く美しい妻を娶つた故に、嫉妬に惱む妻をも身をも殺す武人の悲劇、第四は昨日まで榮華を誇る君主であつた老王が、不孝な娘等に棄てられ氣狂と成つて嵐の中に荒野をさまひ廻る悲劇(即ち本課)此の四つは夫々に人間性の弱點を摘出し、鏡にかけて示すにも似た名作品として永劫に劇界の寶玉として残るものである。尙豪華な作『アントニーとクレオパトラ』や『コロオレーナス』等も此の期の作に屬する。此の外、皮肉と幻滅の和解悲劇『終よければ皆よし』、『トロイラスとクレシダ』、『以尺報尺』、『ベリクリーズ』の四篇は皆冷たい灰色の空氣に包まれて此の性格悲劇の第三期は終る。蓋し悲痛のどん底に居た彼としては、人生を苦しからしめる様々



の姿を見詰めざるを得なかつたのであらう。斯くて深所から出て高所に立つた彼は、晩年に及んで著しく哲學的な沈靜なものと成つた。其の代表としては死別したと信じて嘆き慕ふ妻に十六年目で會合するといふ『冬物語』、又は孤島に淋しく二人住む童顏白髮の老人と金髪豊頬の其の娘との身の上に起る物語の『あらし』の二つがある。何れも此の大劇作家の澄み切つた心境の美しさに酔はされる作品である。四十七歳はまだ若い。然し是丈の仕事をした人はもう休息しても良いであらう。進むを知り退くを知るは達人の事である。彼は世間の風潮の一變するを見て、筆を折つて故郷に退隱した。勤勞と節約とは彼をして富有な一紳士として餘生を樂しませるに十分であつた。唯一人の男子は夙逝したが、二女には良縁があつた。温厚なシェークスピアといふ渾名に終始した彼は、早くも好々爺と成つた。そして一六六一年四月二十三日五十三歳を以て生れた町ストラトフォードで靜に永眠した。イギリス人は言ふ、"わがイギリスがシェークスピアを有することは印度を有するよりも更に大なる誇である"と。

指導形態

指導上の認識點

- 1 本課の着眼は低學年から繼承し來つた劇文學が純然たる形を具備した點に在るは勿論であるが、内容的には父子の情愛を知らせ、眞實を以て終始するワキ役コーデリヤを通して孝道精神を感得せしめるにある。
- 2 教材が純然たる戯曲の形を成して居るから單なる文字の學習のみに満足せず寧ろ實演に

重を置き、既習の『末廣がり』と連絡し劇文學の大體を知らせ、人間性を豊かに培ふのも義務教育終了前の兒童として無用の事ではあるまい。

- 3 原作者シェークスピアの名を知らせ、其の行跡の大體を附説し、前課と思想的に連絡を保持するのも忘れてならぬ觀點の一つであらう。蓋し配材精神も亦這般にあるは言ふ迄も

ない。

- 4 本課は特種の教材であるから實演に要する時間を込めて大體五時間程度で立案するのが妥當であらう。

第一次指導

- 1 題目の指導  
▽イギリスは勿論世界の文豪シェークスピアの四大悲劇の一である事を知らせて讀心を咬るべきである。
- 2 自由學習  
▽先づ投渡して自力の限りを盡させる。
- 3 劇の荒筋を掴ませる。  
▽どんな内容か？ 何處が此の劇の中心か？ 見どころは何處か等。
- 4 話合。  
▽讀後の印象や感想等。
- 5 更に讀ませて不明の箇所を質問させる。  
▽新出文字は辭書を繰らせ、其の都度索引させる。

▽難語句は質問させ隨所に指導する。

- 6 指名讀  
▽場面別にして、數名に。
  - 7 劇の作意を考へさせる。  
▽掴んだ作意は記帳させて置く。
  - 8 話合。
- 齡 惠 域 値 劣 避 判 斷 許 届  
 額 損 皮 賢 閉 介 悔 照 雷 探  
 狂 抱 思  
 重 臣 面 前 高 齡 身 輕 老 後 恩 惠 尊  
 敬 境 域 領 主 犠 牲 口 先 實 行 本 心  
 眞 實 持 參 金 末 姫 判 斷 お 召 し 予  
 餘 生 婚 約 乞 食 同 然 后 勸 當 無 作 法  
 千 萬 し よ つ ち ゆ う は た ご や し り 押  
 皮 肉 御 賢 明 御 同 意 鞍 道 知 ら ず 厄  
 介 後 悔 先 に 立 た ず 飼 犬 に 手 を か ま れ  
 病 床 眞 心 準 備 う は 手 御 照 覽 老 の  
 果 瀧 つ 瀬 つ ん ざ げ 探 知 發 狂 陣 所  
 侍 醫 藥 物 か う つ と な ぶ つ て 歎 息  
 御 亂 心 御 本 復



- ▽前項の作意を中心に。
- 9 低音讀。
- ▽聲を立て、反覆通讀させる。
- 10 ノートを纏めて提出させる。

第二次指導

- 1 一度静かに通讀させる。
- ▽不明の箇所は其の都度自由に質問させる。
- 2 指名讀。
- ▽一幕毎に人を代へて。
- 3 新出文字を確める。
- ▽紙片を配付しテスト式に筆答させて見る。
- 4 作意の自己檢討。
- ▽前項に纏んだ作意を反省させる。
- 5 話合。
- ▽作意や讀後の感懷を中心に。
- 6 逐次研究。
- ▽教師は最後に板書や口頭で纏める。

第一場

所 リヤ王の居城

登場人物

リヤ王  
 姉 娘 ゴナリル  
 二番娘 リガン  
 末 娘 コーデリヤ  
 フランス王  
 其の他家來大勢

場面

リヤ王が三人の娘・娘のむこ・重臣等を面前に呼んで、領地の分配方を言渡す。姉娘二人は言葉巧に父王の機嫌を取り、末娘コーデリヤは正直過ぎて勘當される。

第二場

所 姉娘の居城

登場人物 リヤ王

姉 娘 ゴナリル  
 其の他双方の家來大勢

場面

リヤ王家來たちと狩から歸り、姉娘と口論を始める。リヤ王は怒り且つ後悔して二番娘の居城へと家來を連れて立去る。

第三場

所 二番娘の居城

登場人物 リヤ王

二番娘 リガン  
 家來大勢

場面

姉娘の居城を退去したリヤ王が二番娘の居城を訪れると、此處でも拒絶され不孝者のうは手ぢやと罵つて立去る。舞臺は半轉して外は烈しい暴風・雷雨。リヤ王は怒り且つ罵り、遂に發狂して當所も無く荒野を彷徨する。

第四場

所 フランス王の陣所

登場人物 リヤ王

末娘 コーデリヤ  
 侍醫  
 其の他召使の侍女數名

場面

リヤ王が姉たちに虐待されて居ることを探知したコーデリヤは、フランス王に従ひ老王の

7

爲に軍勢を率ゐてイギリスに渡つた。ひどいあらしの翌朝、發狂した老人が荒野に彷徨うて居るのをフランス兵が発見して陣所に伴ひ侍醫が手を盡して介抱する。それがリヤ王であつた。

8

▽前項の筋書を敷衍して書取らせる。

9

黙讀。

10

▽劇の觀點に注意させて。

11

▽讀後の感想や所見を自由に。

12

▽聲を出して反覆讀誦させる。

13

ノートを整理して提出させる。

14

低音讀。

15

▽中・劣生を主として。

16

指名讀。

17

範讀。

18

▽劇の要所々に力を込めて。

第三次指導



3 朗讀練習。

▽受持を極め對話的に朗讀させる。

4 話方練習。

▽人を極めて、劇的に。

5 話合。

▽實演に入る前に配役其の他を話合はせる。

6 下讀。

▽グループ毎に配役を選ばせ振當られた役のセリフを暗誦させる。此の際教師は舞臺監督と成つて各配役のセリフやシグサを指導してやる。

7 舞臺裝置。

テスト問題

一 次の語句を選んで後の文の空所をみたしなさい。

(お仕へ) (父上として) (大事に)

(心持) (決して) (幸福)

1 さて娘ども。そなたたちの中で、誰が一番此のわしを [ ] に思つてくれるか、それ

▽分擔を極め背景や小道具の準備に當らせる。

8 試演。

▽實演に入る前に一度試演して互に批評させる

9 實演。

▽學級總掛りで。

10 補充説話。

▽原作者シエクスピヤの行跡や作品等。

11 視寫・聽寫練習。

12 新出文字の書取。

13 語句の應用練習。

14 テスト。

を、そなたたちの口から聞きたい。

2 私の [ ] は、姉上と全く同じでございます。

3 私はあらゆる [ ]、一切の楽しみを犠牲にしましても、父上お一人に [ ] 申すことを仕合せと存じます。

4 私は、あなたを [ ] 大切に致すつもりでございます。

5 末姫様は、 [ ] 御不孝なお方ではございませんぬ。

二 次の漢字に振假名を附けなさい。

1 高齡 2 尊敬

4 婚約 5 乞食

7 賢明 8 結構

3 犠牲

6 勘當

9 照覽

10 侍醫

三 次の語句を使って短文を作りなさい。

1 以來 ( )

2 損ねる ( )

3 同然 ( )

4 無作法な ( )

5 後悔 ( )



中學年以來毎卷必ず一種位は取扱はれる公民的教材が、本卷でも茲に此の一篇を採擇し、司法の概念を與へ司法權の神聖なる所以を學ばせられた。文は裁判の機構と其の精神を解説的に叙した一種の議論文で、條理整然たる所に特色がある。文の中核は百五十八頁の「裁判の目的は、決して人を争はせたり、人を罰したりすることではない」以下の説明に在つて、次の頁の「裁判は實に、正義を保護し云々」は其の結論である。

民事・刑事に關する智識は、代言人や辯護士に任せる前に先づ國民全體が常識として心得置く可きである。それは取りも直さず民事や刑事に關する各般の争ひに負けまいとする用意では無く、不愉快な民間の争ひを未然に防ぐ最上の對策でもある事が、本課に依つて合點し得られるであらう。此の意味に於て本課は國民の常識讀本として裁判の序説が提供されたものと見做すべきであらう。

挿畫の印象と其の説明

百五十六頁の寫眞版は東京地方裁判所に於ける公判の實況で、今日頭辯論の眞最中である。東京地方裁判所では他の裁判所と異なり、昭和十二年度より法廷を特に民事と刑事とに分ち、民事は民事・刑事は刑事と別々の法廷を設置されてある。寫眞は民事裁判の法廷で、正面の一段高い所に座したのが向つて左方から陪席判事・次が裁判長・其の次が又陪席判事・右端が裁判所書記であり、陪席判事は裁判長より等級は上位にある。裁判長の前に小卓が見えるのは證人臺、又は訊問臺と稱する。其の前方に四人の辯護士が居るが、左方の二人が原告代理の辯護士で、今其の一人が立つて辯論を吐きつゝある。其の右方の二人は被告代理の辯

護士で、原告・被告共に本人は出頭せず、辯護士が代理して裁判を受ける情景である。何れも法服・法冠を着ければ法廷に臨む事は出来ない。兩側に黒帽・黒服の者が一人宛向ひ合つて居るのは廷丁で、後方に大勢居る男女は一般傍聽人である。變つた大きな事件の場合だと傍聽席に新聞記者が連り裁判の進行を記載して報道する。刑事裁判の場合には（東京では法廷が變るが）陪席判事の左方に更に檢事が加はり、陪審法廷の際は陪審席も設けられる。開廷中は靜肅を旨とするは勿論、傍聽人中秩序を亂したり高聲を發したり不穩の舉動に出る者があると裁判長から退席を命じられるので、閉廷する迄唯黙つて傍聽しなければならぬ。寫眞には可成りの年少者も見えるが、女子供だから傍聽して不可ないと言ふ規定は別がない。

文字語句

新出文字

裁 借 律 證 犯 辯 刑 爲 旨 區 廷 罰 維

據 (新出は本卷、ヨル) 請 (新出は本卷、コヒ) 求 (新出は卷九、モトメ)

趣 (新出は本卷、オモムキ) 組 (新出は卷七、クミ) 織 (新出は卷八、シヨク)

語句と其の解説

裁判(サイバン) 是非曲直の裁定。さばき。法的には争訟の形式に依つて法規の適用を確定するを目的とする統治權の作用。判決に同じ。主張(シユチャウ) 自分の考をいひはること。實例に依つて使用の場合を知らせるがよい。法律上の争(ハフリツジヤウノアラッヒ) 法律のうへの争ひ。此の場の『上』は『に屬する』とか『に關する』とか『に照して考ふべき』とか言ふ意味に解釋すれば良い。經濟上・外見上など



皆同じ。 **裁判所**(サイバンショ) 裁判といふ統治権の一作用を行使する國家の機關・法的には争訟の形式に依り法規の適用を確定するを目的とする統治作用を取扱ふ國家の機關。司法裁判所・行政裁判所・権限争議裁判所の三種に分つ。特に司法裁判所の稱。本課も即ちそれである。 **原告**(ゲンコク) 訴訟を提出した人。第二審では控訴人、第三審では上告人といふ。 **被告**(ヒコク) 訴訟事件で訴へられた方、即ち原告の相手方。被告人。 **證人**(シャウニン) 證據に立つ人。證據人。 **訴訟**(ソショウ) 或事件につき或人を相手取つて一定の官廳へ申出て其の裁判を求めること。うつたへ。 **民事裁判**(ミンジサイバン) 民事事件の裁判。民事は私権に關する訴訟事件で、民事裁判は私法上の權利保護を其の目的とする。 **放火**(ハウクワ) 火をつけて焼くこと。つけび。 **犯人**(ハンニン) 罪を犯したるもの。犯罪行為を爲した人。犯罪者。犯罪人。 **檢事**(ケンジ) 司法機關を構成する高等官。刑事に關しては原告者として犯罪の捜査・公訴の提起及び之が實行を職務とし、判決の濟んだ後は其の執行を監督し、又民事に關しては公益に關係ある訴訟、殊に人事に關係ある訴訟に立會ひ、其の意見を述べる外場合に依つては公益の爲訴訟の原告又は被告と成り、商會社の解散・禁治産等種々の請求を爲す職務がある。結局罪人を罪人として訴へる役人で、其の職責は公益の代表者たる所にある。 **辯解**(ベンカイ) 言ひ解くこと。いひひらき。いひわけ。辯疏。 **辯明**。 **無罪**(ムサイ) 罪あること。裁判所の判決に依つて、犯罪事實の存在を認められたこと。無罪の對。 **無罪**(ムサイ) 罪なきこと。裁判所の判決に依り犯罪事實の存在を認められないこと。無罪。 **刑事裁判**(ケイジサイバン) 犯罪に刑罰を適用する爲、司法裁判所の行ふ裁判。國家の刑罰權を實現する爲の手續をいふ。刑事とは刑罰に關する事件。民事の對。 **民法**(ミンバウ) 私法の通則を規定した法律。一箇人の日常生活の關係を定めたもの。法律全體を公法・私法・社會法の三者に分けると、民法は其の中の私法の部門に屬する法律である。現行法典は總則・物權・債權・親族及相續の五編から成つて居る。 **故意**(コイ) ことさらにする意志。わざわざ。わざと。有意。法的には殊更に或行為、殊に他人の權利侵害の

行為をなさんとする意思をいふ。 **侵害**(シンガイ) おかしそこなふこと。侵入して損害を加へること。 **賠償**(バイショウ) 他人に加へた損害に對する丈の支拂を爲すこと。つぐない。 **不法行為**(フハフカウキ) 法律上の禁制又は命令に違反する行為。故意に又過失で他人の權利を侵害すること。法的には債權發生の原因の一。 **刑法**(ケイハウ) 犯罪及刑罰に關する國家の規律。刑罰の法則。即ち犯罪を條件とし刑罰を結果とする法律組織。刑法は一面に於て刑罰を豫定し犯罪から社會を保護し、他面に於て處罰の條件程度を定めて犯人を保護する。 **死刑**(シケイ) 犯人の生命を斷つ刑罰。昔は刑罰體系の中心であつたが、近世に至つて漸次其の範圍が縮小され、今日では自由刑に取つて代られた。現行刑法に於て死刑のみを科する場合は四、他の刑罰と選擇的に科する場合が一四ある。死刑は監獄内で絞首の方法に依つて執行する。刑の宣告を受けた者は執行のある迄監獄に拘束される。死刑の執行は司法大臣の命令に依り、命令後五日以内に執行する。十六歳未満の者は原則として死刑を科さない。 **無期**(ムキ) 無期懲役をいふ。常事犯の重罪に科する刑罰。生命を終る迄終身懲役に服するもの。無期徒刑。 **懲役**(チョウエキ) 禁錮・拘留共に自由刑の一種で、定役を科する事を其の特色とする。有期と無期との別があつて有期は原則として一箇月以上十五年以下であるが、加重する場合は二十年迄、輕減する場合は一箇月以下に爲し得る。無期は終身とする。懲役は監獄に拘留して定役即ち一定の強制労働に服せしめるから、一面強制教育としての意義をも持つ。 **判事**(ハンジ) 普通司法裁判所を組織して裁判事務を掌る役人。勅任と奏任の別がある。 **區裁判所**(クサイバンショ) 最下級の司法裁判所。單獨判事が其の判決に任ずる。 **地方裁判所**(チハウサイバンショ) 一の合議裁判所。區裁判所の上に位する。(別項參照) **控訴院**(コウソウイン) 地方裁判所の裁判に對する控訴、及び其の第二審の裁判に對する上告、皇族に對する民事訴訟等を審判する裁判所。 **大審院**(ダイシンケン) 最高の合議裁判所。他の下級裁判所が事實の裁判を爲すと異なり、法律の點に關する裁判を爲すを本務とし、特別の規定あるもの、外事實の裁判を行はない。其の法律の點に就いて表した裁判上の意見



は、其の訴訟一切の事に就いて下級裁判所を羈束するもの。一若しくは二以上の民事部及び刑事部を設け、民事部は民事事件、刑事部は刑事事件を取扱ひ、七人の判事を以て組織した部で訴訟事件を審問し且つ裁判する。 **控訴**(コウソウ) 區裁判所又は地方裁判所の第一審に不服を唱へて、再び事實の覆審を直近の上級裁判所に求めること。 **上告**(ジャウコク) 上に申立てること。上申。第二審の判決に對して法律の違背を理由として其の判決の破棄又は變更を上告裁判所へ申出ること。此の際第二審が控訴院であつた場合には大審院、地方裁判所であつた場合は控訴院が上告裁判所となる。 **上訴**(ジャウソウ) 上に訴へること。民事又は刑事の判決又は決定に對する不服を上級裁判所に訴へて其の取消を求めること。 **陪審員**(バイシンケン) 陪審事件に就き地方裁判所の刑事犯罪事實の有無を判斷評議し、評議の結果を答申する事を任務する者をいふ。陪審員は十二人で陪審席を構成する。 **辯護士**(ベンゴシ) 司法機關の一部、民事の訴訟では原告又は被告の依頼に應じて委任代理を爲し法廷に出で、依頼者の爲に辯護の勞を取り、刑事の訴訟では刑事被告人の依頼又は裁判所の命令に依つて被告人の利益を辯護する者。 **代言人**。 **法廷**(ハフテイ) 裁判官が審問や判決を行ふ一定の場所。しらす。 **秩序**(チツジヨ) 組織の中の總ての事が正しく行はれること。ついで。次第。順序。順次。 **維持**(キヂ) もちこたへること。支持。保持。

資料

參考

裁判所構成法 (明治二十三年二月十日法律第六號)

第一編 裁判所及檢事局

第一章 總 則

第一條 左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一 區裁判所

第二 地方裁判所

第三 控訴院

第四 大審院

第二條 通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタル

モノハ此ノ限ニ在ラス

第三條 地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審

問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條 裁判所ノ設立廢止及管轄區域竝ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナ

ル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラルルヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求

メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上

其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所

ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其ノ事件ヲ取扱ハ

シムルコトヲ得

第七條 檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク



第九條 區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス  
前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第二章 區裁判所

第十一條 區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス  
此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ他其ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フ  
コトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス  
第十四條 區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所  
ニ依ル

第一 五百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額五百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二 價額ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ) 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ  
所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

(ロ) 不動産ノ境界ノミニ關スル訴訟

(ハ) 占有ノミニ關ル訴訟

(ニ) 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

(ホ) 左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起  
リタル訴訟

(一) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料  
(二) 旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物  
第十五條 區裁判所ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特別ノ規定アルモノヲ除ク外非訴訟事件ニ關ル事務ヲ取扱フ  
ノ權ヲ有ス

非訟事件中登記事務ハ裁判所書記ヲシテ之ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十六條 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ  
限ル

第一 拘留又ハ科料ニ該ル罪

第二 有期ノ懲役若ハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪

第十八條 各區裁判所ノ検事局ニ檢事ヲ置ク  
區裁判所検事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ノ代理セシムルコトヲ得

第三章 地方裁判所

第十九條 地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第二十條 各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第二十一條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ  
爲スコトヲ命ス



第二十六條 地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條 地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條 地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條 地方裁判所ハ非訟事件ニ關スル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

有ス

第三十三條 各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事

局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有

ス

第四章 控訴院

第三十四條 控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條 各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條 事務ノ分配及結了並ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十五條ノ左ノ變更ヲ以テ控訴院ニ適用ス

第三十七條 控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二 地方裁判所ノ第一審トシテ爲シタル決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第四十二條 各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長並ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章 大審院

第四十三條 大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第四十四條 大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 終審トシテ

(イ) 地方裁判所及控訴院ノ第二審判決ニ對スル上告

(ロ) 地方裁判所ノ第二審トシテ爲シタル決定及命令並ニ控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル



ル抗告

第二 第一審ニシテ終審トシテ

刑法第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪竝ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判  
第五十六條 大審院ノ檢事局ハ檢事總長ヲ置ク  
檢事總長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

指導精神

憲法二十四條に「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受ケルノ權ヲ奪ハルコトナシ」とある。之れ一は私權の保護を求め、爲に民事裁判所の裁判を求め、權利を保證すること、一は刑事に關し法定の裁判官の裁判に依らずして刑罰を課せられる事が無いやう保證して居ることを意味する。即ち法治國家の原則であつて、封建時代の專制政治に對し、近代國家に於ては法律に依り人民の權利自由を保證して居ることを示す。唯之が例外として警察犯に付き警察署長が即決處分を爲すの權を有し、財政犯に付き收稅廳・稅關又は專賣廳が通告を爲すの權を有するが、之等は假處分の性質を有し、被告人が自ら之に服することを效力發生の條件と爲すもので、若し服さなければ其の處分は當然效力を失ひ、更に正式に裁判所の裁判に付せられるのである。

裁判所は法規の適用を確定する爲に訴訟を裁判する國家の機關で、其の裁判といふ司法權の作用は天皇の名に依つて法律に従つて爲されるものである。裁判所は之を司法裁判所及行政裁判所の二つに分つ事が出来る。前者は民事・刑事に關する司法權を行使する裁判所で、後者は行政官廳の違法處分に依り權利を侵害された時の訴訟を審判する裁判所をいふ。司法裁判所は更に普通裁判所と特別裁判所とに區別される。特別裁

判所とは一定の人及事件區域に關して特に民事・刑事の事件を裁判する裁判所、例へば陸海軍軍法會議・臺灣總督府法院等をいひ、普通裁判所は又其の裁判する事項の範圍に従つて大審院・控訴院・地方裁判所・區裁判所に區別される。其の中區裁判所は我が國最下級の通常司法裁判所で、一定の民事・刑事の訴訟事件に關して單獨判事に依つて裁判が行はれる。然し司法・行政の事務の爲には二人以上の刑事を置く事が出来る。區裁判所は左の訴訟事件に就き裁判權を有する。

民事訴訟

- (一) 千圓を超過せぬ金額、又は金額千圓を超過せぬ物に關する請求。
- (二) 價格に拘らず左の訴訟。
  - (イ) 住家其の他の建物、又は或部分の受取・明渡・使用・占據若くは修繕に關し、又は賃借人の家具、若くは所持品を賃借人の差押へた事に關して、賃借人と賃借人との間に起つた訴訟。
  - (ロ) 不動産の境界のみに關する訴訟。
  - (ハ) 占有のみに關する訴訟。
  - (ニ) 雇主と雇人との間に雇期限一年以下の契約に關して起つた訴訟。
  - (ホ) 左に掲げた事項に就て旅人と旅店、若くは飲食店の主人との間に、又旅人と水陸運送人との間に起つた訴訟。
    - (1) 賄料又は宿料、又は旅行の運送料、又は之に伴ふ手荷物運送料。
    - (2) 旅店若くは飲食店の主人、又は運送人に旅客より保護の爲預けた手荷物・金錢又は有價物。

- (三) 破産事件。
- (四) 人事訴訟事件。

刑事訴訟



(一) 拘留又は科料に該當する罪。  
 (二) 短期一年以上の懲役、又は禁錮に該當する罪を除く外、有期の懲役、若しくは禁錮又は罰金に該當する罪、但し何れも豫審を経ないものに限る。  
 地方裁判所は區裁判所の直ぐ上位に在る通常裁判所で、一定の民事及刑事に關する訴訟を審問裁判する。三人の判事に依つて構成され、其の中一人を裁判長とする。一若しくは二以上の民事部及刑事部を置き、判事の合議に依つて裁判が確定する。地方裁判所が裁判權を有する事項は次のやうである。

民事訴訟

(一) 第一審として區裁判所の權限又は訴訟院の權限に屬するものを除く其の他の請求。  
 (二) 第二審として (イ) 區裁判所の判決に對する控訴 (ロ) 區裁判所の決定及命令に對する法律に定めたる抗告。

刑事訴訟

(一) 第一審として區裁判所の權限並に大審院の特別權限に屬しないもの。  
 (二) 第二審として (イ) 區裁判所の判決に對する控訴 (ロ) 大審院の權限に屬するものを除く外、區裁判所の決定及命令に對する法律に定めたる抗告。  
 控訴院は地方裁判所の上位にある第二審の合議裁判所で三人の判事から成り、訴訟を審問裁判する。各控訴院には一若しくは二以上の民事部及刑事部を設け、左の事項に就て裁判權を有する。  
 (一) 地方裁判所の第一審判決に對する控訴。  
 (二) 大審院の權限に屬するものを除く外、地方裁判所の第一審として爲した決定及命令に對する法律に定めたる抗告。

大審院は我が國最高の裁判所で、一ヶ所東京にある。(麹町區西日比谷町)一又は二以上の民事部及刑事部

から成り、訴訟事件に關する審問裁判は五人の判事の組織する部に於て爲される。大審院では終審として上告及法文に定めたる抗告を受理裁判する外、第一審且つ終審として皇室に對する罪、内亂に關する罪及皇族の犯した罪(禁錮以上の刑に處すべきもの)に就き裁判を行ふ。これら何れも裁判所構成法に規定されて居る。

指導形態

指導上の認識點

1 國家の社會的機能としての裁判と言ふことは、國家生活を營んで居る者の必ず心得て居らねばならぬ國民的常識である。本課は此の題材を捉へ之を極めて平易に説明し以て公民的知識の擴充を企圖したものである。取扱も亦此の點に着目し彼等の知識範圍に材を求め内容を主として之を具體化する用意が肝要であらう。

2 文は裁判及裁判所の種類と構成を解説した一種の議論文である。此の種の文は先づ裁判とは如何なるものか、之には如何なる種類があるか、司法裁判所は如何なる職能を有するかと言ふ風に演繹的に排列して行く方法がある。之は法制經濟の如き科學的整齊を尊ぶ高

尙な文には適するが、先づ興味を呼び全體を通俗的に説いて行かうとする文には不向である。従つて本課は先づ日常目撃して居る事例から入り、民法乃至刑法に屬する法文の一二を引用し、法を適用する上の手續を述べ、裁判の神聖なる所以を納得せしめんとする通俗的説明法を取つて居る。指導者は宜しく此の意を體し彼等をして文を読んで得たる知識を報告させ、教師は之を補充して行くといふ理會を主體とする方途に出づ可きである。  
 3 配當時間は大體の四時間見當で立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1 題目の指導



- 2 全課の通讀。  
▽不明の箇所は整理して記載させて置く。  
質疑應答。
- 3 質疑應答。  
▽新出文字は其の都度辭書を索引させる。  
裁 借 律 證 據 請 求 犯 辯 刑  
爲 趣 旨 區 組 織 延 罰 維  
▽難語句は隨所に指導し特に難解のものは板書して一齊に指導する。  
さいそく 主張 訴 證據 判斷 請求  
相互 さばく 放火 公益 辯解 國法  
規定 實際問題 故意 過失 權利 侵害  
規定 事件 不法行爲 殺人事件 狂人  
趣旨 四階級 組織 輕重 不服 事實  
服從 確定 犯罪者扱ひ 義務 忠實  
良心 眞實 不道理 罪惡 秩序 相互  
公平 價値 正義 保護 維持  
▽法律的な特殊語は板書して入念に指導する。

- 4 文の大意を掴ませる。  
▽反覆通讀させて。  
法律上 裁判所 原告 被告 證人 訴訟  
民事裁判 犯人 檢事 有罪 判決 無罪  
刑事裁判 民法 損害賠償 刑法 死刑  
無期懲役 判事 區裁判所 地方裁判所  
控訴院 大審院 控訴 判事 第一審  
上告 上訴 陪審員 辯護士 附添人 代  
理人 辯論 法廷
- 5 黙讀。  
▽説明の要旨や文の觀點を考へさせて。  
質疑應答。
- 6 更に通讀させて不明の箇所を質問させる。  
指名讀。
- 7 適宜に句切つて、數名に。  
挿畫の觀察。
- 8 挿畫の觀察。  
▽法廷内部の情景や畫面に現れた人物の個々を  
書物と對照させて。  
書物と對照させて。
- 9 話合。  
▽讀後の所懐を中心に。

- 10 低音讀。  
▽説明の要旨に注意して反覆通讀させる。  
ノートを纏めて提出させる。
- 11 第二次指導
- 1 一度靜かに通讀させる。  
▽質問があれば聞いてやる。  
範讀。
- 2 説明の要點に注意させて。  
指名讀。
- 3 優・中・劣と交互に指名して。  
話合。
- 4 説明内容を中心に。  
逐次研究。
- 5 教師は要點を板書して纏める。  
(1) 民事裁判  
(例) 貸借の訴訟  
(2) 刑裁判所  
(例) 放火事件  
(3) 法の適用

- (例) 民法  
故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵  
害シタル者ハ之ニ因リ生シタル損害ヲ  
賠償スル責ニ任ズ  
(ロ) 刑法  
人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ  
三年以上ノ懲役ニ處ス
- (4) 裁判  
裁判所  
(イ) 區裁判所  
(ロ) 地方裁判所  
(ハ) 控訴院  
(ニ) 大審院  
控訴 上告  
陪審制度
- (5) 裁判の目的  
正義の保護 秩序の維持  
書取。  
▽前項の板書事項を敷衍して書取らせる。



7 話方。

▽説明内容を文に即して。

8 黙讀。

▽反覆通讀して文意の所在を探らせる。

9 文意の檢證。

▽表現面に即して把握した文意を例證させる。

10 話合。

▽讀後の所感を中心に。

11 低音讀。

▽文の觀點に注意させて。

12 ノートを整理して提出させる。

第三次指導

1 通讀練習。

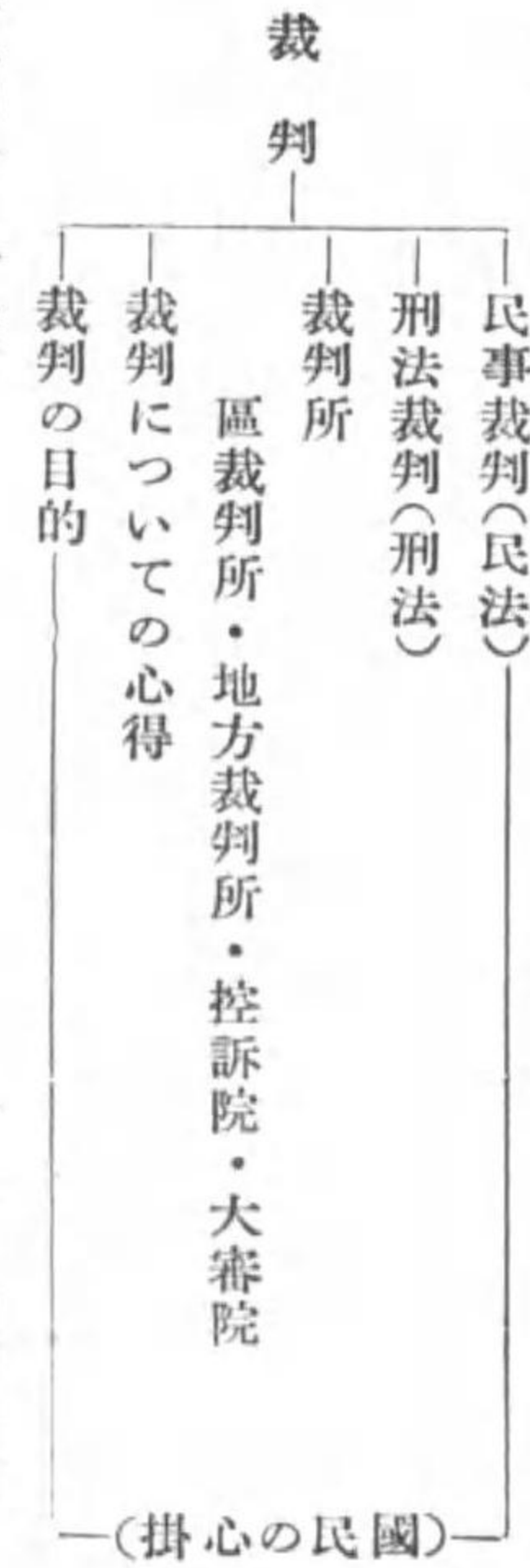
▽個讀に自由讀を交へて。

2 指名讀。

▽中・劣生を主として。

3 文の機構を確める。

▽叙述面に即して文圖を作製させる。



4 思想關係の吟味。

▽裁判の精神・目的・運用等。

5 話方練習。

▽各自にフランを立てさせて。

6 補充説話。

▽公判見學の體驗談や新聞紙に現れた裁判の具體例等。

7 學習事項の整理。

▽内容方面では裁判の目的・精神・法の適用等、形式上では解說的議論文の様式・姿態・機構等。

8 視寫・聽寫練習。

テスト問題

一 次の法文を解釋しなさい。

1 故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リ生シタル損害ヲ賠償スル責ニ任ス

2 人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス

二 次の語句に振假名を附けて解釋しなさい。

- 1 證人
- 2 檢事
- 3 辯議士

9 新出文字の書取。

10 語句の應用練習。

11 テスト。

4 民法

7 辯論

三 次の語句の反對語を書きなさい。

- 1 有罪 ( )
- 2 原告 ( )
- 3 不服 ( )
- 4 權利 ( )
- 5 道理 ( )

5 控訴

8 判事

9 刑法

10 上告

6 陪審員



## 第二十一 雪残る頂

明治俳壇の大立物子規・鳴雪の名句が七つ、之で鬼貫に始まり芭蕉・蕪村・一茶と俳句文學は大體系統立てられた譯である。本課は季題から見ても早春から冬に掛け殆ど四季を通じて居るし、題材に於ても天文・植物・動物・人事と多方面に互り、季節・題材共に周到な注意が拂はれて居る。

俳句の歴史は嚴密に言へば未だ殆ど調べが附いて居ないと言つて良い。芭蕉とか蕪村とか言ふ重立つた二三の俳人に就ては相當研究した人もあるが、俳句全體の歴史を文學史的に研究した人は筆者の寡聞なる未だ一人も無いと言つて差支ない。世間で普通に説いて居る俳諧史は至つて簡略な極まり切つた説話に過ぎない。それは兎に角、俳句は何んなものかを引つくるめて一口に言へば、徳川初期から明治前期に掛けて、多少の盛衰もあり變化もあるには有つたが、結局俳句は即ち芭蕉の文學であると言つて差支ない。即ち芭蕉が出て在來の俳句に一革命を企てた以來二百餘年に互る長い年月の間に數限りなく輩出した多くの俳人達は、大抵芭蕉の踏み開いた仕事を祖述して居たに過ぎない。其處へひよつこり子規が現れて、沈滞し切つた俳句に新しい生命を吹込んだ。従つて芭蕉を俳句の開祖とし、蕪村を中興の俳聖とすれば、子規は實に俳句の大成者と言つても過言では無い。此の意味に於て子規の俳句は其の句の善し惡しは兎に角、それよりも未だ大きな何物か伏在して居るのを見逃してはならぬ。

## 文字語句

## 新出文字

ナシ

## 語句と其の解説

**雪残る頂一つ**（ユキノコルイタマキヒトツ）早春の句。雪残るといふから山々はもう雪が消え、遠くの山の頂だけに白く残つて居たものであらう。斯んな景色は能く見る圖で、先づ越後境とでも想像して見たい。碧空にくつきりと浮ぶ残雪の峯、その峠を越えれば隣國で頂一つが國さかひだといふのである。『頂一つ』『空一つ』が此の句を印象的にして居る。子規らしい印象の鮮かな句である。『菜の花や小學校の（ナノハナヤセウガクカウノ）』之も印象の鮮かな句、『ひるげ時』に『瞬の静けさ』がある。『菜の花や』と置いた邊りに一面の菜の花が聯想される。田圃の中の小學校、あたりは一面の菜の花である。廣い運動場には人の子一人も居ない。ふだんは賑かであるが、今は楽しい晝食の眞最中である。蕪村の『菜の花』に於ける夕暮時の寂しさと比べて、之は陽のカン／＼と照る眞晝時の静けさ。廣い運動場のブランコや圓木の邊りに白い蝶々が一匹、ヒラ／＼と飛んで居るのさへ想像されて面白い。 **柿くへば鐘が鳴るなり**（カキクヘバカネガナルナリ）『鐘が鳴るなり』に餘音の翳々たるものがある。子規は柿が好きで、柿を食つて死にたいとさへ言つた。従つて柿の句が多い。之も其の一つである。所は法隆寺、恐らく大和巡でもした時の句であらう。古びた堂塔伽藍を前にして千數百年の昔を偲び乍ら、好物の柿を食つて居るとゴオンと鐘が鳴り響いたといふ。如何にも懐古趣味の豊かな句である。『柿くへば』の柿でそれが秋であつた事も想像される。一體俳句や和歌は何處で作つたとか、何時詠んだとか場所や地名を詮索すべきでない。作者の多くは其の環境や今迄見た経験等に依つて詠吟したものであるからである。然し此の句は例外で、『柿』といひ『法隆寺』といふ地物や個性が中心と成つて物を言つて居る。其の點を呑み込ませるのも取扱者の大切な心構であらう。 **犬が来て水のむ音の**（イヌガキテミヅノムオトノ）『水のむ音』が此の句の見所である。之で夜寒の感じが膚に迫つて來る。流石は子規、狙ひ所が頗る奇抜である。『犬が来て』といふから其の犬は多分、クン／＼啼いて今迄家の周圍を廻つて居たであらう。小犬か捨犬か、二葉亭の棄犬が思はれる。ピチャ／＼水を飲む音、夜寒の



心持を表現し得て餘蘊がない。子規(シキ) 明治の俳人にして又歌人。姓は正岡、名は常規(ツネノリ) 竹の里人・頼祭堂主人・越智處之助・升(ノボル)等の別號がある。慶應三年伊豫松山藩(久松侯)士正岡隼太の長男に生れ、父は早く歿して母方に養はれた。明治十六年上京し大學豫備門を経て帝國大學國文科に入つたが二年で退學し、以後内藤鳴雪等と俳句の研究に努力し所謂日本派を創め俳壇革新運動を起した。二十二年略血して號を子規と改めた。二十五年日本新聞に入社し程なく日清戦争に従軍記者として出發したが、病勢昂進して歸國し、以後病臥の人と成り、二十九年更に脊髄病を併發した。三十年雜誌『ホト、ギス』に筆を執り、其の率ある日本派は俳壇の中心と成つた。高濱虚子・佐藤紅綠・河東碧梧桐・夏目漱石等が其の門に遊んだ。三十一年更に和歌革新運動を起し萬葉調を唱へて根岸派を起し、伊藤左千夫之を繼いで所謂アラ、ギ一派と成つた。又寫生文を力説・試作した。三十五年九月十五日歿。田端大龍寺に葬る。 夕月や納屋もうまやも(ユフツキヤナヤモウマヤモ) 鳴雪の句風を最も能く現した句。『納屋もうまやも』に田園を思はせる。梅咲く農家の夕暮、月は花影を映して藁屋の軒に差し込んで居る。疎影横斜、月黄昏、此處では不潔な厩も納屋も全く淨化されて居る。納屋は農具等を入れて置く小屋。ものおき。うまや(厩)は馬を飼つて置く小屋。うまごや。『納屋もうまやも』に忙しい農家の黄昏時が想像される。蓋し此の句の狙ひ所も此の邊にあるは言ふ迄もない。 矢車に朝風強き(ヤグルマニアサカゼツヨキ) 五月節句の情景を句にしたもの。矢車は矢を組み合せて風車の様に拵へ、鯉幟や吹貫の上に取附けたもの。風が吹くと音を立て、クル／＼廻る。此の句も『朝風強き』の中七字が中心と成つて居る。五月の爽快な朝風に泳ぐ鯉幟のさまが見えるやうである。 夏山の木倒す(ナツヤマノタイボクタホス) 木曾か天城邊りの深山で大木を切倒す壯大な場面を想像して欲しい。『こだま(木霊)は木の妖靈。樹木の靈魂。木精。又は山彦。反響。此處は後の意。即ち山間や谿谷等に於ける聲音の反響をいひ、もとは山彦(山の神)が眞似て答へるものと信じて居たので斯く言ふ。』夏山』に深山の幽邃さを思はせ、『大木倒すこだま』に巨木の倒れる豪快さを思はせて居る。

豪宕・幽寂の句、蓋し俳味の極致を見せたものと言ふべきであらう。 鳴雪(メイセツ) 姓は内藤、名は素行(モトユキ) 弘化四年四月江戸の松山藩邸に生る。和漢學・佛敎に通じ、松山權少參事、又は學務官として各地に歴任。明治二十三年文部省參事官と成り、翌年辭職。爾來二十二年此の方たづさはつて居た常磐會寄宿舎の監督を續け、偶々舎中に正岡子規あり、之に影響され四十六歳初めて俳道に入り忽ち日本派の重鎮と成る。大正十五年二月歿、年八十。

### 指導精神

子規は明治時代に於ける俳句の革新者である。彼は蕪村の流れを汲み新體俳句を唱へ、天保の態とらしい風流や偏狹な道德觀等を排斥して俳句の一大革新を企てた。近世俳句は實に彼に依つて創始されたものと言ふべく、此の點元祿の芭蕉、天明の蕪村と相對して、明治の俳聖と稱せられるのも理由なき事ではない。明治二十五年、新聞『日本』に俳句の革新を唱へてから約六七年の間に全く天下を風靡し、鬱然明治俳句の盛觀を呈した。尋いで雜誌『ホトトギス』を發刊するに及んで、更に俳運の隆盛を來した。其の薰陶を受けた者、實に多士濟々、全國に輩出した。明治俳句の斯かる隆昌を見たのは、俳句が日本文學として他の戯曲・小説・和歌・漢詩等に譲らざる一位を占めるものである事を主張し、芭蕉・蕪村等先人の詩人的價値を闡明した彼の創見に基くものと見ねばならぬ。彼は單なる明治俳句の始祖であるのみならず、俳句の詩的地位を宣揚し確保した先覺であつた。子規は又俳句に關聯して寫生文の一體をも創始した。見聞を正確に記録し誇大なる架空の想像を排除した運動は、尙江戸文學の餘弊を受け且つ自然派文學の擡頭しつゝあつた當時の文壇に一大衝動を與へ、殆ど文壇の空氣を一新した觀を呈した。明治三十一年『歌よみに與ふる書』の發表以來、和歌の革新に専心し、『百中十首』の自己創作をも併せて世論に問ひ、遂に萬葉集復古の叫と成り、其の進歩の徑路に多少の曲折はあつたが、根岸短歌會を創設し、新聞『日本』にも募集歌を選して、是又明



治歌壇の偉觀と成つた。其の薰陶を受けた者も頗る多い。萬葉集を推稱し、尋いで源實朝・橘曙覽・平賀元義等、萬葉以後の隠れたる歌人を紹介したのも多年和歌の傳統の誤つた管見を正し、眞の文學的根據に立脚しようとしたもので有つて、和歌に取つても有史以來の創見に依るのであつた。如何せん和歌の革新に手を染めて以來、病勢日に加はり更に歩武を進める英氣を缺いた。其の他新體詩・民謡の類にも或意見を包蔵して居た様であるが、俳句・和歌に忙殺されて之を實現する暇を得なかつた。若し尙十年の歲月を許し得たならば如何なる進轉と業績を遺したであらうか。惜みても尙餘ある事どもである。

鳴雪は松山の人、少時漢學を修め、長じて松山権少參事と成り、學務官として各地に歴任し、明治二十三年、文部省參事官と成つたが、翌年官を辭し後専ら常磐會寄宿舎（松山藩の寄宿舎で本郷眞砂町に在つた）の舎生を監督した。舎生の中に正岡子規があり、其の感化に依つて明治二十五年春、四十六歳で初めて俳道に入り、「猿蓑」を精讀して句境大に進み、一歳を出でずして既に一家の風格を具へるに至つた。二十八年の頃は其の作に見るべきものが多く、舊藩以來の年長者であるのと同派中の學者である等の點から古典的な傾きがあり、又不快率易を喜ぶ風があつて頗る平明な調子を成した。従つて常に初學者の良き指導者として迎へられた。然も其の脱俗飄逸な風格と和漢佛の造詣ある長者であるとの故に日本派の中に重きを成し翁或は先生を以て稱せられた。彼は一面又新知識に對する知識慾を有し、哲學・美學等を研究して一家の文學觀を有して居た。俳句に關する著述多く、鳴雪俳句集最も世に知られて居る。

### 指導形態

#### 指導上の認識點

- 1 本課の指標は俳句趣味の啓培に在るは勿論であるが、既習の俳句教材と連絡させ、子規・

鳴雪二俳人の俳風・經歷の大體を知らせると共に、元祿から明治に至る俳句史の一般を窺はせる事も重要缺ぐべからざる着眼の一つで

あらねばならぬ。

- 2 子規・鳴雪の二俳人は明治俳壇の大立物で、其の俳境には元祿の芭蕉・天明の蕪村と一脈相通するものがある。特に子規は蕪村を宗として更に一步を進め、明治俳壇に新しい巨歩を印して居る。『雪残る』や特に『菜の花』の句の如き、之を蕪村の『月は東に日は西に』と比較する時、俳風變化の如何に顯著であるか、窺はれるであらう。取扱も亦此の見地に立脚し、各句が持つ特殊の俳趣を満喫せしめる用意が肝要であらう。
- 3 配當時間は補充教材も見越して大體三時間程度を妥當とするであらう。

#### 第一次指導

- 1 題目の指導。  
▽題目の出所を確め作品の一部を取つて題名とした現代的な手法に興味を持たせ讀心を唆るが良い。
- 2 全句の視寫。

▽先づ讀ませて一句づゝ作者名も入れて視寫させる。

- 3 視寫した句を一句宛反覆讀誦させる。  
▽存分に時間を與へ情景を豊かに想像させる。
- 4 一句毎に讀後の印象を話させる。  
▽紙片を與へテスト式に筆答させて見るのも一法であらう。
- 5 不明の箇所を質問させる。  
▽特に重要なものは教師の方から指摘して確める。  
雪残る頂一つ ひるげ時 鐘が鳴るなり  
夜寒 夕月 納屋 うまや 矢車 のぼり 夏山 こだま
- 6 指名讀。  
▽一句づゝ、人を代へて。
- 7 範讀。  
▽（五）（七五）と二聲に讀むを慣習とする事を知らせる。
- 8 話合。



- 9 句意の吟味。  
▽一句づゝ掴んだ句意を話させて見る。
- 10 低音讀。  
▽小聲で何遍も讀ませ各句の俳趣を味はせる。
- 11 ノートを纏めて提出させる。

第二・三次指導

- 1 全課の聽寫。  
▽讀合せと同時に重要語句を確める。
- 2 會讀。  
▽グループに分れ一句づゝ吟味させる。
- 3 範讀。  
▽各句の觀點に注意させて。
- 4 指名讀。  
▽中・劣生に指名し其の動向を注視する。
- 5 各句の吟味。  
▽詩情の横溢した語句や景物を拾せて。  
(1) 雪残る 頂 國ざかひ  
(2) 菜の花 小學校 ひるげ時

- (3) 柿 鐘 法隆寺
- (4) 水のむ音 犬 夜寒
- (5) 夕月 納屋・うまや 梅
- (6) 矢車 朝風 のぼり
- (7) 夏山 大木 こだま

- 6 話合。  
▽各句の俳味や句境を中心に。
- 7 輪讀。  
▽一句づゝ、座席順に。
- 8 詩形の吟味。  
▽(五)(七)(五)のリズム、『や・かな』の切字等。
- 9 各句の繪畫化  
▽畫趣と俳味の合致を志して。
- 10 演習。  
▽詩心を咬つて試作させて見る。
- 11 補充説話。  
▽子規鳴雪の經歷や業績・明治俳壇に於ける位置・其の後の影響等。
- 12 全課の暗誦・暗寫。

- 13 語句の書取・應用練習。

テスト問題

- 一、次の俳句を解釋しなさい。
- 1 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
- 2 夕月や納屋もうまやも梅の影
- 3 矢車に朝風強きのぼりかな
- 二、次の空所に適當の字句を入れなさい。
- 1 雪□る□一つ國ざかひ

- 14 テスト。

- 2 □が来て水のむ音や□
- 3 夏山の太木□す□かな
- 三、次の二句を讀較べて思つたことを書きなさい。
- 菜の花や月は東に日は西に (燕村)
- 菜の花や小學校のひるげ時 (子規)



## 第二十二 太陽

僕の望遠鏡・星の話・月の世界と巻を追うて天文學的教材が擧げられ、何れも兒童の科學的興味に拍車を掛けて呉れた。本課は其の後を承け宇宙の中でも最も關係多き太陽を語り、如上の教材を統一すると共に最終巻の讀本に有終の美を添へた編纂振りに先づ頭が下る。

太陽に關する驚嘆すべき様々の測定記録が數字的に示され、之を具體化して理解させる爲或は手近な事物に例を引いたり、又細かな計算の方法を教へたりして、天文智識が面白く誘發されて居る。然も全課を通じて驚嘆すべきは、一見太陽の様で實は然らず、寧ろ斯く迄測定が進んだ人智の進歩に驚くべきである。天文學開發の恩人ガリレオは既に學んで居る。彼以來の學究の成果は、高遠悠久な宇宙界の諸現象を机上目のあたりに觀るやう近づけて呉れる。兒童の向學心・探求慾は當然此の邊にも波及すべきは勿論である。

文の觀點は言ふ迄もなく太陽の實體に在るが、其の中核とも見るべきは百六十四頁の「太陽のやうな天體は、たゞ一つあるだけでらうか。云々」の邊りにある。即ち太陽の實體を紹介して驚異の眼を瞠らせ、「廣い宇宙には、太陽と同じやうな天體が殆ど數へ切れ程存在する。」に至つて更に彼等の神祕感を唆り、宇宙の廣大さを想像させ宇宙觀の芽生を培はうと言ふのである。實驗・觀察を基礎とし、最後は人智を超越して驚歎するの境地に導くを念とすべきであらう。

## 挿畫の印象と其の説明

百六十二頁の挿畫は太陽と地球、及び月との關係を示す説明圖で、黒地に白い圓を描いたのが太陽の大きさとすれば、中央の地球は斯程に小さい。之に對して月は更に小さく、其の軌道に依り地球の周圍を自轉す

ると言ふのである。黒點とあるのは太陽の黒點で黒點は天體觀測上重大な意義を有する。ガリレオが太陽の自轉と之に要する時間を發見し、其の廻轉する時間を約二六日と算定し得たのも此の黒點の變化を計算した結果であつた。尙太陽の衛星が太陽の周圍を一回轉する公轉週間は、水星が約八八日・金星は二二五日・地球は三六五日・火星は三六八日を要するが、是等の太陽系を一々擧げれば餘りに複雑と成るから、此處では單に太陽と地球と月との關係を示されたのであらう。

## 文字語句

## 新出文字

零

## 讀替文字

否ハイ (新出は本卷、ヒ)凡オソク (新出は卷十一、ボン)球キウ (新出は卷九、キウ)

## 語句と其の解説

太陽(ダイヤウ) 太陽系の總支配者。地球から平均一億三千万軒(三、八〇〇萬里)の距離にある。直徑一三九萬軒、即ち地球の一〇九倍。表面積は地球の一、二、〇〇〇倍、體積は一三〇萬倍。尨大なガス球で凡ゆる元素を含み、表面温度は約六、〇〇〇度(攝氏)。中心は三千萬度と推定される。光度は地球を約六萬米燭の明るさで照し、又一平方軒毎に毎分二カロリ弱の熱量を送つて居る。生命(セイメイ) いのち。

壽命。科學的に言へば生活物の示す自律的調整能力。生物は此の能力に依つて自己を維持して行くのであつて、此の意味に於て生活體は概念的には不可分的である。哲學上では古來世界觀的思索の根本動機を成すもので、近くは生の哲學の對象と成るもの。ドリーシュの如き新生氣説の立場に立つ者は、生命とは生物學的生命現象の總體と解して居るが、デイルタイの如き生の哲學者からは、生命とは體驗と理解に於て我々に現



れるもの、總體概念と規定されて居る。従つて生命の構造聯關は體驗・表現・理解の三位一體の構造を持ち、彼の生の哲學とは斯かる構造の意義を解釋する事にある。ベルグソンに於ては生命とは純粹持續を意味し、それは絶えず創造的進化を爲して發展し、過去を現在の裡に動的に含むと共に常に新しいものを創り出して行くもの、従つて之を把握するには空間的・同質的な悟性の力を以てしては不可能であつて、直觀に依つて生命の裡に躍入してのみ把握されるとする。結局生命を強調する生の哲學者は分析的な自然科学的思想では生命の本態は把握されず、生命の本態は詩人・藝術家・宗教家・歴史家の知的直觀に示現されると説く。生命の意義・價值・目的を考察する所に人生觀が生れるが、生命の意味を一定の距離から冷かに考察する場合、最近の所謂哲學的人間學が生れる。ハイデッガーの哲學的人間學は生哲學の一形態と見ることが出来る。

**源泉**(ゲンセン) 水の湧き出るみなもと。根源。もと。

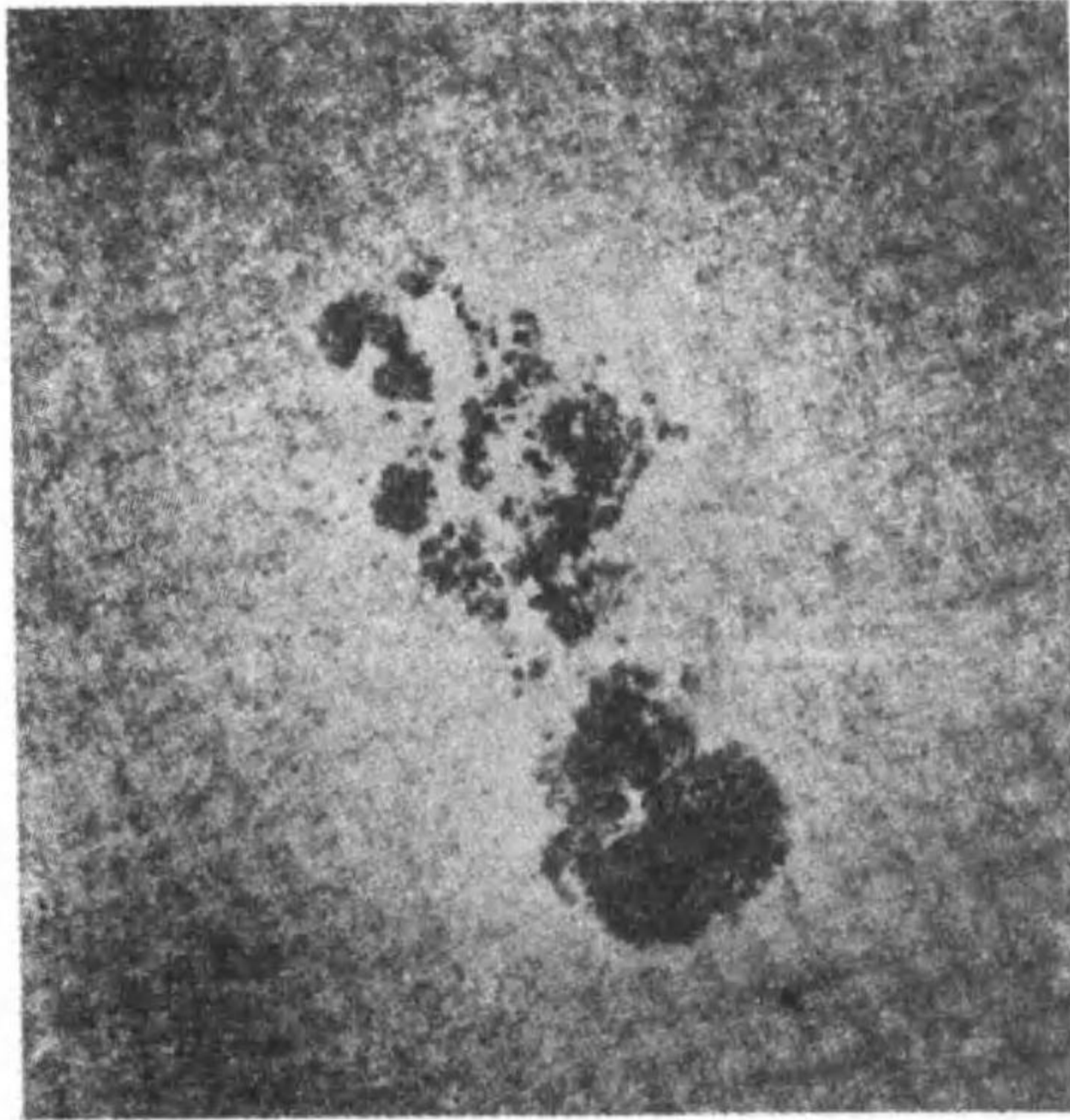
**直徑凡そ百四十萬軒**(チヨクケイオヨソヒヤンヨンジフマンキロメートル) 一三九萬軒、即ち地球の一〇九倍。

**熱量**(ネツリヤウ) 熱の多少。其の單位をカロリーといふ。熱量をはかるに用ひる器を熱量計といふ。

**もつと高熱**(モットカウネツ) 中心は三千萬度といはれる。之は何れも攝氏である。

**燭光**(シヨククワウ) 光度の單位。鯨油蠟燭が一時に百二十グレインづゝ燃えて發する光度。

**黒點**(コクテン) 太陽の光球面に時々現れる現象。光球面との對照上、一見黒く見えて居るが、實際は光輝も熱も夥しく黒點から出て居る。黒點の多くは我が地球大のものであるが、稀には其の十倍以上のものさへある。何れも皆暗部と半暗部との二部分から成り、其の形状は極めて急速に變化する。黒點の部分は光球面より凹んで居るが、溫度は光球面より僅に低い。又其の數や位置は約十一年の週期を以て變るもので、週期の初期に於ては南北とも三〇度位の所に現れるが、極大期を過ぎて終りに近づくに従つて漸次赤道に近く現れる。黒點は太陽の自轉の爲に其の自轉軸の周りに移動するのみでなく、實際太陽面上に移動する。即ち黒點は太陽面上の擾亂部であつて、水素やカルシウム其の他のガスが大小の渦巻を起して居るのみならず、黒點を包んで廣く白斑やカルシウム羊毛斑が擴つて居る。従つ



太陽の黒點

て黒點は強大な磁性を有し、長短種々の電波や電子流を四方に發散して居る。黒點週期には可成の變動があり、白紋の多寡や紅焰の分布・コロナの形状・擴がり等も之に似た變化を示すものである。一方是等の週期の地球に與へる影響も種々あるが、一般の氣象等に與へる影響は複雑で未だに能く判明しない。唯地磁氣やオーロラ(極光)や無線電波通信等に著しい影響のある事は明かである。

**つむじ風**(ツムジカゼ) 旋風。低氣壓が急に生ずるとき其の四近の高壓部から此の點に向つて螺旋狀に吹き込む風。其の風向は北半球では時計の回轉と反對であつて、南半球では之と同じである。せんぷう。

**太陽のやうな天體**は(タイヤウノヤウナテンダ

イハ) 地球に比べて太陽の質量は三十三萬倍、平均密度は四分の一、表面重力は二八倍。此の様に地球に比べると頗る大型の天體であるが、宇宙全體から觀れば一箇の恆星に過ぎない。

**無數に輝く星**(ムスウニカマヤクホシ) 天文學者の研究に依れば、地球の附近即ち光が十萬年で地球に達する所にある星の數は一十億といふ多數に上つて居る。

**宇宙**(ウチュウ) 此處の宇宙は天體宇宙を意味する。天體宇宙の研究は古來天文學の主要目的の一つであつたが、近代理學的に見て最も代表的・典型的な宇宙論の開展を見せたのはバビロン・希臘以來であつた。バビロンの宇宙論は地平蒼穹説であつたのが希臘のピュタゴラスに至つて地



球天球の説を唱へ、降つてトレミーに至り所謂天動説完成。其の後永く新發展を見られなかつたが、十六世紀にコペルニクスが出て地動説を唱へ、次でケプレル・ガリレオを経てニュートンに至り、太陽中心の力學的宇宙が考へられ、一時期を劃。十九世紀に入り恆星の研究が進むと共に、恆星宇宙の系統が漸次明白となる。今日大宇宙の單位は我が銀河系であつて、直徑約三〇萬光年の範圍内に約三千億の輝星と暗星とが含まれ、略々扁平形に全體が廻轉して居る。其の中心は射手座の方角へ約四萬光年の距離にある。然るに近年渦形星霧の研究が進み、それに依つて是等のものは皆銀河外の大星群である事が知れた。今日まで此の種銀河外の星霧は殆ど凡てが大きい視線速度を以て退去しつゝある事が測定されて居るので、此の運動速度を材料として星霧迄の距離を算出する事に成功。之に依り今は一乃至二億光年といふ遠距離に渦形星霧のある事が知れた。然も星霧は既に幾千萬箇の多數が知られて居るのだから、今後尙遠距離の測定も成功するであらう。現に銀河外の星霧の一齊退行運動に就ては、之がアインシュタイン式の宇宙不安定に起因するものであるといふルメートル等の理論に依つて解決され、今日は大宇宙が爆發的な速度を以て漸次擴大しつゝあると信ぜられて居る。

## 資料

## 參考

## 太陽に就て

太陽は、地球に最も接近した超高温發光體で、太陽系の中心天體である。そして太陽は宇宙に於ける天體へ絶間なく熱と光を送り、地球上のあらゆる生物には缺くべからざるものである。古代から太陽に就て種々の研究が續けられたが、崇敬の念を抱き、或は驚異的とし、神祕的な物として見て居た古代に於ては、全世界の人類が一樣に太陽を以て信仰崇敬の焦點とし、絶對的に神聖視した。我が皇國の旗章が太陽である事

は言ふ迄もなく太陽を崇敬し神聖視した結果の具象化である。天文學創始時代ガリレオが現れて望遠鏡に依り初めて太陽を科學的に觀測するに至つた。然し本格的に組織立つた研究が起つたのは十九世紀の中頃から事で、様々な苦心を重ねた結果、漸く其の正體が判然として來たのである。先づ太陽までの距離を測定するには種々の方法が行はれて來た。地球に最も接近する惑星を利用する法・光行常數を利用する法・恆星の視線速度に依る法・月の攝動に依る法等である。太陽の大きさは右の距離測定法の結果から得られたが、地球との比較は表面積が千二百倍・體積が百三十萬倍である。内部の構造に就ては今尙各國の權威者に依つて研究されて居るが、全部瓦斯状のものであると言ふ結論のみは一致して居る。現在太陽中に存在する元素で既に探知されたものだけでも五十種に近く、中でも多量に存在するのは水素・ナトリウム・マグネシウム・アルミニウム・珪素・カルシウム・チタン・クロム・鉄・ニッケル・ストロンチウム等である。太陽が自轉する事を發見したのもガリレオで、之は黒點を發見した結果黒點の移動に依り其の週期を約廿六日と算定し得たが、黒點に就ては東洋に於ても古くから支那・朝鮮及我が國にも古い記録があり、不吉な前兆としたり幾多の傳説が生れたりして居る。外觀としては種々雑多であるが、大體圓形のものも多く、大きさも様々なものがある。最初急激に暗黒な斑點が現れ、次第に増大して行くと之を取捲く様な薄い黒色の縁が見られる様に成り、其の数も増して互に結合して行く。其の發生點は太陽の面上の特に白斑が擾亂された様に見える邊で、壽命としては種々の例外があり、數時間のもの、數日間のもの、數ヶ月のもの、一年餘のもの等種々記録されて居るが、通常四・五十日間位であらうと推測されて居る。黒點を毎日觀測して居ると東から西に移動して居るのが判るが、之に依つて太陽の自轉が發見され、一八六〇年にはカリンソンが太陽の赤道部分以外の部分より幾分早く自轉する事を發見して居る。黒點の本體に就ては太陽の大氣中に浮ぶ雲であるとか、太陽面に浮ぶ固形物であるとか、流星又は光線の屈折異常現象だとか云ふ多數の説があつたが、太陽の他の部分に見出さない酸化チタンニウムの化合物が黒點内に現れる事から、太陽面に於ける大渦動に依る現象であ



らうと推定されるに至つた。黒點の發生に依る影響にも種々の異説があり、晴雨等の氣象方面への影響は今尙研究されて居るが、極光に密接な關係があるのは勿論で、最近では黒點の増大した年は農作物が非常な好成绩を示すと云ふ事實から、氣象に對しても重大な影響を及ぼす事が想像されて來た。尙太陽それ自身の壽命は大體どの位のものかと言ふと、各人各説確かな判斷は出來ないが光と熱との蓄藏率を計算し、エネルギーを供給する原因等を發見した結果、太陽のエネルギーが半減する迄には約七兆五千億年は掛かるであらうと言ふ説が信じられて居る。太陽の觀測法はガリレオ以來望遠鏡の發達に連れて次々に新しい精巧な物が發明されてをり、輻射エネルギー・位置・表面の三種の測定法に大別されて居る關係上、各々其の目的に依つて測定器も異つたものを使用する譯である。太陽の測定は天文学上殊に重要な問題であつて、其の専門觀測所も多數建設され、米國のウィルソン山・佛國のムードン・印度のコダイカナルの三天文臺が有名である。

### 指導精神

太陽は我々人類を始めとして地球上の凡ゆる生物の生命の依つて發する根源であつて、雲霧の發生・河水の奔湍其の他地球上に起る各種の現象は大部分太陽の光熱に依る。殊に輓近太陽の黒點は地上の諸現象と密接の關係あることが發見され、愈々其の研究は必要と成つて來た。此の我々と切實な關係ある太陽は太陽系の中央に位置し、地球からの距離は一月の初旬に最も近く、七月の初旬に最も遠いが、平均すると約一四九五〇萬軒、其の赤道半徑は約六九五五三軒で地球半徑の約一一〇倍に相當する。表面の面積は地球の一二〇〇〇倍、容積は一三〇萬倍に當り、質量は三三三四三二倍、其の密度は地球の三・九分の一、水の一・四倍で、至つて稀薄なものである。又太陽の光は地球上ではそれに直角の平面に一分間一平方裡に對して一・九五カロリーの熱を與へ、太陽自身の温度は攝氏六〇〇〇度位で、人工を以て造り得る最高温度を遙に凌駕し、其の光度は標準燭光の七五六〇〇倍に當り、恒星の等級に換算すればマイナス二六・七等星と成り満月の六

〇萬位で、恒星中の最大明星たる天狼星の一〇〇億倍に該當する。晴れた日に油煙で煙らした硝子片を透して太陽を望む時は光つた圓盤状のものを見るであらう。之を光球と稱へ、其の中央部は光つて居るが、周邊に到るに従ひ次第に朦朧と成つて居る。それは光球が深い雰圍氣を以て包まれて居るからであつて、周邊に到るに隨ひ吾人の眼に至る光線が多く吸收されるからである。光球の直ぐ外側を包圍する部分は反彩層と名づけられ、厚さ八〇〇軒程の層で氣體から成り立つて居る。此の反彩層の上部を蔽ふ層を色球と呼び、其の厚さは八〇〇軒乃至一六〇〇軒、主として水素・ヘリウム等の氣體から成り、之は彼の皆既日蝕に際し太陽を蔽うた月の暗影の周圍を取り捲いて非常に美しく赤色に輝く光の環である。此の色球の所々から上方に向つて噴出するものを紅焰と呼び、僅少の時間に驚くべき高さ迄上騰する事があり、時には太陽の表面上八〇萬軒以上の高さに迄達する事があるといふ。黒點は時々太陽面上に出現し、二つの部分から成り中央の比較的濃い部分を半影といふ。其の形状は一定しないが、數千軒から數萬軒に達し、單獨に現れる事もあるが又時として群を成して現れることもある。黒點は何れも太陽の東の縁に現れ、何れも揃うて西の縁に没するもので、之からも太陽の自轉が推測される。即ち太陽は二六日程で一自轉することが解つた。黒點は太陽面上に大概何時でも現れて居るものであるが、多く見える年と然らざる年とがあつて、平均一年乃至一三年で極小及極大を繰返す事が分つて來た。極小を過ぎて愈々之から譯山現れようとする時には、南北の緯度の高い所から現れ初め次第に赤道に近く現れ、其の邊で段々數が減じて行き、又再び兩極附近から現れ始めるものである。黒點は大きいのは煙らした硝子片を透して肉眼でも見えるが、双眼鏡又は小望遠鏡で觀望するものには太陽の像を一度之に通過させ、後方に立てた白紙に映じさせて見ると黒點は能く其の白紙の表面に映ずる。近時黒點は直接に地球上に起る現象と關係あるものなる事が知れ、學者は此の方面を盛に研究する様になつた。突如として磁針の狂ふ磁氣嵐も太陽の黒點の頻繁に出現する時に多く起る。これなども兩者の間に確に關係があると見られる。又極光として兩極地方に於て天空上に一種の稀薄な光が見えることがあるが、是



又太陽の黒點とは其の消長を同じうするものである。其の他或地方の降雨・暴風雨等から生物の發育狀態まで、此の黒點の消長と何等かの關係あるものと思はれる。黒點の起因に就てはまだ定説は無いが、或は地球に於ける旋風の様なものであらうとか、或は又太陽の表面から噴出された物質の冷却下降に依ると言ふやうな説もある。何れにしても黒點の出現が頻々たる時は太陽活動の最も旺盛な時期である事は確かで、黒點の烈しく出る時は全體として太陽は能く光る事となる。黒點の外に太陽面上には白紋と呼ぶ能く輝くものも出現する事もあり、其の他コロナは皆既日蝕の時にも見得る太陽の最外部を蔽ふ最も稀薄な氣體で、非常に高さまで達して居るものである。尙太陽中にある元素は其のスペクトルに依つて檢べられた所に依ると、カルシウム・鐵・水素其の他の各種のものを含み、ヘリウムの如きは實に太陽中に初めて發見されたもので、ヘリウムの名は蓋し太陽素の意である。尙太陽中にある單一の物質の發する光、例へば水素とかカルシウムとかのみの發する光で太陽面上を撮影することが出来るので、之を分光寫真といふのであるが、此の寫真に依ると各元素が太陽面上に如何様に分布されて居るか知られるのである。水素の如きは黒點附近では渦狀形に分布されて居るのを見ても、黒點は一種の渦狀運動の結果出來たものであらう事が推知できる。今後太陽の研究は益々盛大と成る可きであり、續々と其の神祕が解かれ、従つて又太陽と地球、延いて人生との關係も一層明瞭に了解されるであらう。本課は既習の『星の話』や『月の世界』と連絡させ、取扱ふべき教材で、天體に關する天文學的知識は之で一通り完成した譯である。

指導形態

指導上の認識點

1 本課の指標は我々に至大の關係ある太陽の實體を明かにし、天體の神祕・宇宙の廣大さ

に就て考へさせ、科學的探究趣味を養ふと共に宇宙觀の芽生を培ふにある。

2 天體に就ては既に星の話・月の世界等順を

追うて學習し來り、此處で太陽を學んで天文學的知識は一通り完成する譯であるから、指導に際しては是等既習教材と連絡させ、題材精神を全からしめる心構が大切である。

3 文は科學的知識を平易に説いた一種の説明文であるが、引例が頗る巧みであり、叙述が極めて行届いて居る。従つて無用の干渉を避け自力に依つて學び自力に依つて理會し、研究すべき問題を各自に發見させ教師は相談相手と成り之に對して解決を與へてやれば良い。斯くて各自の力に依り學び得た知識は口頭又は表解等の手段を以て發表させ讀みの徹底を期すべきである。

4 本課は大體四時間見當で如上の指導を完了する様立案するのが妥當であらう。

第一次指導

1 題目の指導。  
 ▽板書して讀ませ太陽に關する既有觀念を整理してから讀みに入るが良い。

2 自由學習。  
 ▽各個に研究のプランを立て、自學させる。

3 話合。  
 ▽前項の自學に依つて得た知識を中心に。質疑應答。

4 新出文字は辭書を繰らせて索引させる。  
 否 凡 球 零  
 ▽難語句は先づ類推させてから指導する。  
 人類 否 あらゆる 生命 源泉 存在  
 一大火球 もちろん 距離 ピンボンの  
 球 熱量 燭光 黒點 つむじ風 週期  
 天體 結局 無數 宇宙

5 默讀。  
 ▽文の觀點や興味深い箇所を書取らせる。

6 太陽の特異性を拾はせ各自の所感を述べさせる。  
 ▽特に人生との關係・其の大きさ・黒點等。

7 挿畫の觀察。  
 ▽何處を見せたものか、讀本に何う出て居るか等。



**太陽**

此の大きな太陽が一月と同じ大きさに見える  
地球から↓ **非常に遠い** 一億五千萬軒  
(月への距離の約四百倍)  
一時間三百軒の飛行機で 五十七年かゝる

すばらしい熱量 表面 約六千度  
内部 もつと高熱

光の強さ 殆ど言葉で言ひあらはせない  
燭光ではらはすと三の次に零を二十七つけたもの

太陽の **黒点** 濃い色ガラス 表面にごま粒  
表面のつむじ風 地球より大きい  
数や大きさ(十一年が週期) 地球の十数倍

太陽のやうな天體は一つでない  
太陽は 遠い所から見ると銀の砂子  
近いかから大きく見える 小さな星の一つ

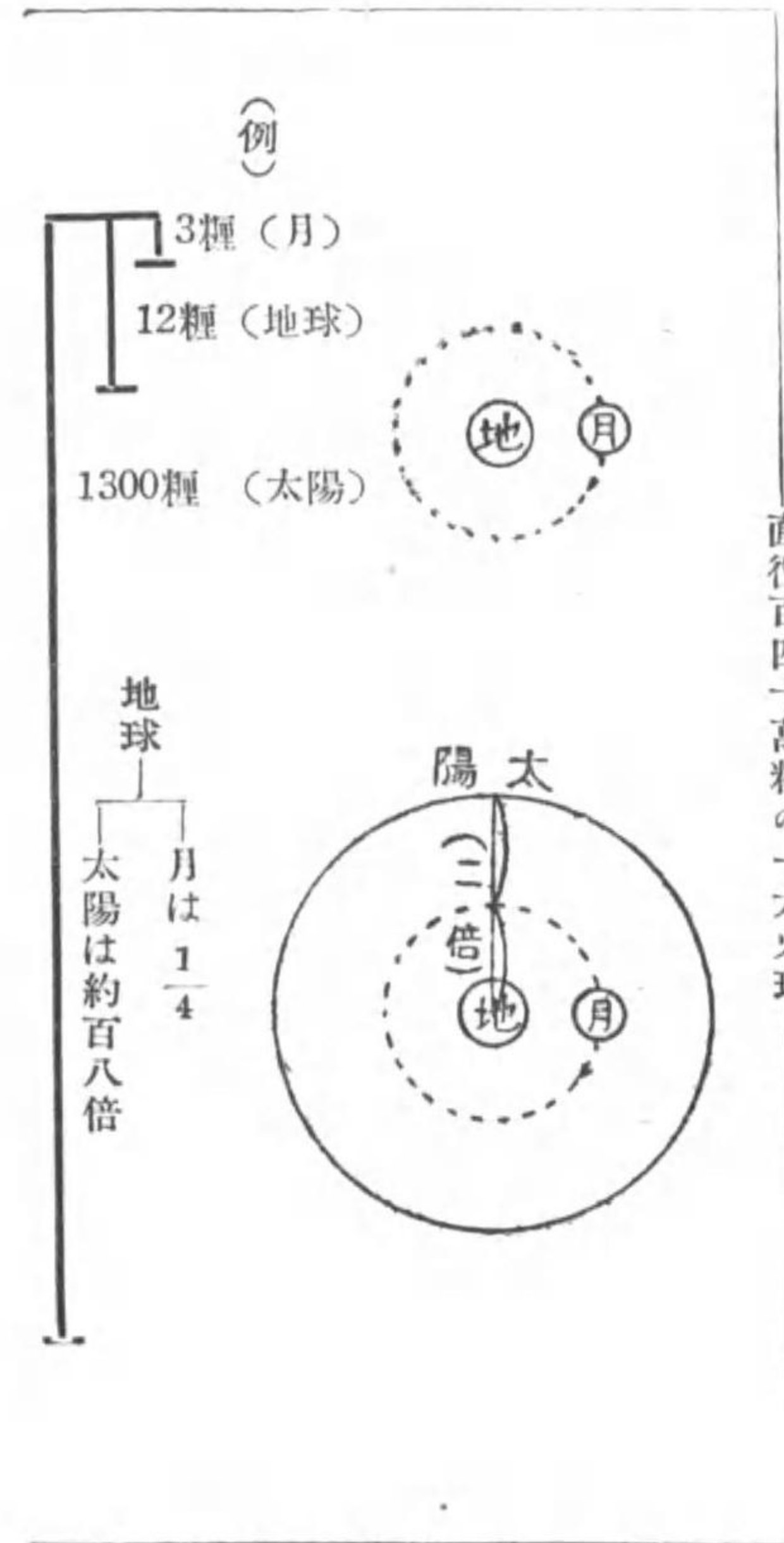
広い宇宙 太陽のやうな天體が無数  
太陽の数百倍もある ↓ **驚く**

泉源の命生

- 8 指名讀。
- ▽適宜に句切つて、數名に。
- 9 低音讀。
- ▽小聲で反覆通讀させる。
- 10 ノートを整理して提出させる。

**第二次指導**

1 輪讀。



- 2 指名讀。
- ▽一句切づゝ、尻取式に。
- 3 話合。
- ▽讀んだ兒童に次を指名させるのも面白い。
- 4 逐次研究。
- ▽頃合を見て次の文圖を謄寫して配布する。



- 5 グループ研究。  
▽前項の文圖を中心に。  
通讀練習。
- 6 ▽個讀に自由讀を交へて。  
演習。
- 7 ▽色ガラス又はいぶしがガラスで黒點を觀察させ結果を話合はせる。
- 8 默讀。  
▽文意の存在を探らせる。
- 9 話合。  
▽把捉した文意を中心に。
- 10 低音讀。  
▽小聲で反覆通讀させる。
- 11 ノートを纏めて提出させる。

第三次指導

- 1 輪讀。  
▽一句切づゝ、座席順に。
- 2 會讀。  
▽グループ毎にプランを立てさせて。

- 3 話方練習。  
▽驚異感を持たせ解說的に。
- 4 問題の學習。  
▽星の話や月の世界と連繫させ、先づ問題を作製させて。
- 5 學習事項の整理。  
▽内容方面では太陽の實體・人生との關係・月と地球との比較・宇宙の廣大さ等。形式上では解說的説明文の様式・姿態・機構・措辭等。
- 6 補充說話。  
▽太陽系・天體・宇宙の神秘等。
- 7 朗讀練習。
- 8 視寫・聽寫練習。
- 9 新出文字の書取。
- 10 語句の應用練習。
- 11 テスト。

テスト問題

一、次の語句に番號を附け正しい順序に直しなさい。

- (1)
  - 黒いごまのやうなものが
  - ガラスを通して
  - 又は
  - 太陽を見ると
  - 見えることがある
  - 濃い色ガラス
  - 表面に
  - 黒くいぶした
  - 太陽より小さいもの
  - 又太陽の
  - 太陽とほゞ同じ
  - すばらしいものが
  - 星の中には
  - 大きなものもあるが
  - 數百倍といふ
  - あるのである
- (2)

二、次の漢字を使って熟語を作れるだけ作りなさい。

- 1 飛( ) 2 通( ) 3 物( )
  - 4 増( ) 5 期( ) 6 源( )
  - 7 數( ) 8 點( ) 9 球( )
  - 10 倍( )
- 三、次の漢字は何畫か數へなさい。
- 1 離(かく) 2 零(かく)
  - 3 陽(かく) 4 熱(かく)
  - 5 燭(かく)



由來我が國民の常として奈良朝・平安朝の頃には支那の文化に心酔し、幕末から明治に掛けては泰西文化に陶酔して祖國の文化を自から卑下する弊風があつた。其の徳川中期に支那は勿論西洋諸國を物色して勝るとも劣らぬ數學の天才關孝和の如き科學者が有つたのは頗る快心事であり、我々の意を強うするもので有らねばならぬ。孝和の存在が徳川の當代に於て差したる問題と爲れなかつたのは如何にも不思議であるが、之は其の當時外國文化と比較し研究する事が出来なかつた故で、學者としての尊嚴が認められ出したのは日本數學史が完成された極く最近の事である。

關孝和こそ日本は勿論世界に初めて高等數學を發明した鬼才であつた。當時何等の研究機關も無く彼を導く何物も無かつた時代に在つて、世界の大科學者たるニュートンやライブニッツの向ふを張つたのは偉とせねばならぬ。然もニュートンやライブニッツには彼等を教へ導く師もあれば完備した研究機關も有つたが、孝和は幼穉極まる算木を並べて居る中に次から次と數理の奧義を發見し得たのだ。我々日本人の祖先に斯かる偉大な科學者を有して居たのは、我々の誇でもあり又興奮劑でもあらねばならぬ。今や列強に伍し世界の先進文化國と雌雄を争ひつゝある我が科學日本は、獨り孝和を誇とするのみで無く、更に進んで之を凌駕し奮勵一番祖國に貢獻する心意氣が肝要である。

科學日本の傳統は既に江戸時代に溯る事が出来る。即ち田中儀右衛門は幕末に萬年時計を發明し、更に火消唧筒を發明した。二宮忠八は世界最初の飛行機を製作し、屋井先藏は明治中期に世界最初の乾電池を發明し、尙電氣時計をすら考案して居る。明治の末期豊田佐吉が自動織機を發明して世界を驚かせたのは既に學ぶ所、我が國にも科學界の先賢は相當にある。本課の關孝和は其の最も偉大なる先覺者であり、日本が誇る世

界の大科學者たるは言ふ迄もない。

### 挿畫の印象と其の説明

百六十九頁の挿畫は和算に於ける算木の並べ方を數字と對照して示したものである。算木は算器とも書き、單に算・策・籌の名稱も残つて居る。此の挿畫には見えないが、一の場合には算木を縦に置き十の場合には横に置いたものである。現代でも易者・占者の類が算木を用ひ、「お年は幾つか」と尋ね、例へば廿三歳と答へれば此の挿畫の形式通り二三と算木を並べる。寅年生れなら干支の三番目で三と置くと言ふ風に何の變哲も無いが、現代人は既に和算の記數法を忘れて居る故、不思議な呪ひの様に思つて之を眺めて居る。易斷の看板にも算木を並べたものを能く見受けるが、和算の算器である事を知る人は稀である。算木の補助用具に五十本の筭がある。筭は後に筭竹と稱して易斷の専用具かの如く扱はれるに至つた。和算に於ける算木は大體アラビヤ數字の記數法と殆ど同一である事を知らねばならぬ。支那でも日本でも算木に依つて加減乗除は勿論、一次聯立方程式をも作つた。算木に依る開平・開立の算法を推し進めれば二次・三次の方程式の解法とも成り、更に高等數學の領域に迄進み其の處理方法は驚くべき巧みなものと成る。關孝和の數學は算木に依り今日の筆算の方法を發明し、世界數學の最高峰に迄達したと言はれて居る。

### 文字語句

新出文字

算 創

讀替文字

立 (新出は卷二、タツ)

承 (新出は卷五、ウケタマハル)

磨 (新出は本卷、ミガク)



語句と其の解説

關孝和(セキタカカズ) セキカウワ。本朝數學開流の祖。通稱は新助。孝齊又は自由亭と號す。上野國藤岡に生る。(一説に江戸に生ると) 高原吉種に學び、將軍徳川家綱に仕へて納戸組頭と成る。天元術を改良して歸源整法(後の點竄術)を、又圓理術を發見したと言はれる。前者は今日の初等代數學に、後者は微積分學に類似する。其の他約術・兩一術・翦管術・整數術・招差術・塚術・綴術・角術・適盡法等を得た。著書・門弟等多數。高弟に荒木村英・建部賢弘等がある。墓は東京牛込辨天町淨輪寺にある。和算(ワサン)算盤を用ひ、九九で行ふ算法。たまざん。洋算の對。支那から數學を(シナカラスウガクヲ) 欽明天皇の御代支那から易博士と曆博士とが來朝したと傳へられ、推古天皇の御代には百濟から曆に關する書物・天文に關する書物、又方術・遁甲の書物が獻上され、舒明天皇の御代には支那の度量衡を採用したと傳へられる。(別項參照) 算木(サンギ) 筧竹を以て占ふ時に用ひる六箇の方柱狀の木。各陰陽あり、三箇は二面に中を凹め陰の象とし、他の三箇の凹なきものを陽と成す。筧竹で數へ出して陰陽を知り、横に下から順次に爻を作り、卦の象に依つて吉凶を占ふ。算數では之を算籌ともいふ。大きき方四耗・長き三耗の方柱で檜材・櫻材等で作リ、總數二百箇に及ぶ。其のうち百箇は赤くて正(加)を、残り百箇は黒くて負(減)を示す。之を厚紙や木で作リ碁盤目の様に幾多の直線で正方形を劃した盤上に排列・進退して數値を算出する。算木の名は和算の點竄法(代數)に用ひる正負の符木に似たるより言ふ。加減乗除(カケンジョウジョ) 赤色の算木は加を表し、黒色の算木は減を表す。之を横にした際は五、堅にしたときは一・十又は百を表す。之を平板上に配列して進退せしめ、所要の計算を行ふ。和算では之に 一 二 三 四 五 六 七 八 九 の表數を附し、之を盤面に排列して演算する。開平(カイヘイ) 或數又は或式(代數式)の平方根を求める算法。正數aの平方根の中、正負の方を表すにそれく記號を $\sqrt{\quad}$ 或は $\sqrt{\quad}$ を用ひる。即ち正數の平方根は正負二つあるが、絶對値は等しい故、一方を求めるも他方は直に得られる。基數を自乗せる一一(一の

二乗)が一、二二(二の二乗)が四、三三(三の二乗)が九等々は開平九九として一般にも知られる。開立(カイリツ) 或數又は代數式の立方根を求める算法。一一(一の三乗)が一、二二(二の三乗)が八、三三(三の三乗)二十七等々は開立九々として知られる。試みに整數 17576 の立方根の求め方を例示する。

	a	b	
	2	6	1
(2)	a <sup>3</sup> .....	17   576	)
(3)	3a <sup>2</sup> .....	8 000	
(4)	(3a+b) <sup>2</sup> .....	9 576	
	[3a <sup>2</sup> +(3a+b)b] b...	1596 × 6	
		→ 9 576	
		0	

(1) 先づ與へられた整數を一位から左へ三桁毎に區切ると其の立方根の整數部の桁数がわかる。右の例では二桁、且つ根の第一項は2。故に此の數をa+bの立方とすると、aは20である。(2) 與へられた數かa<sup>3</sup>=20<sup>3</sup>を減じ、剰餘9576を得。(3) 3a<sup>2</sup>=3×20<sup>2</sup>=1200より剰餘9576を除した整商7はより小ならざる筧である。(4) 次に[3a<sup>2</sup>+(3a+b)b]bにb=7を代入すると此の値は剰餘9576より大となる故、b=6とし、試みれば[3×20<sup>2</sup>+(3×20+6)×6]×6=9576となるから求める立方根は20+6=26である。實際には點線から左の式は書かずに運算する。之を算木でやるから感心させられる。代數學(ダイスウガク) 數字と代數の記號とに依つて數の性質及び關係を攻究する科學。四則算法の理論を説く數學の一部門で、其の包括する範圍は極めて廣いが、數或は抽象的數の理論・方程式及び其の他の式の理論・群及び體の理論等が其の主なるものである。代數の名は方程式の項を移すの意に出で、整然たる方法を其の特長とする。